
東方幻想録

霊天玖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方幻想録

【Nコード】

N9802S

【作者名】

霊天玖

【あらすじ】

小さな村に平和に住んでいた風也。その過去には幻想郷の者が絡んで居た。そして風也はスキマに導かれ幻想郷に迷い込んだ。その者達に会い、恩返しが出来たのか?!そして幻想郷で生きて行けるのか?!異変に次々巻き込まれ解決まで行き着くのか!

PCサイト「TINAMI」に同じ東方幻想録がありますがそれは私が投稿した作品です。PCでも同じ物を読む事が出来ます。

追記・感想があると作者はやる気が出ます。感想プリーズ

序章 幻想郷入り（前書き）

この小説は不備な点が多数あると思いますがそこはご了承ください承願いたします。

序章 幻想郷入り

ある日、森の中を一人で歩いている者が一人居た。

俺は翔木風也「しょうきふうや」、小さな村に住む青年だ。俺は幼い頃、この森で道に迷った事があった……だが二人の女性に案内して貰い、森から出れた……

……数年前……

「ぐすつ、うえええん……」

森の中で小さな子供が泣いて居た。その小さな目にいっぱい涙を貯めて。

歩いても歩いても景色が変わらない、その小さな子供には考えられないほど歩いたはずだが出れなかった。

「ううう……かえりたいよおお……ぐすつ……うわああああん
「!」」

子供は足を止めその場で泣き出してしまった。

その時……

「おやおや、どうしたんだい?こんな所で」

「多分此処の森で迷ったのだろう、人間界の森だが迷いやすい所らしいからな」

帽子のを被った女性と背の高い女性が子供は横に居た。

「ぐすっ……うん……ここから出れないの……」

子供は首を縦に振った。

「そうかそうか、なら私が森の外まで案内してあげよう。手を握って行こうか」

「うん……うん……」

そして子供は出してきた手を握り、歩き始めた。そして10分も歩くと森の外に出れた。

「さあ、出れたね。良かったねえ」

そして笑顔で子供の頭を撫でる。

「あ、ありがとう……」

そして子供は自分の家に向かって走り始めた。
そして帽子を被った女性は悟ったかのように

「うん、じゃあ【またね】」

その言葉で子供が振り返ると二人の姿は消えていた。

.....回想終了.....

そんな事があり、俺は今生きていられる。あの二人は俺の命の恩人、忘れるわけがない。また会って礼が言いたい……

そして森の奥まで歩き、少し開けた場所に凄く傷んでいる古い神社が建っていた。

「こんな所あつたんだな……それにしても古い神社だ……」

風也は傷んでボロボロな神社の周りを回り観察していた。

「ん？神社の中に嫌な感じがする……」

怪しげに神社の正面の襖を開けると……目が大量に見える物体が浮いていた。

「なっ！なんだこれ?!」

その物体から腕の様な物が突出し風也を捕まえる。

「ちよっ！は、離せ!!!うわあああああああああ!!!」

その物体に引きずり込まれ風也はその場から姿を消し、その物体も

神社から消え去った。

序章 幻想郷入り（後書き）

祝第1話ですね。

これからもこの東方幻想録を書いて行きたいと思えます。閲覧や感想などをしてくれるとありがたいです。

2章 スキマ内部（前書き）

前回のあらすじ

俺は神社の中にあつた物体に引きずり込まれ変な空間に来てしまつた………

2章 スキマ内部

「何だよ……此処……普通じゃあり得ない……」

風也は戻る道を探していたが見つからなかった。

「仕方ない……進むしか無いのか……」

戻る事を諦めとりあえず前に進む事にした。すると……

「あらあら、貴方が送られて来た人ね。という事は幻想郷に何かの縁がある人かしら？」

目の前に傘をさしている人が居た。

「あ、あんたは誰だ？」

「私は八雲紫……そして貴方の後ろに居るのが八雲藍よ……」

指で指された方向を見ると風也の後ろに人が立っていた。いや人では無いな。尻尾がある……

「藍も悪趣味ねえww急に後ろに出るなんてねw」

「紫様も人の事は言えませんでしょうに……」

「あんたらは何が目的だ……」

風也は警戒するしか無かった。非常識な事が立て続けに起きたのだ

……風也は動揺していた……

「そんな身構え無くても良いわよ、まず貴方が今から行く事になるのは幻想郷という場所よ」

「幻…幻想郷？何だそれは……」

「詳しい事は歩きながら聞きなさい。藍、その人を任せたわよ」

「分かりました。ではこちらに」

藍に連れられ歩き始めた。そして俺は藍に質問をした。

「幻想郷ってどんな所なんだ？」

「幻想郷は人間、妖怪、妖精、神霊などが共存している所よ」

風也はその言葉に驚いていた。その幻想郷に人間が住んでいる事を聞いて。すると藍が

「此処のスキマだ、私に着いて来て欲しい」

風也を引きずり込んだ物体と同じ物を藍に着いて行く様に潜った。

潜り終わり、風也の目に入った光景は広く綺麗な森と一軒の家だった。

3章 八雲家（前書き）

前回のあらすじ

風也は八雲紫に出会い、幻想郷の存在を知った。そして八雲藍に連れていかれた場所は森の中の一軒の家だった。

3章 八雲家

「此処が私達の家だ、さあ遠慮無く上がって」

「あ、ああ。よろしくな……」

風也は藍達の家にあがり寛いでいた。すると……

「藍しやま~~~~~!!」

「ごはっ！ち、橙は何時も元気だねえ……」

小さな子が藍に勢い良く突っ込み、藍の鳩尾に直撃した様だった。

「あの〜、お取り込み中ですが、その子は？」

「そうだ、自己紹介をちゃんとしておかないとね、私は紫様の式神、八雲藍。そして橙は私の式神よ」

「お兄ちゃん、よろしくね〜」

橙という子は無邪気に俺に戯れてき、何故か持っていた猫じゃらしなどで一緒に遊んであげた。

「猫じゃらしだあ〜」

2時間は経っただろうか……橙は遊び疲れて寝てしまった。ずっと

戯れていたから仕方が無いか。

「藍さん、橙ちゃん寝ちゃったけど寝床は何処かな？」

「呼び方は「藍」だけでさんは要らないわよ、橙の布団はその部屋だから寝かしておいてくれる？」

「分かった、此処だな」

風也は疲れて寝ている橙を布団に寝かせ部屋から出て部屋の襖を閉めた。

「とりあえず幻想郷を回って見ると良いわね。え？心配そうな顔しなくても良いわよ、私も行くから」

「ああ、その方が気が楽だ……」

「とりあえず博麗神社に行きましょう」

「ああ……」

そして俺は藍と博麗神社という場所へ向かった。

俺の幻想郷の最初の目的は「幻想郷に馴染む」事になりそうだ。

4章 博麗神社(前書き)

前回のあらすじ

俺は橙という子と出会い少し時間が経ってから藍に付いて行き、博麗神社という所に向かって行った。

4章 博麗神社

そして俺は藍に幻想郷の者は全員飛べる事を聞き、飛べない俺は藍に持ってもらって博麗神社に向かった。

「ところで、その博麗神社って所には誰が居るんだ？」

「博麗霊夢という人間の巫女よ……ちょっと金にはうるさいけどね。まあ会ってみれば分かる」

「人間……か……」

そして藍は神社前で着地し、神社敷地に足を踏み入れた。

「ん？誰だ？霊夢ー！誰か神社に来てるぞー！ってあれは八雲藍と……誰だ？」

魔法使いの様な女性が人を呼んでいた。

「何よ魔理沙……うるさいわねえ……って藍じゃない、あんたが此処に来るなんて珍しいわね、で隣は誰？」

霊夢と呼ばれている巫女は藍と風也を見て聞いた。

「博麗の巫女も相変わらずね……隣は風也という外から来た人間よ」

「翔木風也と言います。よろしく。」

「風也、夜になったら迎えに来るわ、それまで巫女達と話してて。橙もそろそろ起きる頃だろうし」

「分かった。ここでゆっくりしてれば良いって訳か」

藍は飛んで橙の居る家に向かった。

「ふー……とりあえず此处で話すのもアレだし、神社に入りなさい。」

霊夢と魔理沙と風也は神社の中に入り座った。

「本当に幻想郷の外から来たのかつ？外の事教えてくれないか？」

魔理沙は興味津々で聞いて来た。

「ああ、元々此処の外に居ただけだな……」

「魔理沙、とりあえず自己紹介だけでもしなさいよ……」

「あ、ああ！そ、そうだな！私は霧雨魔理沙「きりさめまりさ」、人間の魔法使いさ」

魔理沙は慌てて自己紹介をした。

「私は博麗霊夢「はくれいれいむ」、この神社の巫女で魔理沙と同じ人間よ」

「二人ともよろしく。」

改めて挨拶した後、話は再開した。

「そついや外からって事は風也は早苗と同じなんだな」

「早苗？誰だ？」

聞いた事の無い名前を聞き疑問になった。

「守矢神社の巫女よ。おまけに神二人があそこには居るのよ。幻想郷のお賽銭があつちに流れてるのも同然だわ……」

霊夢は悔しそうな顔をして呟いた……

守矢神社か……明日行ってみるか……？と風也はふと思った。

すると頭に既視感が出て来た感じがした……

何なんだ……今の違和感……

その後は夜まで外の話や幻想郷の話聞いていたら藍が迎えに来ていた。

そして藍の家に着いて一息ついていた。

「どうだった？博麗の巫女は」

「……」

藍は風也から返事が無かったので顔を覗いてみた、すると風也は藍に寄っかかって寝てしまった。

「風也？っ！／／／／／」

急な出来事だった為、藍は赤面した。

「よっぽど疲れが溜まっていたのかな……」

藍は風也の頭を優しく撫でていた。

5章 自立と迷走（前書き）

前回のあらすじ

風也は博麗神社に行った後、疲労で寝てしまっていた。そして次の日……

5章 自立と迷走

「あー……俺布団で寝てたっけ？」

（（といつか床で寝てた気がするんだが……））

風也は心でそう思い寝ぼけながら上体を起こした。

そして横を見ると藍も隣で寝ていた。

「何だ……藍か……って、えっ!?!?!」

風也はさり気無くスルーしそうになったがスルー出来なかった。

「お、落ち着け!落ち着け俺っ!」

風也のまずやる事は理性を保つ事だった。横に寝てる藍が居るのだ、一瞬可愛いと思ってしまうた風也だった。

「ま、まず藍を起こさんと……藍!朝だし起きろー!」

風也は藍の肩をトントンと叩き藍を起こそうとした。

「ん?ああ、風也か……ふああ……」

風也はいつもと違う藍を垣間見た気がしていた。

「眠たそうだな……」

「ちょっと眠れない事があっただけよ……」

藍は風也を見て少し顔が赤くなっていた。

風也は頭を傾げた。

（俺なんかしたか？）

「そっぴゃ、前に頼んでた幻想郷の地図みたいのってあったか？」

「これだけど、あまり頼らない方が良くわよ」

風也は藍に丸く包まれた紙を渡された。

「流石にそろそろ幻想郷のいろいろな所を徒歩で行ってみたいし、交流も深めた方が良く思ってたな」

「風也、気をつけて行って欲しい。貴方の身が危険に晒されて何かあったら紫様も橙も私も悲しむ……」

藍が心配そうに風也を見つめる。

「ああ、無茶はしないさ」

風也は昼まで藍や橙から幻想郷での注意を聞いた。

「じゃあ、行って来る」

「行ってらっしゃい。」

「お兄ちゃん、帰ってきたら遊ぼうね〜！」

そして昼過ぎ、藍と橙の出迎えて風也は玄関を出て、森を歩き始めた。

8時間後……………

「此处……………何処だ？」

風也は森で迷っていた。

もう周りは暗く、夜だった。唯一の光は月の明るさだけで森の地面を薄暗く照らしていた。

「この歳になってまた森で迷うなんてな……………森の途中で妖怪から闘討ちには会うわ……………空腹で力が出ないわ……………災難だな……………でも流石に……………此处で行き倒れは……………かんべ……………んだ……………」

風也は力無く地面に倒れた。

「ち……………くしょ……………う……………」

風也は意識を失い欠けたその時

「だ、大丈夫ですかっ！？意識ありますか？返事が無い……と、とりあえず屋敷に運ばないと……」

風也は急に現れた少女に運ばれていくのを薄くなる意識の中で感じていた。

そして……風也は意識を失った。

5章 自立と迷走（後書き）

本当は守矢神社を5章で出そうと思いましたがとりあえず先に別なシチュエーションにしますた！駄作ですが読んでくれてありがとう
ございます！

6章 白玉楼（前書き）

前回のあらすじ

風也は森で遭難し、途中に妖怪の闇討ちや空腹で行き倒れになってしまった。だが現れた少女に屋敷に運ばれて行った先は……

6章 白玉楼

そして次の日……朝の半ば程の時間に風也は目を覚ました。

「あ、目を覚ましましたか」

魂の様な物と一人の少女が風也を看病していた。

「大人しくして居て下さい。貴方は背中に怪我があるのですから」

風也は痛みのする自分の身体を見ると包帯が巻かれていた。

「此処は何処で……君は誰だ？」

「私は魂魄妖夢「こんぱく ようむ」と申します。そして此処は幽々子様のお屋敷の白玉楼です。」

風也が寝ている部屋は確かに日本風であった。

「後さ……君の隣にいるアレは何だ？」

風也は妖夢の隣にいる半霊を指し妖夢に聞いていた。

「これは半霊と言って私の半身です。」

「なるほど……」

風也と妖夢が話をしていると……

「あら？もう起きたのね。体の具合は大丈夫かしら？」

「ゆ、幽々子様！起きてたんですかっ?!」

妖夢は幽々子と言われている女性を見て驚いていた。

「あらあら、妖夢も酷いわねえ。妖夢はとりあえず朝ご飯の準備してくれるかしら？」

「あ、はいっ！分かりました！」

そして妖夢は台所へと走り出した。

「貴方が妖夢が連れてきた人ね、私もびっくりしたわよ、妖夢が気絶した貴方を連れて来るんだもの」

風也は苦笑いしか出なかった。

「すみませんね……えーっと、何て呼べば宜しいですかね？」

風也は何て呼べば良いか分からず聞いていた。

「ああ、自己紹介を忘れていたわね、私は西行寺幽々子」さいぎょうじゆゆこ「よ、亡霊姫とも言われてるけど幽々子って呼んで良いわよ」

「俺は風也と言います。よろしくお願いします。幽々子さん」

風也は挨拶の握手を出した。

6章 白玉楼（後書き）

後々に文ミスがあったので修正しました。

7章 紅き異変(前書き)

前回のあらすじ

風也は白玉楼に着き、ゆっくりと幽々子達と過ごして居たが、その
平和は脆く崩れた……

7章 紅き異変

「あゝ、良い朝だなあ」

「そうねえ」

風也は幽々子と緑茶を飲みながら見事に平和ボケしていた。その時……一瞬にして空が紅く変色した……

「な、何だこれは！そ、空が紅い……」

「あの娘が動いたのかしら……」

幽々子も紅く変色した空を見上げた。

「あの娘？それは誰なんだ?!」

「とりあえず貴方は博麗神社に行きなさい。私が連れていくわ。」

そして幽々子に持ってもらう博麗神社に風也は着いた。

「霊夢！空が紅くなってる！これはどういう事だ?!」

すると部屋からは魔理沙が出てきた。

「ふ、風也、静かにしてくれ……霊夢は熱を出して昨日から寝込んでるんだ……」

「魔理沙、良いから空を見てくれ。」

そして風也は魔理沙を外に連れ出し空を見させた。

「こ、こりゃあ、空がおかしい…………でも異変を解決したいが霊夢は寝込んでるし、私は看病しないといけないし……………」

「なら…………俺が行く、それなら大丈夫だろう？」

すると魔理沙は、

「や、やめろ！お前が敵う相手じゃ無い！行ったとしても殺されるだけだ！」

「俺は大丈夫だ、だから行かせてくれ」

風也は全力で止めてきた魔理沙を濁り無い眼差しで見つめた。すると魔理沙は威圧感に押され止めるのを諦めた。

「わ、分かった霊夢から渡されてあるこれを使ってくれ」

魔理沙は白紙の符を3枚風也に渡した。

「多分、風也に合うスペルが出ると思う…………死なないでくれよ…………外の話はまだ聞きたいんだから……………」

そして風也は…………魔理沙から聞いた元凶の場所…………「紅魔館」へと足を進め始めた。

この時、風也には幻想郷に適応した能力と弾幕を持っている事に誰も気づかなかった。

7章 紅き異変（後書き）

えーっと、異変編が完結するまで平和じゃなくなります。そこはあしからず。

まあ頑張っ書いて行きます。

次章「宵闇の妖怪と氷精」

8章 宵闇の妖怪と氷精（前書き）

前回のあらすじ

朝に幽々子とのんびりしていた風也だったが空の色が紅く急変。異常だと分かり博麗神社に向かったが霊夢も魔理沙も行くどころじゃなかった。そして風也は日本刀と白紙の符を3枚手にし、元凶の紅魔館へと向かった。

8章 宵闇の妖怪と氷精

そして風也は紅魔館へ向かうため森を走っていた。すると途中途中で妖怪が多く前を遮っていた。

「チツ、邪魔だ！」

風也は刀の峰で妖怪を戦闘不能にさせながら森を進んでいた。

「妖夢に刀の扱い方を教えて貰って正解だったな……」

風也は刀を鞘にいれ森を進んでいた。そして……風也の上空から黒い弾と氷塊が飛んで来た。

「上だと!？」

氷塊や弾を刀で弾いて何とか耐えた。

「お前は食べても良い人間なのかー？」

「あれ？アタイの攻撃で倒せると思っただのになー」

声がする方向を見ると、二人の少女が飛んでいた。

「子供の遊びには付き合ってもらえないんで、先に進ませてもらうぞ」

「サイキョーのアタイと戦ってもらうから先には進ませないよ！氷符『アイシクルマシガン』!!!」

「わはー、でも遊んでもらうよー。月符『ムーンライトレイ』」

片方は氷塊を機関銃の様に撃ち出し、もう片方はレーザーの様な物を射出した。

「間髪無しに攻撃させる暇も無いわけか。待てよ……俺も弾幕を撃てるかもな……試す価値は……ある！」

風也は木を盾に移動し、弾幕を回避しながら手に力を込めると手に紫色に少しずつ輝いてきた。

「食らえっ！」

風也は力を貯めた手のひらを前に掲げ力を放出した。すると圧縮された様なレーザーが掌から出てき、二人の攻撃を消し飛ばした。

二人には当たらなかったが遠くの山に着弾し、山の一部が消し飛んだ。

その光景に驚いていたルーミアに風也は木を踏み台にし、体術の発勁をぶつけた。するとルーミアは落ちて気絶してしまった。

「アンタ強いね！名前はっ？」

「風也だ……」

「風也ねっ！アタイはチルノ！サイキョーの妖精よ！」

チルノは胸を張って自己紹介をした。

「チルノか……さつさとこの無駄な戦いは終わらせて貰う！」

「勝つのはアタイだよ！氷符『アイシクルフォール』！」

チルノは氷塊を大量に撃ち出し、地面や木に氷が刺さって行く。

だが風也は瞬時に弱点に気づいた。チルノの目の前がガラ空きだった。

「これで……最後だ！」

風也がチルノの目の前に潜り込み刀の峰でトドメを刺そうとした時

……

「ひっかかった！凍符『パーフェクトフレイイズ』！！」

チルノがすぐに他の符を使用してきた。すると周りの木と共に風也の身体が凍り始め、動けなくなってきた。

「さ……最後のを……食らえ！」

風也は凍り始めていた手を出し弾幕のレーザーを撃ちチルノに直撃させ、吹っ飛んで行った。

チルノが倒されたからなのか、周囲の凍った木や、凍り始めていた風也の身体の氷が溶け出した。

「あー……凍傷で少し痛いな……だけど紅魔館までもうちよいだな……進まなきゃ……」

痛みを堪えながら風也は紅魔館へと足を進めた。

だが、紅魔館で死にかける事になるとはこの時は思っていなかった。

8章 宵闇の妖怪と氷精（後書き）

今回の戦績： （ ）は結果

ルーミア（気絶）

チルノ（戦闘不能）

VS

風也（若干凍傷）

お疲れ様です。こういうのは初めて書くので書き方変ですが気にしないでください。そこに触れると私が泣きます。次回は短めになると思います。

次回「紅魔館の門番」

9章 紅魔館の門番（前書き）

前回のあらすじ

風也は紅魔館に着く前にルーミアとチルノと戦闘を開始し、苦戦しながらも弾幕で勝つ事が出来た。そして紅魔館へと足を進んでいた。

9章 紅魔館の門番

「ふう………紅い館が見えてきた………もう少しだな」

風也は紅魔館が目視できる所まで近づいていた。その時には腕の凍傷は何故か治っていた。

その頃………紅魔館では

「さて、此処まで大きい異変にしておけば博麗の巫女か魔法使いのどっちかが来るでしょ………」

椅子に座っていた少女、近くに立っていたメイドが広い部屋に居た。

「ですがお嬢様、パチュリー様の予言の『不死身と破壊を持つ人』
というのが引っかかります。」

「そうね………でもそんな気にしなくても良いんじゃないかしら。此
処に突撃して来る人間や妖怪なんてほぼ居ないわよ………」

「お嬢様、ですが………いいえ、何でもありません………門番に嚴重
に見張りをする様に伝えてきます………」

そしてメイドの服装をした人は館の外に出て、門番がいるところへ
向かった。

「美鈴、誰かが此処に来る様だからサボらず見張りをするのよ」

風也は腹部を抑えると激痛が走った。骨が一撃で数本折れていた。

「こいつ……チルノやルーミアなんかと桁違いの強さだ……しかも動きも速い……なんたつて隙が全然無い……」

「はあっ！！」

すると間髪無しに美鈴はハイキックを繰り出してきた。

「ハイキックはガードすれば……」

風也は完璧にガードをした……しかし、ガードした左腕の骨が一撃で折れた……

「ぐっ……これでも食らえっ！」

風也の左腕は力無く使い物にはならなくなったが、右腕に全力で貯めていた弾幕の気のフルパワーを放った。

「華符『彩光蓮華掌』」

しかし美鈴は既に撃った所に居なく、既に速いスピードで突っ込んで来ていた。

「これでトドメだ……はあっ！」

美鈴と風也がすれ違う瞬間に風也に掌底を腹部に直撃させ虹色の様な気を爆発させた？

「ち……ちくしょ……」

風也は既に体力の限界を越えていた。そして遂に気絶してしまった。

「よいしょつと、でもこの人、私の攻撃を大量に食らって生きてるなんて……人間ではありえない生命力ね……」

そして美鈴は気絶した風也を担ぎ紅魔館へと入っていった。

9章 紅魔館の門番（後書き）

今回の戦績：

風也（肋骨複雑骨折、左腕骨骨折、その他多数骨折）

VS

美鈴（かすり傷）

こんな感じになっちゃいました。すいません、次章も頑張って書きたいと思います。

次章「大図書館とメイド」

10章 大図書館とメイド 前編（前書き）

前回のあらすじ

風也は紅魔館に着いたのは良いが門番に見つかり戦闘に発展した。だが門番のあまりにも強い実力で一方的にやられてしまった。そして気絶した風也は門番に連れていかれ紅魔館に入った。

10章 大図書館とメイド 前編

「咲夜さーん！侵入者捕まえましたよ〜！」

美鈴が人一人を担いで咲夜の元へ声を上げた。

「え？捕まえた？来たのは博麗の巫女でも魔法使いでも無いの？」

咲夜は美鈴が連れて来た人間を見る為に近づいた。

「これは……ただの人間ね……何で此処に来たのかしら」

「私も分かりませんよー、でも普通の人間なら死んでる筈の重傷ですよ？」

「そうね……ちょっと心が痛むけど地下牢に連れて行くのが無難ね。私が連れていくわ、貴女は見張りをお願い。」

「分かりました」

美鈴は門へ向かい、咲夜は地下牢への道へと向かった。

「この人がお嬢様の暴走を止められるのかしら……」

そして地下への階段を降り切り牢屋がある所へ到着した。

「あれー？咲夜だー、どうしたの？」

真つ暗な牢屋の中から少女の声がした。

「妹様、この方を牢屋に入れますのでお願いします。」

「新しい遊び相手ー？」

「多分遊んでくれますよ、後この方が起きたらこれを渡して下さい。そしてこの方が行動しようとした事に一緒に着いて行ってあげて下さい」

牢屋に風也を入れ、少女に緑色の液体が入った小さな瓶を渡した。

「では……お願いします。」

そして咲夜は地下牢を後にした。

風也は夢の様な物を見ていた。

「俺は重傷負ったんじゃ……………」

『ああ……確かに重傷を負ったな……だがお前が持つ能力で辛うじて生きてる訳だ』

風也が後ろを向くと黒い靄の様な物を纏った人型の何かがあった。

「お前は誰だ？」

『俺はお前、そしてお前は俺だ。ハッキリ言おう、このままでは勝てる訳も無い。お前が能力を使わなければな……』

「俺に能力だと？そんな物が……」

『ああ、お前の能力は「再生と破壊を司る程度の能力」という能力だ。そして俺はその能力の破壊の本質だ』

「その再生の能力で俺の生命力が高くなった訳か……」

『そうだ……そして俺からの餞別だ。黒い符を受け取れ、この符が破壊の本質を発動させる為の唯一の符だ』

すると胸ポケット辺りで黒い光が一瞬光った。

『そろそろ此処から覚めても良いだろう……征け、異変を止めるんだらう？』

そして風也の視界が真っ黒になった。そして風也は夢から覚めた。

「ん……此処は何処だ？」

「あっ、やっと起きた！」

「ん？君は？」

風也がこの瞬間で確認出来た事は牢屋の中に自分がある事と、少女が自分と共に牢屋に入って居た事の2つだ。

「そっかー、お兄ちゃんは今まで気絶してたから分からないんだね、私はフランって言うの」

「でも何故牢屋に？」

「私はね……ずっと牢屋に閉じ込められてるの……」

それを聞いて風也は怒りでいっぱいだった。

「くそっ……こんな子供を牢獄に閉じ込めるなんて……フラン、此処から共に出るぞ！」

「でもこの牢屋壊れないよ……私でも壊せないもん……」

ジュウウウウウ……

風也が鉄格子に触れると牢屋の鉄格子は溶けて粒子状になった。

「これで問題ないだろ？手伝ってくれ」

「分かった！」

風也はフランと一緒に牢屋を出て、遂に逆転劇が始まるのであった。その時風也の全身骨折の怪我は綺麗に消えていた。

10章 大図書館とメイド 前編（後書き）

今回はフランが出ました。次回は咲夜戦、パチュリー戦ですねー、やっと紅魔館の中間辺りでしょうか……頑張って行きたいと思いません。

次章「大図書館とメイド 後編」

11章 大図書館とメイド 後編（前書き）

前回のあらすじ

風也は紅魔館の地下牢に閉じ込められたが、気絶中に自分の能力の存在を自覚した。そして夢で漆黒の符を渡された。気絶から覚めフランと出会い、共に地下牢を出て共闘する事にした。そして出た先は、紅魔館の者からの攻撃だった。

11章 大図書館とメイド 後編

【脱走だー！妹様と侵入者を捕まえろー！】

フランと風也が脱獄したのがすぐに暴露たらしく館内は騒がしかった。

「隠れても無駄だしな、攻めるぞ！フラン！」

「よし！久しぶりに遊べるんだねー」

二人が飛び出した先には紅魔館のメイドが40 50人居た。

「半分は俺がやる、もう半分はフランに任せるよ」

「よし、禁忌『レーヴァテイン』！！」

フランが剣の様な武器を出現させ薙ぎ払いの範囲に居たメイド達は壁にめり込んだり、床に刺さったりして吹っ飛んだ。

「フラン、手加減はしろよ……さて、魔理沙から渡された符を使ってみるか……」

するとこれを読めと言っばかりに真っ白な符に字と模様が浮かんだ。

「次元符……これを読むのか……次元符『ディメンションブレイド』……！！」

すると符が輝き、途中で折れている様な刀が風也の手に現れた。

「とりあえず吹き飛ばっ！」

風也は刀をメイド達の居る方向に振り、地を這う斬撃がメイド達に直撃し、ほぼ全員が吹き飛んだ。

「フラー、そっちはどう……だ………？」

風也は見た光景に絶句した。

フラーの相手していたメイド達は全員壁や床にめり込んで動けなくなっていた。所々窓ガラスも割れていた。

「もう少し遊びたかったんだけどなー」

「やり過ぎだから……やり過ぎ………っ」と

ヒョイツ

後ろから風也にナイフで不意打ちをしようとしていた妖精メイドが居たが風也は刀でナイフをすぐに折った。

「ううう………」

「仲間が全員やられたってのに立ち向かう勇氣……賞賛するが相手が悪いわっ！」

「キヤツ!?!」

風也は妖精メイドに瞬間的に多数の斬撃を浴びせた。

「安心しろ、体は斬ってないからな……」

「逃がす訳ないでしょっ!」

「あー、忠告忘れてたわ……動いたらメイド服がバラバラなるぜ（笑）」

忠告後、風也を追おうとした妖精メイドのメイド服は無残にもバラバラになり、その美しいメイドの裸体が風也の目の前で晒された。

「キヤアアアアアアア!?!?!?!?!?」

メイドは恥ずかしく一部隠して床に座ってしまった。

「わー、お兄ちゃんえっちだー」

フランがその光景を見て言った。

「と、とりあえず先進むぞ……」

風也はメイドに自分の上着を被せ、刀を鞘に入れベルトに刺した。そして図書館の様な広い部屋に着いた。

「貴方が予言に出てた人かしら?」

「此処から先は進ませる訳には行きませんよ」

上の方から二人分の声がした。

「チツ、新手か……」

「あー、咲夜とパチュリーだー！」

「妹様、お戯れが過ぎます……」

「レミイの場所には行かせないわよ、此处で倒れて貰うわっ！」

すると2人からナイフと火球が同時に襲って来た。

「くそっ、やるしか無いのか！」

「パチュリー！咲夜ー！行くよー！禁弾『カタディオブトリック』
！」

フランのレーザーの弾幕は二人の弾幕を相殺しつつ、障害物に当たっては反射して二人を襲った。特にパチュリーには多数のレーザーが向かっていった。

「えっ！？あ、危ないっ！」

パチュリーはギリギリでレーザーを逃げてかわしたがちやく弾地点は爆発を起こした。

風也はその光景を見てフランには援護が必要ない事を悟った。

「フランに片方は任せるか……さて、俺は……貴女と戦う訳か……」

風也は咲夜と鏝迫り合いをしていた。

「流石に今までのメイドとは違うな……」

すると急に刀を逸らされバランスを崩した所に膝蹴りが風也の鳩尾に直撃し怯む。

「ぐふっ……」

すると咲夜が風也の耳に囁いた。

貴方が本気でこの異変を止めるおつもりならば力を試させて貰います

そして風也から距離を取り

「行きますよ。幻世『ザ・ワールド』」

そして咲夜以外の時間は止まった。そして風也の周りに百数本のナイフを投げた。真後ろを除いて……

「そして……時は動き出す……」

その言葉を境に時間が動いた。

「なっ！？一瞬でこの量のナイフを……くそっ！」

ザシュッ！

風也は後ろが手薄なのを気づかずその場で全身にナイフの雨を浴びた。頭、腕、胸、足の殆どにナイフが突き刺さっていた。そして服を血で赤く染めていた。

だが、背中に激痛が感じなかったのを風也は気付いてなかった。

「死ねないというのは痛いものなんだな……………全身にナイフが刺さっても……………」

風也は体に刺さっているナイフを力尽くで引き抜いた。

「さて……………そろそろ決着をつけよう……………」『黒符』……………」
手にした漆黒の符が黒く輝いた。

一方、フラン達は……………」

「それぞれー！どんどん行くよー！禁弾『スターボウブレイク』！」

「きゃっ！あ、危ないじゃない！月木符『サテライトヒマワリ』！」
「！」

パチュリーは弾幕を危なげにかわしながら応戦していた。そして弾幕を弾幕で上手く相殺していた。

ドゴオオオンー！！

咲夜と風也が戦っている筈の場所から轟音がした。

その音で驚いたパチュリーとフラン……………二人が見た光景は……………」

本棚に吹き飛ばされ倒れている咲夜と黒い霧を纏った人型の化物が居た……………」

「な……………なにあれ……………ば……………化……………物？」

パチュリーは完全に怯えて戦意喪していた……………もうパチュリーの勘が敵う訳が無いと感じていた。

「あの咲夜が……………いとも簡単にやられるなんて……………」

『もう戦う気は無いのか？』

「……………つ！？」（コクコクッ

パチュリーは怯えて声が出ず無言の頷きをした。すると黒い化物の靄は符に変化し、風也の姿に戻った。

「それが賢明な判断だな、とりあえずこの人の傷を直さないとな
白符』」

すると風也の右腕が白く光り、それを倒れている咲夜に向けた。そして咲夜を傷は消えて無くなった。

「あれ？私は？傷が……………消えてる……………」

咲夜は先程の戦闘で自分の体にあった傷が消えていた事に驚く。

「さて、此処の主の場所を教えてください……………行くぞフラン！」

「わかったー」

「分かりました。此方です」

咲夜に着いて行く風也とフラン……そして大広間に到着し、待つていたのは……

11章 大図書館とメイド 後編（後書き）

いやー、どうも作者です。現役高校生となると暇がなくて投稿が遅れましたすいませんm(´`´´)m

と言う訳で今回はパチュリーと咲夜戦でございましたー！フランも味方にして突撃って感じですねえ。

今回は黒幕との戦いです！まあ皆さんも知ってるあのお方ですね

（、´´´）

ではそろそろ私の御託は聞き飽きたと思うので此処でサインナラー！
次章で会いましょう！

次章「紅魔館の主」

12章 紅魔館の主(前書き)

前回のあらすじ

風也とフランは立ち塞がったメイド達を壊滅させ、その後も風也の目的を妨げるパチュリーと咲夜に善戦し勝利した。風也は自分の力を制御し始めたが……それは自分の体を壊す行為でもあった……

12章 紅魔館の主

「此処は広間か……………広いな……………」

風也達が回りを見渡しているその時、上空から高速で何か風也を襲った。だが気づくのが遅すぎた……………

ザンツッ！ブシヤアアアア……………

「ぐっ、がああああああああああああああああ！！！！！」

その「何か」は風也の右腕を切り裂いて引き千切り、風也のその腕が付いていた所から血が噴水の様に吹き出した。

「貴方が異変を止めに来たのね……………だけど……………もうそんな体で止められるのかしら？」

空を飛んでいる羽が生えた者が居た……………手を血で紅く染め、風也の千切られた腕を持って……………

「ぐ……………その言い口……………お前が……………異変の元凶か！！！」

風也は右肩を左の手で血を抑えながら激痛に耐え喋っていた。

「そうよ……………私がこの異変を起こした張本人……………レミリア・スカーレットよ……………」

【くそっ……………出血で目が霞む……………こんな所で死ぬ訳には……………】

「あら？目が霞んで来てるわね、そんな血を流せば失血死するんじゃないかしら？」

レミリアの言う通り、風也は肩からの出血の量は物凄く大量だった。

「でも……まずは裏切り者の処分かしら？……ねえ……咲夜？」

レミリアが咲夜の方を向き、レミリアの回りに小さな魔方陣が複数出現し、赤い弾が 咲夜に向けて高速で多数発射された。

「ぐ……『黒符』！！」？

黒の符が霧状になり風也の全身を包み、先ほどの化物の姿になった。そして咲夜の前に移動し盾となり全弾直撃した。

『先に俺を始末するんじゃないのか？』

「っ！………貴方……死にたい様ね……」

だが、レミリアの素早い動きに翻弄され一方的に攻撃を受けていた。レミリアの高速移動に体がついて来れない……そんな現実を目の当たりにし、食らい続けた。

『くそっ………早い………』

「そんなので良く此処まで来れたわね！此処を貴方の墓場にしてあげるわ！」

するとレミリアの手から小型の槍状の物を出し風也に複数投げつけ

た。それは風也の体をいとも簡単に貫いた……………

「さあ！これでトドメよ！運命『ミゼラブルフェイト』！」

レミリアが多数の魔方陣から鎖を出し風也の全身に20本以上の鎖が突き刺し上に突き上げた。そして風也の真下の床は鮮血で大きい血溜まりが出来ていた。

「まだ生きてるのね消えなさい！神槍『スピア・ザ・グングニル』
！！！」

そして、先程より数倍の大きさの槍を動けない風也に投げつけた。

『……………死ぬよりマシだ……………』 『白……………符……………』

そう言った瞬間、グングニルは風也の胸に突き刺さり、五体が鎖と槍で完全にバラバラになった。

その回りの壁や床に大量の血が飛び散り、手足は床に……………胸は高い壁に槍で突き刺さり固定されていた……………

「ふう……………これで終わりね……………」

レミリアは自分の腕に付いていた風也の血を舐めた。

『ヤット……………ユダンシタナ……………』

「えっ！？」

すると半獣化した化物がレミリアの後ろに居た。そしてレミリアの背中に向けてただの拳を直撃させた。

「ぐっ！」

レミリアは後ろからの不意打ちでまともに食らい壁に激突した。その時壁には大きなヒビが入った。

そしてレミリアは見た光景に絶句するしか無かった……

床に落ちていた手足は血を残し消え、壁に突き刺さっていた筈の胴体も消えていた。レミリアの視界にあったのは………化物しか居なかった……風也が符を使った以上の化物が………

【作者：はい、どうも作者です。え？出る所間違ってるって？まあ説明しに来ただけですので問題ナイナイ。とりあえずこの化物は主人公です。もはや人間からかけ離れてますがれっきとした主人公です。はい……まあ説明って言っても咲夜さんのスリーサイズを言ってます……？ピチューン

【咲夜：貴方を言おうとしてるんですかっ！ナイフ投げますよ？】

【作者：ちょｗｗ咲夜さん言う前から投げてますからっ！私今１回ピチューりましたからっ！美鈴さん！助けて〜！】

【美鈴：いや、咲夜さんは無理です。】

【作者：ちょwww全方位にナイフが……………ギャー……！】ピチ
ューン

【美鈴：馬鹿作者と咲夜さんのコントは後にして本編へ行きましょ
ー】

『ハチノスタ……………』

腕部の黒い気が形を造形し、多銃口のガトリングが腕に出来た。そ
してレミリアに向けて撃ち出した。

「なっ！？何よあれ！よ、避けきれない！きゃっ！」

レミリアの動きを追って撃ち出した弾幕はレミリアに直撃した。

『黒符『地獄ノ紫炎』……………』

弾幕の直撃で怯んだレミリアに紫色の炎弾を口部分から吐き出した。

「くっ……………このままやられる訳には行かないわっ！消し飛べ！紅
魔『スカーレットデビル』……！」

『ソレハオマエダ……………黒符『終焉ノ闇火』』

レミリアは十字状の大きい赤いオーラを出し、風也は口、手、から漆黒の炎のオーラを収束し口からレーザーを撃ち出した。

そしてその二つの攻撃がぶつかり合い……大規模な大爆発が紅魔館で起きた。誰でも爆発が起きた事が分かる程の爆発が……

……白玉楼……

「あら？地震かしら？」

「幽々子様、地震と言うより爆発した様な音が……」

「あら、ならあの人がやったのかしら？妖夢、迎えに行きましょうか。」

「えっ！？あ、はいっ！」

……博麗神社……

「紅魔館の方で爆発？」

博麗神社からは煙が見えていた。

「風也を助けに行くべきじゃないか？」

「そうね、大分体調も良くなつたし行くべきね」

……八雲家……

「藍しゃまー、なんか揺れたよー」

「何か嫌な予感がする……」

藍は爆発があつた方向を向いた。

爆風で赤い雲は消し飛び、青い空が覗いていた。そして紅魔館は全壊はしていないが天井は完全に吹っ飛んでいた。

そして瓦礫の中にはレミリア、咲夜、パチュリー、フラン、そして風也が倒れていた。

「いててて………こりゃ派手に壊れたな………」

そして風也が起きてまず第一印象は紅魔館が派手に壊れている光景だ。

「何とか勝つたみたいだな………空も青いし………良い天気だ………」

空を見上げ青い空を見ていた時に

「風也……!」

「ん?………おー、靈夢と魔理沙じゃないか………」

靈夢と魔理沙が飛んでやってきた。

「あ…………貴方…………勝つたの？」

「あたしでも勝てないってのに……………」

二人は瓦礫の中で倒れていたレミリアや咲夜を見て驚いていた。

「すまん…………とりあえず後は任せるよ…………なんか眠いし……………ZZZZ」

そして風也は疲労と出血多量が原因で寝てしまった。

その後、霊夢達が咲夜達を無理矢理起こした様だ。

「こらっ！そのメイド長！起きなさいっ！」

「おい、パチュリー起きろー」

「ああ、巫女が何の用かしら……………」

「とりあえず異変を起こしたレミリアを地下牢にぶち込んだときなさい！寝てるうちに！」

「分かったわ…………仕方ないものね」

咲夜は気絶しているレミリアを担ぎ、地下牢へ向かって行った。

「あらあら、派手に壊したわねえ。その子の身柄を私達に任せて貰っても良いかしら？」

その後に妖夢と幽々子が紅魔館にやってきていた。

「庭師と食いしん坊じゃない、まあ、知り合いなら大丈夫よね、持つて行きなさい」

「ありがとうね、妖夢頼んだわよ。」

「はい、分かりました。」

そして風也は妖夢達に連れられ、白玉楼へ向かって行った……長
い休息の為に……

12章 紅魔館の主（後書き）

はいどうも作者です。遂に紅魔館編は完です！え？フランちゃんの出番が少ないって？後でボコられるハメになりますね……（作者である私が）

と言う訳で次回から平和に戻りますね。いやー長かったですわー

実は間にコントみたいのがありますがそれを別に書いてみようかなとか思ってます。

余裕が出来れば外伝と書ければ良いなーとか思ってます。

では私はフランちゃんに「キュツとしてドカーン」されて来るのでまた今度会いましょう！では！

アイキャンフライ

<<ピチユーン>>

13話 平和(?)な日常(前書き)

前回のあらすじ

風也は紅魔館で苦戦しながらも力尽くでレミアを倒す事が出来た。だが力を使い過ぎて疲労と出血多量で力尽きてしまった。その後に来た霊夢と魔理沙に後処理をまかせた。そして風也は幽々子と来た妖夢に連れられ白玉楼へと戻って行った。そして平和になると信じたが……

別な意味で平和ではなくなった。

13話 平和(?)な日常

「ちよっ！早いつ！」

風也は妖夢と刀の稽古をして居た。風也は前の戦いで刀の扱いが下手だと言う事を自覚し自分から妖夢に頼んで稽古を付けて貰っていた。

「これ位で弱音を吐いてしまつては駄目ですよ！」

そして風也の刀は妖夢の白楼剣で後ろに弾かれてしまった。

「はあ……これで何回弾かれた事か……」

「でしたら少し本気出しても良いですよ？まだ貴方は全力を出していない様ですし。」

「やっぱ妖夢は剣を合わせるだけで分かるんだな……分かった少し本気出すよ。『黒符』」

そして黒符を使用し、風也の全身が黒いオーラで包まれた。すると今まで起きた事のない変化があつた。

『次元符『ディメンションブレイド』』

普通なら先の折れた刀が出される筈が黒い大剣に変形していた。

『行くぞ！はあっ！！』』

風也が剣で地面を叩くと妖夢の四方から地面を粒子状にしながら斬撃が飛んできた。

「1個1個が重いっ……………」

妖夢は飛んできた斬撃を刀で全て受け止めていた。そしてひるんでいる差中、風也が突っ込んで来たのに驚き……………咄嗟に……………

「だ、断命剣『冥想斬』!!」

『うほっ!』

ドボン……………ブクブクブク……………

「あ……………。だ、大丈夫ですかー!?!」

咄嗟に妖夢が出した一閃が風也に直撃して吹っ飛び池に落ちて沈んだのを見てすぐに助けに池に沈んだ風也を池から引っ張り出した……………

「へくしっ!うううさむっ!」

「だ、大丈夫ですか?と、とりあえず風邪引かない様にお風呂に入っ
つて来たらどうでしょう?」

「そうさせて貰うよ……………で、何処にあるんだ?」

「お風呂でしたらそちらの廊下を奥にありますよ。」

「ああ、ありがとくな」

そして妖夢に言われた廊下を歩き風呂場に向かった。

「ふふふ、良い事考えたわw」

その会話は幽々子に聞かれていた。

そして風呂場に付き露天風呂にはいつていた。

「ふう……………やっぱ風呂は良いなあ……………って、ん？」

風呂の外で何やら話し声が聞こえた。話し声というより叫びが……

「あら、あの子がお風呂に入ってるのね、じゃあ私も入ろうかしら」

「幽々子様……………それは駄目ですって！せめて風也さんが
出てから入って下さいっ！」

風也が入っている風呂に幽々子が入ろうとしていて妖夢は全力で止
めていた。

「どうせ減る物じゃ無いわよ、むしろ堪能しなきゃねえw
だったら妖夢も入れれば良いんじゃないかしら？」

「ふう……………風也さんを池に落としちゃったのは確かに私ですけど……
……………」

そしてトドメに幽々子が「なら尚更入らなきゃ」と言われ
同意してしまった……

「……話……終わったのかな……ふう……」

風呂に浸かりゆっくりしていた後に悲劇は起きた……

ガラッ

「え？開いた？……えっ！?!？」

ドボーーーーーン!!!!!!

風也は自分が見た光景に絶句する暇なく風呂に沈んだ。いや自分から沈んで完全に沈没した。

「ぶはっ！何で二人がっ!？」

風也が見た光景は……? ……タオル一枚を巻いた幽々子と妖夢が入って来た。そして風也がまず取った行動は……

「すまんっ！すぐ出るわっ!」

直ぐに湯船から上がりその場からダッシュで逃げようとしたが幽々子に捕まった。

「あら？何で逃げるのかしら？」

「いや……流石にこれはマズいからこの場から離れよっ……」

「私達は気にしないから大丈夫よ。ねえ…妖夢？」

「は……はい、風也さんを誤って池に落としたのは私ですから背中を洗わせて下さいっ！」

「（。 。 1111）」（ポカーン……）

そして呆気を取られている内に二人に引きずられ、逃げられない状況になった。

「こ、これ位でどうですか？」

風也は妖夢に背中を洗って貰っていた。逃げる事をほぼ諦めていた。

「もう大丈夫だよ……」

「いえっ！前も洗いますっ！」

そして妖夢が前に乗り出し前も洗おうとした時……

「え？……！！？よ、妖夢！？当たってる！当たってますから
「！」

「ああっ！逃げないで下さいっ！最後までちゃんと洗いますから！」

風也は背中に柔らかい感触があるのに気づき立ち上がろうとしたが妖夢に腰部分を抑えられてまともに立てず、逃げようとしている内に足が泡で滑り、妖夢を巻き込んで転んでしまった。

「いたたたた……っ！？」

妖夢を巻き込んで転んでしまった為、倒れている風也の上にタオルが外れてしまった妖夢が倒れていた。

「妖夢！お、起きろ！」

「ん……………きゃっ！！」

妖夢はタオルが外れている事に気づきすぐタオルを巻いた。

「み……………見ました？」

「見てない見てない」（ブンブンッ

「あら、若い子の時間は終わったかしら。じゃあ私も参加しちやおうかしら」

「え？それはまさか……………」

風也は腰にタオルを再度巻き、後ろめていた。

「そのま？さ？か？よ？？」

ガシッ

「え？よ、妖夢？」

後ろから妖夢が顔を紅くし風也の腕を掴んでいた。

「妖夢も男を知る頃よね、という事で貴方にちょっと手伝って貰

「うわぁ〜?」

「ちょｗｗｗｗまｗｗｗｗ心の準備つてもものg.....」

.....

?? ? ? しばらくお待ち下さい

.....

そしてそれは.....夜まで続いたとか.....

【作者：羨ましいんだよこんちくしょう!】

そして.....次の日.....

幽々子は朝になっても起きてこなかった。妖夢が言うにはまだ熟睡

時間らしい。

「風也さん、朝ご飯出来ましたよ」

「ああ、ありがとうな」

「ど、どうぞ……」(ポッ)

妖夢は朝ご飯を机に並べ風也を見て顔を紅くした。

「妖夢、顔が紅くなってる……」

「あっ……す、すいません」

「そ、そっぴや聞きたいんだが、守矢神社って何処辺りにあるか知ってるか？」

「確か妖怪の山という所に建っている筈ですよ」

「そこにあるのか……」

そして妖夢と話をしながら朝ご飯を済ませ、出かける準備をした。

「本当に大丈夫ですか？無事に帰ってきて下さいよ？」

「大丈夫だ、数日で戻る。死にはしないさ」

そして白玉楼の階段を降り始め、妖怪の山を目指し歩き始めた。

山を登っていくと途中で妖怪から襲われる筈らしいのだが妖怪から襲われず山頂まで着いた。

「此処が……守矢神社か。霊夢の神社よりでかいな……ん……殺気……」

すると風也目掛けて丸太の様な物が高速で飛んで来た。風也は腕に黒いオーラを纏わせ、破壊しようとしたが……その計算は多いに狂った。

その丸太は破壊出来ず、破壊の力を打ち消して、そのまま風也に直撃し、十数メートル吹き飛んだ。

「ぐっ……破壊出来ないだと……」

「人の子よ、お前から邪悪な物を感じられるのでな……此処で消えて貰う……」

風也の数十メートル先に地に立つ丸太に座る者が居た。

「殺す気って訳か……『黒符』」

『ならば……此方が先に引導を渡してやるっ！』

そして数十分は経ったか……完全に一方的に風也が押されていた。二人の周りにはオンバシラが数本も地面に刺さって居た。

『ぐっ……『白こ……』』

「はいはい、その争いは終了っつとー！」

すると声がした瞬間、輪っかのような物が二人を捕縛しうごけなくな
った？

「諏訪子！邪魔をするなっ！」

「かーなーこー？落ち着こうって言ったよね？」

「うっ……………すまん……………」

諏訪子と呼ばれる者に威圧され神奈子は黙った。

「ん〜？君は初対面かな？あれ？ちよつと良いかな？……………こ
れは……………？！神奈子……………この子は初対面じゃない……………ずつと昔
に会ってる子だよ……………」

13話 平和(?)な日常(後書き)

はい、どうも作者です。

今回も6章同様「しばらくお待ち下さい」が登場です。いやー……
幽々子と妖夢の二人とお風呂なんて主人公羨ましいですよ。

とりあえず今回は

白玉楼に戻ってから と 守矢神社の序章という訳で書きました。

これからも頑張って書いて行きたいと思います。ではっこんな馬鹿な作者をよろしくお願いいたしますっ！

おまけ：

【作者：妖夢さん、妖夢さんのスリーサイズを教えてください！】

【妖夢：教える訳無いでしょっ！この変態っ！】

＼ピチューンノ

14章 守矢神社（前書き）

前回のあらすじ

白玉楼で剣の稽古をしていた風也、妖夢の咄嗟の行動で池に落ち風邪防止に風呂に入ったまでは良かったが、幽々子達が入ってきてからはもはや騒がしい事となった。その次の日、守矢神社に向かい神奈子と諏訪子と会った。その二人は……風也と過去の出来事の1つだけ……共通した記憶があった。

14章 守矢神社

「初対面じゃない？どつという事だ？」

風也は10本以上の鉄の輪で拘束されていたが、全て外された。

「んー、結構前の事だったかなあ。覚えてないかな？んー、私が込めた力が結構劣化してるねえ……」

諏訪子が風也の肩部分に触れていた。

「諏訪子……まさか……この人間は……」

「そのまさかだよ。神奈子も覚えてるでしょ？君さ、小さな頃に森で迷った事は無いか？」

諏訪子は風也の忘れる訳の無い出来事を的確に言い当てた。そして風也は気づいた……

「……っ！？ま……まさか……あの二人が貴女達って事なのか……」

(忘れる訳が無い……忘れてはいけない記憶だ……)

「お？覚えていたようだね。その通りだよ。10年以上前に君を送ってあげた二人だよ、いやああの時が懐かしいねえ」

……13年前……

「ねえ……お姉ちゃん達は何で森の中に居たの？」

「んー……そうだねえ……お散歩だよ、お散歩　そして泣いてる君が居たから君に話しかけたんだよ。」

「ありがとう………」

諏訪子と幼き頃の風也は手を繋いで歩いてた。神奈子は二人の後ろを着いて居る。そして森を出る事が出来た。

「お？森を出れたかな？君はお家に帰ると良いよ。親がきつと心配してるよ。」

「だけどお姉ちゃん達はどつするの？」

「私達は大丈夫だよ。そうだ、君に良い事をしてあげよう、手を出してくれないかな？」

そして幼き頃の風也はその小さな手を出し、諏訪子が握り返すと一瞬手が光った。

「これでよしっ！じゃあお家に行った方が良いよ、じゃあ、またね。」

「お姉ちゃんばいばいーい！」

そして幼き頃の風也は自分の家に向かい走っていった……

.....回想終了.....

話しながら3人は守矢神社の客間で話していた。

「いや、あの時が懐かしいねえ。まさか幻想郷で会えるとは思わなかったよ」

「確かに……貴女達にあの時見つけて貰わなければ、今の俺は生きてない……本当に感謝する」

風也は諏訪子と神奈子に深く頭を下げていた。

「あの時は私達が神だと知らなかったからだが、親しく接してくれたのは感謝してるよ」

神奈子は風也にやっと笑顔を見せてくれた。

「そういえば、此処の神社には二人で住んでるんですか？」

「あれ？そついや早苗が買い物から帰って来てないね？」

「確かに……いくらなんでも遅すぎる様な……」

二人は急に心配をし始めていた。

「嫌な予感がする……」

神奈子がボソツと呟いたのを風也は聞き逃さなかった。

「『黒符』」

「なっ！？何処に行くつもりだ！」

『俺の直観が危険を感じてるんでな、その辺りに向かうだけだ！』

そして大ジャンプし、その嫌な予感のする地へ向かった。

その風也の勘は的中した。

.....森.....

「さて、追い詰めたぞ、守矢の巫女様よお……」

「っ！？は、離してくださいっ！」

「ひひひ……これで守矢の神も黙らせる事も出来るしな、人質になつて貰うかあ……」

巫女姿の女性が4人の男に囲まれていた。それを風也は見つけ出した。

『あれか……』

そして男の一人が巫女の腕を掴んだ時……男の腕の下の地面から黒いオーラの様な物が吹き出し、男を腕の肉を骨ごと根こそぎ消滅させた。

「ぎっ、ぎゃあああああああ！腕があああああああ！」

ドスッ！

「っ!？」

急に腕が無くなり叫びをあげていた男に気を取られ、もう一人の男の胸に黒い腕が貫通していた。

『まず一人……………』

「何だ貴さま……………」

風也は男の胸から腕を引き抜き残りの二人の足元から同様の物を噴き出させ、全身巻き込まれ骨すら残さず消し飛んだ。

『これで3人……………後は……………』

そして逃げようとしていた腕を無くした男の前に回り込み首を掴み上げた。掴んだ首は怒りでどンドン締まっていった。

『貴様らは何故この巫女を襲った？返答次第で……………殺す』

「ひいつ！た、助けてくれっ！命だけはっ！俺がやるっって言った訳じゃない！信じてくれっ！」

『言い訳は見苦しいな……………』

掴んだ場所から死霊の様な物が湧き出て、その男は死霊に包まれ骨と化した。

『ん……何だ今の力……まあ良い……巫女さん大丈夫ですか？』

風也は黒符を解き、骨をそこらに投げて捨てた。

「あ、ありがとうございます。私は東風谷早苗と申します。」

「ん？早苗？諏訪子さんと神奈子さんの巫女さんなのか？」

「え？お二人をご存知で？」

「まあ、知り合いかな。とりあえず邪魔者は居ないし、神社に戻る。」

「そうですね、お二人も心配してる様ですし。」

そして二人は神社へ戻って行った。

「いやー、本当に感謝してるよ、まさか早苗が彼奴らに襲われてたなんてねー」

「やつ等には私達も苦勞しているからな……早苗を助けてくれてありがとうございます。」

「風也さんでしたっけ？本当にありがとうございます。」

「じゃあ今日はお礼と歓迎を兼ねて、お酒でも飲むかー」

そして……酒を飲み始めた4人だが飲み過ぎで酔い潰れたのは諏訪子と神奈子の二人だった。

早苗も相当飲んでいた……
微量な酒なのは風也だけだ。

その後の深夜……

「ふう……山の上だと星が綺麗だ……」

風也は神社の縁側に座って星空を見ていた。すると……

「あれ？風也さん寝てなかったんですか？」

すると神社から早苗が来た。

「ん？ああ、早苗さんか。ちょっと眠れなくてね。ちょっとした考え事さ」

「何を考えて居たんですか？良ければ話してみてください。少しはすつきりしますよ？」

早苗が隣に座り聞いて来た。

「まあ……幻想郷に来てから一気に生き方が変わってな……正直戸惑ってるのさ」

「私もそれは分かりますよ、私も外に居た頃は不自由な事ばかりでした……秘術を使う一族の子孫であって、外でも神社で現人神として信仰されて、普通にシヨッピングや友達を作るとか出来ませんでした。けれど、それが私の役目なんだって頑張って来たんです。」

「そうか……早苗さんも大変だな……」

「そして、幻想郷に来てからそれも一気に変わりました。風也さんも絶対幻想郷に馴染めますよ。」

「そうだと良いな……やっぱり共通してるのは……一人じゃ行きていけないって所かな……」

風也は苦笑いしていた時、

「んっ……」

すると早苗は風也に近づいて肩を掴み、唇を重ねた。

「っ!?!さ、早苗さん?!」

「神奈子様達には秘密ですよ?助けてくれたお礼もまともにさせてないですし……じっとしていて下さい……// // //」

早苗は顔を赤らめて風也を見つめた。

「えっ!?!それはどういう……んむっ!?!」

そして早苗は風也を押し倒して、上に乗っかる形になった。

風也の口は早苗によって塞がれていた。そして風也自身はもがいて居た。

「ちゅう……んむう……ぷはぁ……暴れないで下さい……んっ……」

「ぶはっ！いやっ、流石にこういうのはっ！んむっ！」

風也は再度口を塞がれた。早苗は舌を風也の舌に絡ませるようなキスを続けていた。

その後、風也は早苗に自分の部屋に連れていかれお礼と称す事が早苗が酔いで寝るまで続いたとか……………

次の日……………

朝、4人はお茶を飲みながら喋って居た。

「昨日は本当にどうも、では俺はそろそろ帰るよ。」

「おや？此処にずっと居ても良いんだよ？」

「いえ、俺を待ってる人も居るのでね。また来ますよ。」

そして風也は神社前で3人と別れ、白玉楼へ帰る為歩き始めた。

14章 守矢神社（後書き）

はい、どうも作者です。投稿が遅れてすいません。リアルにテストとかマジ勘弁してください。はい……

今回は守矢神社のお話です。これで1章の過去話と繋がる事になります。これからちよくちよく守矢神社のお話が出ると思います。では、次回は次の異変編にするか平和なのはちよつと未定ですのでお楽しみにしててください。では、頑張つて書きます。

おまけ：

【作者：おお……早苗さん積極的だな……写真撮つとくか（パシヤパシヤ）】

【文：これはスクープの匂いっ！『守矢神社の巫女、熱愛発覚』つて感じですね。（パシヤパシヤ）】

《裏方にずっと居た二人でした。》（嘘）

15章 河童と門番（前書き）

前回のあらすじ

守矢神社に行った所、風也の命の恩人である諏訪子と神奈子に会う事が出来た。そして早苗とも知り合い、4人で酒を飲み交わした。その後早苗に襲われたのは言うまでもない。次の日に守矢神社を出発し、妖怪の山を下山し始めていたのであった。

15章 河童と門番

そして下山している最中、雲行きが怪しくなっていた。

「何か雨が降りそうだな……急がないとな……」

そして急いで下山しようとしたが、雨は大降りに降り始めた。

「こりゃびしょ濡れになるな……急いでも無駄だし歩くか……」

急ぐのを諦め、普通に歩き始めていた。そして急がなかったのが仇となる事が起きてしまった。

「吊り橋か……行きとは違う道だったからな……この道……」

風也は吊り橋を渡り始めていた時、雷が吊り橋の支柱に直撃し、吊り橋が壊れた。

「なっ！？落雷！」

吊り橋は支える柱を失った為、足場が崩れ、風也は下の川に吊り橋の木材と共に落ちて行った。

ドボーン！

「くそっ！タイミング悪過ぎ……」ぼお！」

風も川の急な流れに流されるしかなかった為、突出した岩に完全に直撃した。

「いたたたた……ん？音？」

ドドドドドド……

そして風も大きな音に気づいた。川の先を見ると途切れて見える……それは滝だった。

「滝……って事は落ちる事になるのかよ！流れが早くて戻れない！」

そして川の流れに敵わず、滝に落ちてしまった。

ドドドドドド…… ドボーン……

その頃……河城ファクトリーでは

……

「やっと雨が止んだ様だね、やっぱり晴れてないと発明やり辛いからなあ……」

にとりは発明道具などを取り出し発明に掛かっていた。

そして小一時間は経っただろうか……すると

『ぶはっ！死ぬかと思ったわあああああああ！！』

川から黒い人が立ち上がって大声を上げていた。

「?!(ビクッ!」

にとりはその大声で驚いた。そして近くに居るにとりに気づいた者は

「あ、どうもです。俺は名前は風也です。一応人間ですよ。」

その正体は風也であり、黒符を解いてにとりに挨拶をした。

「あ、河城にとりです。どうも……びっくりした……」

「ん？発明やってるのか？幻想郷でも発明家って居るんだな。」

「え？君も機械に興味あるの？」

そして小一時間は発明や機械に関して、にとりとの話は続いた。

「そついや、これは大砲？」

風也は山積みになっている機械の中から大砲の様な物を発見した。

「それは失敗品だよ。特にそれは使う者の事を考えなくて威力は高いけど重過ぎて持てないんだよ。」

「なるほど……ん？この大剣は……銃なのか？」

風也は地面に深く突き刺さった剣を発見した。

「その剣はさっきの大きな銃のサポート用の武器なんだけどね、それも重量に問題あり」

「ふうん……！？ 試したい事がある……良いか？」

風也は大型銃と大剣を見てからにとりに聞いた。

「え？良いけど……何する気なの？」

「こつこついう事だ……『黒符』」

風也は黒符を使い黒いオーラに纏われた。そして大型銃と大剣を手に取り、普通に持ち上げた。

『なるほど……黒符を使えばやつと振り回せる重量って事か……』

超重量の2つを同時に持っている風也を見て、にとりは何か考え付いた。

「そつだ！その2つを君にあげるよ！後、君用に改良もしておこつ」

そしてにとりは2つの武器の改良作業を始め、数十分で終わらせた。

「これで完成っ！」

「ああ、ありがとう。さて……」

風也は2個の武器を圧縮し、スペルカードに変化させた。

「おお、君凄い能力持つてるね。でもその武器は注意してね、自身の弾幕パワーを弾にするから自身の体の負荷は大きいよ。思念的な物を感知して弾を変えるから威力、範囲は好きな様に調整出来るよ。」

「ほう……了解……じゃあまたな」

「また話しに来ると良いよ」

そして風也は河城ファクトリーを出発した。

「そうだ……紅魔館に寄っておくか………」

風也は真っ直ぐ白玉楼に帰らず紅魔館へと足を運んだ。

そして紅魔館前に到着すると元通りになった紅魔館があった。

「どうも、門番さん」

「あっ！あなたはあの時のっ！」

美鈴は珍しく居眠りせずに立っていた。

「ちょっと門番さんに教えて貰いたい事があってね」

「はぁ……私に……ですか？後、呼ぶのは美鈴と呼んで良いですよ。」

「ああ、分かった。それで、美鈴って中国拳法使えるよな？ちよつと太極拳を教えて欲しいんだ」

「なるほど、分かりました。まず太極拳というのは……………」

そして美鈴に太極拳の大体の理屈と方法を教授し、紅魔館を後にした。

そして白玉楼への帰路へ辿り着いた。この後、風也自身が異変に近い存在になる事を風也は知らなかった。

15章 河童と門番（後書き）

あとがき

はい、今日は内容は適当です。にとりと美鈴という事にしましたが、内容を大雑把に書いております。次は異変編です。西行妖の話ですねえ。今回は前回の異変編とは大きく異なります。では、頑張ってくださいと思います。では

おまけ

裏舞台（嘘）

【作者：衣玖さん、お願いします。】

【衣玖：これってやっても良いんですしょうか？】

【作者：どうぞどうぞ、キュピーンとやって下さい。】

【衣玖：分かりました（キュピーン）】

ドーンッ！

【作者：おお、橋に直撃！お見事！】

（嘘です。すみません）

16章 極寒の気候（前書き）

前回のあらすじ

風也は無事（？）妖怪の山を下山し、紅魔館で新たな技術を学んだ。そして白玉楼へ帰った風也に待っていたのは、幽々子のある一言だった。

16章 極寒の気候

風也はやつとの思いで白玉楼に到着した。

「只今帰りましたよと……あれ？妖夢だけか？」

風也は白玉楼に帰り屋敷内に入ると待つていたのは妖夢だけだった。

「幽々子様は私用で出かけていますよ」

「そついやさ……此処ってこんなに寒かったっけ？」

白玉楼は雪で覆われていた。前までは寧ろ暖かくなり始めた頃程の気温であったのに。

「幽々子様は冥界で春の気を集めてるんですよ。多分それが原因かと」

「春の気……ねえ……」

「というか……服が濡れてませんか？川にでも落ちたとかは……」

「ああ、川に落ちたよ。派手にね」

川の水で濡れている服の袖を前に出した。

「風邪引いてしまうので着替えて下さい！。乾くまで袴ありますからそれ着て下さい。」

風也は妖夢から白い袴を渡され別室で着替えた。

「着づらいな……この服……」

「乾くまで辛抱して下さいね。貴方の服は一着しか無いんですし。」

風也は室内で干されている自分の黒いコートと上下服を見て溜息をついた。

「はあ……でも幽々子さんは何故冥界に？」

「冥界の三途の川近くにある西行妖の桜を満開にさせる気らしいんです。」

「それでいつ帰って来る……」

「ただいま」

「「!?!」」(ビクッ)

前触れも無く帰ってきた幽々子に2人とも驚いた。

「び…びっくりした……」

「あらあら、驚かせてごめんなさいね。」

幽々子は二人のリアクションを見て微笑んだ。

「それで、妖夢から聞いたんだが西行妖の桜を満開にさせるんだって?」

「ええ、それには風也さん、貴方の協力も要るわ。」

「ああ、断る義理はないしな、だが……霊夢達は解決に俺達の邪魔をして来るだろうな……」

「では、風也さん、幽々子様、冥界に行きましょう。」

そしてその数分後、風也を含む3人は、白玉楼から姿を消した。

………博麗神社………

博麗神社に居た魔理沙と霊夢だったが異常気象としか思えない吹雪に悩まされていた。この時期は春の季節の筈が真冬の寒さだった。

「さ、さむっ！れ、霊夢、今って4月だよな？」

「ええ、確かに4月だけど、この寒さは真冬並みね………」

神社には寒さで震えている魔理沙と霊夢の姿があった。

「こ、これって異変の可能性あるんじゃないか？」

「そうね、原因を探さないと、とりあえず早苗を連行してから行くわよ。」

その後、守矢神社に現れた霊夢達に早苗が連行されたのは言うまで

もない。

.....紅魔館.....

「うーん.....冬用に溜めた食料が無くなりそうですね.....」

紅魔館の食料倉庫で一人のメイドが悩んでいた。それはメイド長の十六夜咲夜だった。

「こんなに冬が長続きするなんて.....異常ね.....」

咲夜は何かを決断した様だった。そしてレミリアの居る所へ向かった。

「お嬢様、少し休暇を頂いてもよろしいでしょうか？」

「貴女が言いたい事は分かった。行って来ると良いわ.....」

「ありがとうございます。お嬢様.....」

咲夜はレミリアに一礼し紅魔館を後にした.....

.....冥界.....

「これが西行妖の桜か……………」

風也達は冥界に身を置いていた。幽々子と妖夢は何かしら動いて準備をしていた。

「幽々子様、これで開花を早める術式が粗方出来ました。」

「妖夢お疲れ様、風也さん、貴方は私と術式の組みを手伝って欲しいの。」

「ああ、そろそろ霊夢達も異変に気づく頃だ。急ごう……………」

そして西行妖を困む様に桃色に輝く陣の様な物が地面に出た。

「妖夢は亡霊達と厄介な者達の足止めをお願いするわね。」

「分かりました。幽々子様。」

そして妖夢は亡霊達を引き連れその場から離れた。

「霊夢達と敵対する事になるとはな……………だが俺もこっち側だ……………情は流せん……………」

そして西行妖に春の気がどんどん集まり始めていた……………

16章 極寒の気候（後書き）

あとがき

はい、どうも作者です。異変編開始です。風也は異変側という異例ですが楽しく読んでもらえると幸いです。

今回は風也達の出番が減ります。霊夢達がメインになってしまいましたが気にしないで下さい。では次回で会いましょう

次回「寒き2人と人形使い」

おまけ

【レミリア：作者、紅茶を出してくれない？】

【作者：はいっ！只今用意しますっ！】（紅茶をレミリアに）

【レミリア：手際が良いわね。咲夜程では無いけどね。】

【作者：咲夜さんが帰って来るまで咲夜さんの代わりにしましょう（キリッ）

おまけは全て嘘です。

文を少し修正

17章 寒き2人と人形使い（前書き）

前回のあらすじ

この真冬の気候に異常を感じた霊夢と魔理沙は、早苗を守矢神社から連行し、異変を止めるべく原因を探していた。別で動いていた咲夜も異変を止めようと動いていた。

17章 寒き2人と人形使い

そして霊夢達は異変の原因を探しながら飛んでいた。

「つたく、寒いにも程があるわ……」

「ん？あれさ、誰か居ないか？」

「あれは……誰でしょう？」

魔理沙が何か見つけた方向を見る3人、そこには……

「レティー！ー！！落ち着けー！ー！」

「この季節はテンションが上がるじゃない！」

「冬だからテンション上がるのは良いけど上がり過ぎだから！」

そこには、冬でテンションが上がっているレティ・ホワイトロックとチルノの姿があった。

「取り込み中失礼しますが、この気候の原因分かります？」

「うーん、アタイも良く分からないな……」

早苗がチルノにこの気候に関しての事を聞いていたが、チルノは知らない様だった。

「で、まず冬妖怪が五月蠅いんだけど……寒いし、嫌なのよね」

「冬が長続き！良いじゃないの！THE・私の時代！私の季節！
もっと寒くなれよおおおおお！！！！」

レティは冬である為か大声をあげていた。

「あー、もう五月蠅い！」

「れ、霊夢、レティは私に任せておいて先に行って良いよ。五月蠅いだけで害は無いし……」

「じゃあ言葉に甘えて行かせてもらっわ。魔理沙、早苗、行くわよ」

そして霊夢達はレティをチルノに任せ先に進んだ。

「あー！もう！レティはちょっと落ち着いて！」

「無理！」（キッパリ

後ろではチルノとレティの言い争いが聞こえたが聞かなかった事にした霊夢だった。

その頃、別の場所では、咲夜は多数の亡霊や幽霊に襲われていたが全てを悉く撃退していた。

「全く、色々な邪魔が出てくるのは勘弁ね……」

咲夜は全てのナイフを回収し、異変があると思われる方向へ進んだ。

その後、咲夜は霊夢達と合流する事になった……………

「ん？紅魔館のメイド長が何で此処に？」

「博麗の巫女が此処に居るといふ事は異変解決かしら？」

現在、集まっているのは霊夢、魔理沙、咲夜、早苗の4人だった。

「冬が長続きし過ぎているのがおかしいと思っていたので」

「そりゃあ奇遇だ、私らもおかしいと思って異変を探してるんだ……………ん？あれは？」

4人は飛びながら話していたが、魔理沙が前方に人影らしき物を見つけた……………

……………冥界……………

風也は3人の少女と話し合っていた。

「……………という訳で貴女達3人に巫女達の足止めをして欲しい。」

「私は良いですよ。」

すぐにOKを出したのは黒い服の長女ルナサ……………すると

「じゃあ代わりに貴方が私達の言う2つの事聞いてくれないかな……………」

その次女メルランが冗談っぽく言い放った。

「……内容による……かな」

それを聞いたメルランは条件を言い始めた。

「じゃあまず1つ目、これが終わったら私達の家で演奏を聞いて欲しいの。2つ目は~~~~~」

「っ!?!」(ビクッ)

2つ目の条件を聞き風也は啞然として固まった。リリカは頭に?マークしか浮かばなかった。

「え?お姉ちゃん何言ったの?」

「それ、本気なのか?……………」

「ふふふ……そうだよww」

「(。°。111)(ぽかーん)」

するとメルランに何を言ったのか聞こうとしているルナサとリリカの姿があった。

「っ!?!?//////」(ガタッ)

メルランから聞き2人は一気に赤面した。

「と、とりあえず、条件は飲む。足止めを頼んだ。」

それを聞き3人はその場から姿を消した。
ぬな

【西行妖の開花状態：六分咲き】

その頃、霊夢達は……

「おおー、アリスじゃんか！何で此処に？」

魔理沙が見た人影はアリスであった。

「この気候の事に関して調べたのよ。春の欠片……それを集めると春が近づくらしいのよ。そしてその欠片が集中している所も分かったわ。」

「流石アリスだな、仕事が早いZ E……」

「だけどね……」

アリスが戸惑う様になり始めたのを咲夜は見逃さなかった。

「場所が最悪という訳ですか？」

「そうよ……この先、何処か知ってるかしら？」

アリスが先を指していた。

「あゝ、確かこの先って……三途の川じゃ……」

「そう、この先は三途の川……そして冥界よ……」

「だけど異変は止めないといけないわ」

霊夢はキツパリと言い放った。

何処であろうと異変は止めると言わんばかりに……

「本当は行きたくないのだけれども、私も同行して手伝うわ」

「そりゃあ、ありがたい！頼むぜアリス！」

そして三途の川へ向けて進み始めた霊夢、魔理沙、早苗、アリス、咲夜の5人であった。

そしてその先には風也が送った刺客が待っていたとは知らずに……

17章 寒き2人と人形使い（後書き）

今回はバトル的なものは無いです。地味にキャラ崩壊したレティと初登場のアリス、再登場のチルノが出ました。霊夢一行にアリスが加わり5人になりましたね。次回は風也が送った刺客、プリズムリバー3姉妹とのバトルになると思います。次回をお楽しみに！では！

次回「刺客の騒霊」

18章 刺客の騒霊（前書き）

前回のあらすじ

風也は幽々子と共に西行妖の桜の開花を促進させ、霊夢達はそれを止めようと動いていた。そして霊夢達は現世と冥界を繋ぐ門の前へと辿り着いた。そこには……風也が送った刺客が待ち受けていた。

18章 刺客の騒動

魔理沙達は門の前で動けないでいた。

「なあ……これどうやって通るんだ？」

「さあ……でも通る方法を探さないと……」

「それにしても、暖かい風が流れ込んで来るわね」

門の向こうから桜の花びらと共に暖かい風が流れていた。

「という事は、この先に異変の元凶があるって訳じゃない」

すると5人に目掛け、多数のレーザーが霊夢達を襲った。

「くっ！新手！？」

5人は上手く全弾回避し、直撃を免れた。

「貴女達が……」

「あの人が言っていた人達ね」

「此処で倒れてもらおうわ」

霊夢が声が聞こえた方向を向くと、楽器を持つ3人が其処に居た。

「また邪魔が入ったわね。」

「さあ……奏でるわよ」

「『大合葬』霊車コンチェルトグロツソ」

すると3人を繋ぐようにレーザーが出現した。そしてその中心部から無数の弾幕が射出された。

「なっ！？冗談キツイぜ！」

魔理沙も手から弾幕を発射し、相殺し続けていた。

「咲夜！早苗！私が弾幕を一気に相殺するわ！一気に片をつけなさい！霊符『夢想封印』！」

霊夢がスペルを発動させると回りの弾幕を全て跡形も無く掻き消した。

「えっ！？」

「私達の弾幕が！？」

その一瞬に咲夜と早苗がプリズムリバー達に攻撃を仕掛けた。

すると……

ガキイイイン……

「『え？』」

ルナサ達が見た光景は、咲夜のナイフ、早苗のお祓い棒を防いで居たのは、大刀を持つ2体の黒い人型だった。

「この力……まさか……」

すると2人の攻撃をすぐ弾き、刀を持たない手で同時に気を爆発させ2人を吹き飛ばした。

「くっ！あの人が彼方側ということね……しかも……あの技は美鈴の技じゃ……」

咲夜はすぐに体制を取り戻した？

「あの黒いの……やり辛いわね……早苗はあの三姉妹の相手でもしてなさい！」

「えっ!?!」

早苗は霊夢に急に命令され驚いた。

「アリス！あの黒い奴の動きを止められるか!?!一撃で仕留める！」

「分からないけど、やってみるわ……」

アリスは手元に意識を集中し始めていた。それは、糸の魔力を高めているようであった。？

そして魔理沙は八卦路にパワーを集中させていた。

「このっ！こいつ、無駄に力があるわね！」

霊夢は苦戦をしいられていた。鏝迫り合いになると霊夢が力押しに負けていたのだ。

「負けた経験があるから言えるのだけど、これは厄介過ぎる敵よ……」

咲夜も接近戦では押され気味になっていた。この時点で、ナイフを数本折られていた。

一方、早苗は弾幕戦でプリズムリバーと撃ちあいをしていた。

「くっ！邪魔をしないで！」

「私達はこの異変を止める為に此処にきたんです！帰れる訳がありませんっ！」

プリズムリバー達は多数のレーザーを、早苗は星の弾幕を撃って相殺していた。

すると魔理沙達は……

「準備が出来たわ！魔理沙！頼んだわよ！」

ギシッ……

アリスが叫ぶと急に黒い人型2体は動きが止まった。何故なら、その2体に強度の高い糸が複雑に絡り、動きを封じていた。

「2人共！そこから離れろ！これで………終わりだ！恋符『マスタ

「スパーク」

するとパワーを溜めた八卦路で極太のレーザーを撃ち出し、動けない2体を同時に塵と変えた。

「こっちは終わったわね。早苗の方は……」

「さあ！行きますよ！奇跡『神の風』」

スペルを発動した直後、台風のような風がプリズムリバー達を襲った。

「キヤアツ！」

数十秒経った後、プリズムリバー達は吹き飛ばされたのかその場から姿を消した。

「ふう、吹き飛ばすだけでも充分ですよね。」

すると、現世と冥界を繋ぐ巨大な門がゆっくりと開いた……

「おっ！門が開いたぜ！」

「さあ、黒幕の場所に向かうわよ。さっさと春の宴会もしたいからね」

そして霊夢達は冥界へと続く門をくぐり、冥界を目指した。

だが、この後、今まで以上に苦戦を強いられる事となる……

【西行妖の開花状態：八分咲き】
満開まで後少し……

18章 刺客の騒動（後書き）

今回はネタは一切無いです（キリッ

霊夢御一行VSプリズムリバー&unknown2体という構図です。

そして此処からは冥界での戦闘になります。次回は長編になる様に長く書こうと思います。異変側の人数も

残り3人……これで最後になるかは……秘密です。今後の展開に期待下さい。

今回の反省……ちょっと展開を早く書き過ぎた。そこところは反省

19章 庭師と破壊者（前書き）

前回のあらすじ

異変を止めるべく動いている霊夢達はプリズムリバー達を退かせ、冥界へと足を運んだ。

だが冥界には幽々子、妖夢、風也の3人が残っていた。

19章 庭師と破壊者

風也は妖夢と西行妖から離れた場所で見つとして居た。すると風也は瞑っていた目を開け、立ち上がった。

「妖夢……………霊夢達がそろそろ来る……………俺の分身がやられた……………」

「そうですね……………私達の目的は《満開まで時間を稼ぐ》事ですからね」

「霊夢達は5人で動いている……………俺達で4人は抑えるべきだ……………」

「分かりました。私が先陣に行きますよ。任せて下さい。」

妖夢は白楼剣と楼観剣と携え、立ち上がった。

「無茶はするな……………やばくなったら、引いてくれ。」

「分かりました。では……………」

そして妖夢はその場から立ち去った。霊夢達の数人を足止めする為に……………

「さて、俺は此处で待ってるか……………」

風也は近くにあった岩に腰掛け、殺気を抑えジッと霊夢達を待っていた……………

その頃、霊夢達は……………

「冥界って思った通りに薄暗い所なんだな」

「当たり前よ……………死者や亡霊が集まる場所なんだし……………」

霊夢達5人は飛ばず歩いて移動していた。何故なら上空には亡霊が多数待ち構えて居たからである。

すると咲夜が歩くのを急にやめた……………

「咲夜さん？どうしたんですか？」

「隠れてないで出てきなさい……………殺気で分かるわ……………」

すると上空から妖夢が刀を突き立てながら落下して奇襲を仕掛けた。だが咲夜は2本のナイフで刀を受け止めた。

「流石は紅魔館のメイドと言った所ですね。これを受け止めるとは……………」

そしてナイフと刀が押し合い、金属音が静かと響き渡る。

「霊夢達は先に行きなさい！私に此処は任せなさい！」

「頼んだわよ、咲夜！」

4人が走り始めようとした時……

「させない！魂魄『幽明求聞持聡明の法』」

妖夢がスペルを唱えると、半霊が妖夢と瓜二つの姿になり、早苗の前に現れ、刀を突き立てようとした。

「くっ！」

半霊の刀を早苗はお祓い棒で辛うじて受け止めた。

「魔理沙！アリス！3人で進むわよ！彼処は2人に任せるわよ！」

「分かったぜ！」

「ええ！」

そして霊夢達は低空飛行で高速移動を敢行した。

「なるほど……これが貴女の狙いかしら？」

「答える義理は無い……貴女達は此処で倒れて貰いますので」

そして早苗&咲夜は妖夢と激闘を始めた。？

妖夢は半霊と上手いコンビネーションで2人を翻弄していた。

「くっ……手強いわね……早苗！同時に行くわよ！『殺人ドール』」

「はいっ！祈願『商売繁盛守り』」

すると咲夜のまわりにナイフが回転し全弾が妖夢に向け飛び、早苗の周りから札が高速で射出され妖夢と半霊を襲った。

霊夢達は低空飛行で異変の元へ向かっていた。

「霊夢、あの2人は大丈夫なのか？」

「大丈夫よ、あの2人なら何とかなる筈よ……」

「そうであると良いけどね。」

すると霊夢に目掛け、数本の小刀が飛んできたが霊夢はお祓い棒の一振りですべて叩き落とした。

「くっ！新手!?!」

霊夢が投げられた方向を見ると、黒いコートを着てフードを被った人間が立っていた。

「此処は通さん……」

「まったく……どんどん邪魔が出るわね……って……え?!」

その瞬間、その人間はその場から消えていて、霊夢の目の前に拳を

構えていた。

「吹き飛ば……『紅砲』!!!」

そして手に紅い気を拳に乗せ突き出した。

「ぐっ!……」

霊夢は瞬時にお被い棒で拳を防ぎ数メートル吹き飛んだ。

「流石は博麗の巫女……それ位なら防げるだろうな……」

その時、魔理沙はその人間の声に反応した。

「お……お前……ま……まさか……」

「え?魔理沙?知ってるの?」

「知ってるも何も……前の異変……紅霧異変を一人で解決した人間だよ……」

「って事は……風也なのね……」

霊夢は衝撃で痺れた手をプラプラさせ歩いて戻って来た。

「流石に声でバレルか……」

すると風也はフードを外した。

「だが……此処は通す訳にはいかないんでね……『黒符』」

そして黒いコートを脱ぎ捨て、黒いオーラに纏われた瞬間に風也は殺気を溢れださせた。

『俺は此方側だ……通りたければ……俺を倒してからに……』

「くっ……前に会った時とは大違いね……」

「アリス……ビビっちゃ駄目だぜ……」

「え……ええ……」

『3人同時でも良い……かかって来い……』

風也は手の骨を鳴らし戦闘体制に入った。

「魔理沙！アリス！援護を頼むわよ！」

「ああ！『ナロースパーク』」

「わ……分かったわ『シーカーワイヤー』」

魔理沙とアリスは霊夢援護の為、共にレーザーを撃ち出した。

『この程度……』

風也は両手で2つのレーザーを受け止め、効力を消した。

その直後、霊夢が急接近していた。

「隙があり過ぎよ！宝符『陰陽宝玉』！」

そしてその陰陽玉が風也の頭部に直撃し陰陽玉が爆発した。

「やったかしら？」

霊夢は直撃させた直後に距離を空けた。すぐの反撃を受けない為だ。

『生ぬるいな……………こんなのでは致命傷にもならん……………』

煙が晴れて霊夢達が見たのは全くの無傷の風也の姿だった。

「くっ、化物みたいに強くなってるわね……………」

『さて……………反撃といこうか……………』

そして此処から窮地に追いやられるのである……………

19章 庭師と破壊者（後書き）

どうも、更新遅れてすいません。リアルが忙しいんですよ。

今回は冥界でのバトル……

早苗&咲夜VS妖夢

霊夢&魔理沙&アリスVS風也

の構図です。風也は紅霧異変より桁違いの強さになっています。これも主人公クオリティーです。

今回はバトルのつづきとなるでしょう！では！

20章 西行妖の力(前書き)

前回のあらすじ

霊夢達は冥界を進んで居たが、妖夢達により、戦力が半分に分断された……そして、霊夢達は風也と戦っていたが直撃を与えても傷一つ付いていない現実を見せられた霊夢達……霊夢達は全力を出さない限り、勝てないと踏んだのであった……

20章 西行妖の力

『俺を倒したければ手加減は不要だ……殺す気で来い……』

「本気を出さないと勝てる気がしないわね……」

『行くぞ……』

風也は2本の刀を手にした。その時、黒いオーラに侵食され、刃の色が銀から赤色に変色した。

風也は強く地面を蹴り。その足跡だけ残り姿が消えた。

「え？消えた?!」

「霊夢！後ろだ！恋符『マスタースパーク』!!」

魔理沙は瞬時に霊夢の後ろに移動した風也に目掛けマスタースパークを放ち、風也に直撃した。

『ぐっ!……』

風也はマスタースパークの熱で溶けかけた1本の刀を投げ捨て頭部部分を抑えていた。

「魔理沙助かったわ……って効いてる!?!」

「ああ、押してるぜ!」

「2人とも！引きなさい！」

アリスの声が響き渡った……するとアリスの後ろに巨大な人形が現れた。

・・試験中『ゴリアテ人形』・・

「今なら魔理沙のマスタースパークで魔力が周り飛び散っているから十分に動かせるわ」

そしてアリスが糸で操作し、ゴリアテ人形は2本の剣を風也に振り下ろした。

ガキイイイン……………

『ぐつ……………力任せって訳か……………』

風也は1本の刀でゴリアテの剣を受け止めた。だがその衝撃で風也の足元の地面は少し陥没していた。

そして風也はゴリアテの力に力負けしていた。風也の体の至る所から骨が軋む音が出始めた。

ミシミシッ……………

「アリス！時間稼ぎしてくれて助かるぜ！」

「トドメを指すわよ……………準備は良いわね？」

すると霊夢と魔理沙から今までと比にならない程のエネルギーが感じられた。

「このスペルは手加減出来ないぜ！魔砲『ファイナルスパーク』！
！！」

「これで……眠りなさいっ！宝具『陰陽鬼神玉』！！！」

『なっ！？』

その瞬間、ゴリアテがすぐに剣を引き、二人の攻撃を当たらない様に逃げた。だが風也は間に合わず完全に直撃した。

西行妖の近くに居た幽々子は妖夢と風也の心配をしていた。

「戦いの音……2人共大丈夫かしら……っ！？」

すると風也が勢い良く吹っ飛んで来て西行妖の幹に激突した。

『がっ………』

「えっ……！？風也さん！大丈夫！？」

幽々子は吹き飛ばされて来た風也に駆け寄った。すると風也が吹き飛んで来た方向から人の気配を感じた。

「やっぱりアンタなのね……西行寺幽々子……」

「早く家に帰ってゆっくりしたいぜ……」

「博麗の巫女が相手じゃ風也さんでも負ける訳ね……」

そして幽々子が2つの扇子を出そうとした時……

「ま、待て……これは……俺の戦いだ……幽々子さんは……見ていな……」

風也は強力な攻撃を受け、ボロボロな体を無理矢理起こした。

「霊夢でも……これには耐えられるか？『白』」

すると急に後ろに咲いていた西行妖が輝き出した。

すると風也の体から漏れていた黒符のエネルギーを吸収し始めた。

「なっ！？ち……力が……」

西行妖は吸収を辞めず、根こそぎに持って行こうとする勢いでエネルギーを吸収し続けた。

「早く離れなさい！死ぬわ！」

幽々子はすぐに気づき、助けようとしたが、西行妖と風也の周りに結界が貼られている為助ける事が出来ない。西行妖の妖力で作られた結界があるからだ。

「ぐっ……だ……大丈夫……だ……生き……残れば……良いんだ……」

「どきなさい！霊符『夢想封印』」

霊夢は風也を助けようと結界に攻撃を仕掛けたがビクともしない。

その後、風也に頭痛が襲い始めた。

「!？」

風也はエネルギーを吸収される差中、頭の中にフラッシュバックが視えた……

その光景は……西行妖の前で周りを血で染めて倒れている幽々子の姿だ……そしてその隣に紫が付き添い涙を流していた。

「な……何なんだ……この光景は……こ……これは過去……？」

風也が視たのは西行妖の血塗られた記憶だった……幽々子は自害し、西行妖を封じる結界になろうとした記憶が……

「嫌だっ！こんな過去なんか視たくないっ！」

風也は視える過去の悲しみを感じ頭を抱えて涙を流していた。

脳に直接膨大な記憶がなだれ込み、風也の頭は壊れる寸前であった……そして精神的にも……

「霊夢！あれはヤバイぜ！精神が壊れかけてる！」

「助けたいのは山々よ……だけどこの結界を何とかしないと……」

「うわあああああ！……！」

風也は膝を地面につき、身体の至る所から出血し始めた。

「こんなの……………こんなのは……………視たくなかった……………こんな悲しみしか無い過去なんてっ！！」

すると風也に変化が出始めた……………目の色が茶色からピンク色に変色し始めた……………

すると結界が見えない 程の輝きを放ち始めた……………

「み、見えないっ！」

「眩し過ぎるぜ！」

そして西行妖を中心とする光の柱が立ち伸びた。

その頃の妖夢……………

「ハア……………ハア……………やっと倒れたわね……………」

「え……………ええ……………凄く手こずりました……………」

その場には息が上がっている咲夜と早苗の姿とやられ倒れている妖夢の姿があった。

「負けました……………進むなら……………」

そして西行妖の方面から光の柱が3人の目に映った。

「な……………何？」

「あ……………あれは……………西行妖の妖力？」

すると妖夢は今までとは比べ物にならない寒気がした。

西行妖の方で何かがあったと本能が感じていた。

「ま……………まさか……………幽々子様か風也さんの身に何か……………」

妖夢はすぐ起き上がり、全速力で飛び始めた。

「出来ればお二人も来てください！嫌な予感がするんです！」

「え？ええ！」

「あ、分かりました！」

そして咲夜と早苗の2人も妖夢を追う為に飛翔でついて行った……………

- - - - - 無事で居て下さい……………幽々子様……………風也さん…………… -

同時刻……………

「やっと光が消えたわね。大丈夫かしら？風y……」

霊夢は風也に近づき心配をしたその瞬間……

ゴキボキッ

風也の裏拳が霊夢の脇腹に深くめり込み肋骨が折れる音がした。霊夢は数十メートル遠くの岩まで吹き飛ばされた。

「え………？」

魔理沙とアリスは仰天していた……霊夢が遠くに吹き飛ばされたのだ……

そして西行妖の桜は輝きを完全に失っていた。風也が立ち上がると全身から西行妖の妖力が溢れ出していた。目の色は完全にピンク色に変色して涙を流していた。

『消える………』

この異変は……真の終わりへと向かい始めていた。だが終わるのに……この風也を戦闘不能にするしか手は無いのである……

20章 西行妖の力（後書き）

今回は

風也VS霊夢、魔理沙、アリスのバトルです。

途中書くの苦労しました、〃〃〃；

書いた経験の無い文章形でしたので。でも頑張りました。

精神崩壊した風也がどうなるかは次回のお楽しみ！期待して下さい
！いや期待して貰わないと困ります。私が

では次章で会いましょう！

21章 戦いの終末（前書き）

前回のあらすじ

霊夢達は風也に押され気味だったが高火力の攻撃で戦況を引っくり返した。風也が切り札を使おうとした瞬間、西行妖が風也からエネルギーを吸い取り力を与えた。そして霊夢は裏拳1発で遠くに吹き飛ばされたのだ。

21章 戦いの終末

「れ、霊夢!？」

魔理沙は霊夢の所へ急いで駆けつけていった。

「くっ!ゴリアテ!」

アリスはまたゴリアテを操作し大剣で風也を狙って振り下ろした。

だがその大剣は、いとも簡単に素手で受け止められた。

「嘘でしょ……素手で止められる訳……」

『……………』

風也は剣を受け止めている手に力を込め始めた。すると剣に指がめり込み、剣にヒビが入り始めた。

「ま……まさか……剣を壊す気なの?!」

アリスは悪寒を感じ始めた。

こんな恐怖は感じた事が無いからだ。

ピシピシッ……バキイン……

そしてゴリアテの剣は素手で粉々に砕かれた。

すると風也の手に妖力が集中して何かの形を形成していた。

それは……桜色の長い柄を持ち……巨大な片刃を持った死者の武器
……鎌だ……

ゴリアテは壊された剣を捨て、拳で風也を潰そうと拳を振るった。

ドゴオン……

だがその場には既に姿は無く風也はゴリアテの後ろに浮いていた。

『……首狩り』

その瞬間、鎌を軽く振りゴリアテの首は胴から離れた……

「う、ゴリアテ……？」

『沈め……剣技「散り桜」』

風也は一瞬鎌を振った……そしてその数秒後、ゴリアテの周りに桜の花びらの様な妖力が囲み、全体から縦に斬れ始めゴリアテはバラバラのガラクタと化した。

「ゴツ、ゴリアテエエエエー！」

アリスはゴリアテが壊され叫んだ。

『トドメだ……』

風也はアリスの後ろに立ち首を狙い鎌を振りかざした。

ガキイイイン……

鎌が当たったのはアリスの首では無く……妖夢が持つ楼観剣だった……

「アリスさん……逃げて下さい……風也さん……やり過ぎです……これ以上は……」

「え……ええ……」

妖夢はアリスを庇う様に楼観剣で鎌を防いでいた。その時、幽々子は妖夢に忠告をした。

「妖夢！今の風也さんは普通じゃないわ！話しても無駄よ！」

「そ……そんな……」

妖夢は風也の眼を見て、正気ではないという事がすぐに分かった。眼が曇っている様に濁っていたから……

「分かりました……話しても無駄だと言うのなら……私が全力を持って貴方を止めますっ！」

妖夢は上手く鎌を弾き距離を取った。そして、楼観剣ともう一つの刀……白楼剣を鞘から抜いた……

妖夢は風也に急接近し、刀を振る。風也は鎌を巧みに振り、妖夢の刀に合わせてきた。

その時、遠くからナイフと札が風也に向け飛んできた。

それに一早く感づいた風也は
力任せの鎌振りで妖夢を吹き飛ばし鎌を回転させ全てを弾いた。

「やっぱり防がれましたか……」

「さ、咲夜さん……私……あの人は戦い辛いです……」

「なるほどね……貴女は下がってなさい……」

その攻撃は咲夜と早苗による物だった。

その瞬間、風也の頭上に霊夢が現れた。

「夢符『二重結界』！」

霊夢を中心に小さい二重の

結界が出た。風也はすぐにその場を離れ、結界をかわした。

「くっ……速いわね……」

霊夢は脇腹を抑えながら着地した。

風也が逃げでの浮遊での着地をした瞬間、巨大な光の玉が飛んできて風也は咄嗟に素手で弾いた

「あっちゃ、当たらなかったか……」

魔理沙が遠距離でルミネスストライクを撃っていた。

『……………』

風也は自分が不利と悟ったのかもう片方の手に妖力を集中させ、桜色の突撃槍を生成した。

「皆さん……………協力して風也さんを止めるのを手伝って下さい……………」

「ああ！此処で死んじゃあたしらが困るしな！」

そして妖夢、霊夢、魔理沙、咲夜が風也の前に立ちはだかった。

咲夜と妖夢は左右から近接で風也を翻弄し始めた。

「眼が曇っていれば……………技の精度も落ちる……………それが丸分かりです……………えっ!？」

だが風也は咲夜を蹴り飛ばし妖夢の2本の刀を遠くに弾き妖夢に鎌を振り下ろした。

ドスッ……………ポタッ……………ポタポタ……………

血が流れた……………だがその血は妖夢の物では無かった……………

それは……………風也が自分自身で鎌を持った手を自分の槍で刺して手の動きを止めていた……………

『ぐっ……………』

「え？……………」

風也の痛みを堪えた様な表情を妖夢はハッキリと見た……………

「はあっ！」

霊夢は風也を横から蹴り、風也は浅くも蹴りが当たった。

「妖夢、大丈夫かしら？」

「あ、はい……………」

そして戦っている内に、風也を場所的に追い詰めた……………？

「追い詰めたわよ……………」

「霊夢さん……………もう良いです。後は私に任せて下さい……………」

「わかったわ……………」

そして霊夢、魔理沙、咲夜は武器を降ろした。

そして妖夢は口を開いた……………

「風也さん……………貴方は何故そんなに苦しむんですか……………？西行妖の記憶に縛られなくても良いんですっ！」

『ぐっ……………』

風也の頭に頭痛が走り、頭を抑えた。

「前の様に白玉楼で平和に居ましようよ。苦しまないで幽々子様と私と風也さんで3人で！貴方が苦しんでると私も苦しく感じますよ……………」

ガラんガラんッ……………

風也は鎌と槍を地面に落とし頭を抱え苦しみ始めた。

『うつうつうつ……………』

「元に戻って下さい！風也さん！」

遠くで幽々子が様子を見ていた……………

「妖夢だったら……………考えたわね……………あの人が一番望む事を当てるなんて……………」

すると風也の目の色が茶色に戻りゆっくりと立った……………

「妖夢……………ありがとうな……………後……………これを……………」

風也は正気を取り戻し、手のひらから春の欠片の塊を妖夢に渡した

……

「本当に……すまないな……」

ドボン……

風也は体のバランスを崩し三途の川に落ちた……

「風也さん！」

妖夢は春の欠片を地面に置き、風也を助けようとしたが間に合わなかった……そして妖夢は涙目になりながらも霊夢達と風也を探した。だが発見出来なかった……

その後、幽々子が春の欠片を使い、幻想郷に春を戻した……

そして幽々子指揮で多数の亡霊での数日間の搜索がされたが見つからなかった……

……三途の川……

「はあ……様も人使い荒いなあ……ん？人が……浮いてる……？」

その人は棒で浮いてる人を川から上げ船に乗せた。

「んー、息はしてるね……とりあえず連れて帰ろっかな……」

そしてその船はある場所へと向かっていった……

21章 戦いの終末（後書き）

更新遅れてすみません。これで妖々夢編は終わりになります。
次回は彼岸編です。

今回の後書きはすくなめとさせて頂きます。では

22章 鬼の謀反（前書き）

前回のあらすじ

風也は西行妖の力を手に入れ精神的に壊れていたが妖夢の言葉により正気に戻った。だが三途の川に落ち船に乗る者に助けられた。そしてある場所へと連れてかれた……

22章 鬼の謀反

風也は背負わされている時に目を覚ました。

「此処は？……俺……三途の川に落ちたんじゃ……」

「お、目を覚ましたかい？」

「ん？誰？」

「まあそう言うのは当たり前か…私は小野塚小町って言う死神さ」

小町は胸を張って自己紹介してきた。

「とりあえず自分で歩けるかい？」

「あ……ああ」

風也は自分で歩こうとしたがバランスを崩し転んだ。

「あれ？歩き辛い……」

「肩を貸してあげるよ。ちょっと君と私がお呼ばれなんでね」

小町は風也の肩を組み、ゆっくりと歩いていた。

廊下を数分歩いた後、立派な広間に着いた。

「小町、お疲れ様です。少し下がって下さい。」

そう言われると小町は肩組を外し後ろに下がった。

「貴方が風也さんですね。私は幻想郷担当の閻魔、四季映姫と申します」

その映姫の隣には角を持つ巨漢が居た。所謂鬼だ。だが何故か悪寒がした。

「生者で此処にいる事は異例ですが仕方ないですね。とりあえず貴方の経歴を調べさせて貰いました。」

すると映姫は厚い本の様な物を開いた。

「異変解決に伴った事は良いのですが、その後は守る為とはいえ殺人、異変に加担と黒としか言いようが無い行為が目立ちます。それは認めますか？」

「ああ、認める……」

風也はアツサリ肯定した。隠し立て出来るとは思っていない様だった。

「とりあえず調査員が近く来るので殺人を犯している人は死刑にされてしまいます……牢屋に入って隠れて貰います。」

「分かった。」

「風也さん、行きますよ」

風也は小町に連れられ、隠し牢屋に案内された……

2日後……

そして牢屋生活が3日目となった……今日、映姫が言っていた調査員が来るらしい……風也は自分の力の確認と瞑想をしていた。

「うむ……牢屋は何とか破壊出来るが……全身強化まで力が回らないな……あの力も出ない……」

すると……

ドゴーンッ……!

「ん……?」

突然、轟音が響いた……

その頃……

死神2人が鬼と交戦していた……

「わわわっ!」

小町と似た服を着て鎌を持った男が鬼に腕振りで吹き飛ばされ、壁に激突した。

「鬼に力じゃ敵う訳無いだろ……………」

もう1人の死神が怯えていた。

その時、1人が鬼の後ろに回った。小町である。

そして小町が鬼の脳天に鎌を突き立て、血が噴水の様に吹き出し倒れた。

「す、凄い……………」

「流石は小町さんだ……………」

死神2人はその光景に驚いた。

「とりあえず状況を教えてくれない？」

小町が2人に状況を聞いた、

「は、はい。現状では下働きの鬼の大半が謀反に参加してる様で、映姫様も悔悟の棒を取り上げられ何も出来ず捕まったそうです。」

「映姫様が！？早く助けないと！」

「ですが、その部屋を突破するのが難しく、突入した者達20名程が全滅したんです。」

小町は難しそうな顔つきで考え始めた……………

「とりあえずバラバラになった者を集めるしかないね」

「此処に居たのは50名程ですが半分はやられてると思います。ですが探しましょう!」

小町は他の死神と共に分断された者を集める為に動き出した。

その頃牢屋では……

風也は牢屋で大人しくしていた……だが異変を感じた……

「っ!?!……血の匂いか……とりあえず牢屋を出てみるか……」

風也は手に黒符の力を込め牢屋に触れた……するとじわじわと牢屋を老朽化させていった……だが壊すまで至らなかった。

「くそっ、これが限界か……こうなったら……『紅砲』!!」

老朽化した牢屋を全力で気に乗せた拳で殴った。すると牢屋の一部に人が通れる程の穴が空いた。

「よいしょっと……さて、様子はどうなってるんだか……」

そして風也は牢屋を出て廊下へと出た……

するとすぐ見た光景は大型の鬼が2体とボロボロにされている死神が1人居た。

「チッ、ありゃ死にかけてる……」

風也は鬼にバレない様、死角から潜り込み腕を狙った。

「離せこの野郎！『紅砲』！！」

鬼の腕を紅砲で攻撃し鬼がボロボロにされている死神を離した。

【邪魔をするな！】

その時……もう1人の鬼に薙ぎ払われ、壁に激突した。

「ぐっ……なんつーバカ力だ……」

風也は先ほどの頭から流血を起こしていた。肉体強化がされていない為だ。

その時、落ちている鎌に気づき拾い上げた……

「さて、武器も拾えた……やれるか？」

そして黒符の力を足に込め一時的に強化し、鬼の首目掛けて鎌を振るった……

だが計算外の事が起きたのだ……鬼に腕で受け止められた……

【邪魔だ蠅が！】

ドゴンツ！グシャツ！メキメキメキ……

風也は鬼の鉄拳を口口に食らい。壁ごと潰された……………

すると拳が打ち込まれ壁が凹んだ所から赤い液体が漏れ始めた……………
…風也の血である……………

スパンツ！

その瞬間……………鬼の手が切断された……………

【ぎっ！ぎゃあああああ！】

鬼の1人が痛みで悲鳴を上げた。手首部分が綺麗に切断され、肉や骨が剥き出しになっていた。

【なに?!】

すると壁に残った手が落ちた……………そして目が変色した風也の姿があった。何故か髪の一部の色も桜色になっていた……………

『全く……………死にかけたぞ……………』

すると風也の両手から3本の鎌が出現した。

『挨拶がわりだ……………』

すると2本を投げ、まず1人の鬼の腕を肩から切断した。

『さあ……血の桜を咲かせて貰おうか!』

風也は鎌を刀に変形させ、刀を持たない方を鬼に向けた……?

『花を咲かせるのに種は必須だよなあ……「桜種弾」……』

風也の掌から無数の種状の弾幕が撃ち出され、2体の鬼の体に埋め込まれた。

【何だこの弾は?痛くもないわ!】

鬼は何とも無いと思いき風也に殴り掛かろうとした……

『愚かだな……さあ、咲け!』

ガッ!

風也は刀の柄を強く叩いた……すると鬼達に異変が出始めた。

【っ!?なんだっ!?身体が……膨れあぐっ!】

ボンッ!!!ビシヤッ!

鬼の腹部が膨れ上がり、破裂した音が響いた……そしてその死体には血で真っ赤に染まった桜が2本咲いていた……

その爆発で、その廊下は鮮血で真っ赤に塗られた……

『っ!……やっと……理性が保てる様になり始めたか……気

を抜くと理性を失いそうだな……」

風也は顔に付いた血を拭った。

その後、ボロボロにされていた死神の男に駆け寄った。

『おい！大丈夫か？』

「な………なんとか………ありがとうございます………」

その者は片腕を押さえて痛みを我慢していた。

『休んでな、俺に任せておけ』

「た………頼みます………」

そして男は気を失った……

『はあ………』

風也は溜息をした。その後ろには新たな鬼が3人来ていたからである。

『邪魔する気なら………容赦はしない………』

風也の殺気で鬼達は一瞬怯み、めげず3人が殴りかかっていった……

……

「剣技………」

そして数分後……他の死神達がその場に到着した……だが風也の姿はなかった。

「な……なんだこれ……」

「派手に殺してる……」

2人の死神が見たのは……血で染まった廊下……惨殺されていた鬼の死体が倒れていた……

23章 共闘・救出（前書き）

前回のあらすじ

彼岸で鬼の謀反が起きていた……風也は血の匂いで異変を感じ牢屋を破壊して脱出した。廊下に出ると鬼の姿……その後は惨殺……西行妖の力を制御し始めていた……

23章 共闘・救出

『邪魔をするなああああ!!』

風也は鬼を空での回し蹴りで壁に吹き飛ばし、すぐに間合いを詰め頸動脈に刀を突き刺し切断した。

『それにしても……進むにつれて鬼が多くなってるな……』

風也が通った廊下は血と死体で染められていた。首が無い鬼、真つ二つに斬られた鬼、腹部に穴が空いている鬼、様々な死に方であった。

『ん？あれは……？』

風也は前方に鬼と戦う死神の姿が見えた……

「映姫様の部屋に鬼が集中してるって事は……映姫様は彼処に居るって訳かい……」

小町は鎌で鬼と互角に渡り合っていた。その時もう一人の鬼が後ろから棍棒で小町に殴りかかろうとしていた。

「っ!？」

小町は後ろからの殺気に気づいたが一瞬反応が遅かった。そして直撃を受ける直前……

『剣技「現世斬」』

風也が一瞬で間合いを詰め、鬼の手首を首ごと一閃で切断した。

『えーっと……小町さんだっけか？油断しちゃ駄目だろ？』

「アンタは風也さんかい？助かったよ。」

『といつても……俺達囲まれてるけどな……』

風也と小町が居る周りには数十の鬼が二人を囲んでいた。

「こりゃあ……一手間掛かりそうだねえ」

『まあ……数は多いが質がなってなければ……ただの雑魚だ……』

「それもそうだ。あたいの背中は任せたよ？」

『ああ……俺の背中も任せる……』

小町と風也は背中を合わし臨戦体制を取り、二人は背を向け合いながら鬼達に斬りかかりに行ったのであった……

その頃……

「貴方達、こんな事をして許されるとでも思っているのですか？」

映姫は鬼達に捕まり、縄で縛られていた。そして指示していたのは、風也があの時見た側近の鬼であった。

【元々はアンタらが悪いんだぜ？俺達の扱いを酷いしよお……】

【おい、御託は良いだろ、俺達は映姫様と楽しい事でもすれば良いだろ】

【ククク……それもそうだな】

すると2人の鬼が映姫に近づき始めた。

「い、いやっ！来ないで！」

【助けなんて来るわけ無いだろ？痛いのは一瞬だけだ、後は快樂が待ってるぜ？】

ビリビリッ！

すると鬼の1人が映姫の服を掴み、引き破った。

「いついやあああああ！！」

【さて……やろうか……っ！？】

その時、鬼の体に数本の刀が突き刺さり、1人の鬼が倒れた直後、扉に切れ目が入りただの木材と化した。

『ギリギリだな……刀を投げて正解だったな……』

「確かに、危なかったね。」

扉をくぐって来たのは。風也と小町だった。

【なっ！？あの包囲網を突破したのか！？】

『包囲網？あの程度がか？俺を足止めしたければ数千は用意しておくんだな……』

「あたかも不用心だったね……鬼が急に働き始めたと思ったら……こういう事だったのかい」

【ぐっ！お前達！2人を殺せ！】

その号令で完全武装をした大型の鬼が2人の前に立ち塞がった。

『ガツチリと鎧を着てるな……そんな鉄板で防げるとは思わんがな……剣技「散り桜」……』

風也は一瞬で鬼の全身を切り刻んだ。

【こんな掠り傷程度！】

鬼はなり振り構わず風也を狙い棍を大振りに振り下ろした。

風也は掌で巨大な棍を受け止めた。

『これは……やっと……使えるまで力が戻ったな……』

その手からは黒いオーラが溢れ出し触れた場所から棍が崩れ始めた。

『失せろ！「黒符」！！』

そして3人の鬼の足元に黒い円が出現した。

『小町さん！離れてろ！』

その直後、黒い円から黒いオーラが真上に放出され鬼を飲み込み、塵残らず消滅した。

『これで……終了だな……』

「映姫様！ご無事ですか！？」

小町が安心する暇も無く映姫に駆け寄った。

「小町、心配してくれてありがとう。風也さん、この度はありがとうございます。うございます。」

「あー……と……とりあえずこれでも羽織ってくれ……目のやり場に困る……」

風也は顔を映姫から背けながら自分のコートを脱ぎ映姫に被せた。

「え？あつ！／＼／＼」

映姫は風也が何故顔を背けていたのかが分かり赤面した。

「まあ……無事で良かったよ……うん……」

「映姫様も乙女ですな」

「小町？それ以上言つと……減給するわよ？」

小町が調子に乗って言った言葉を映姫は見逃さずキツツイ一言を浴びせた。

「ひいひいひい！映姫様っ！それだけは勘弁して下さいっ！」

「ハハハ……小町さんも大変だな……」

厳しい一言でビビる小町を風也は笑っていた。

「すまないが、翌日には幻想郷に帰してくれないか？」

「ええ、良いですよ。貴方はまだ死んではない。此処に居るのは似合いません。良ければ時間があつたら足を運んで下さい。御持て成しますよ。」

「俺はそれまで復旧作業でもやらせてもらつよ。」

そして風也の周りに白い陣が出現した。

「『白符』！」

陣が輝き、壊れている壁や天井がゆっくりと直り始めた。

「明日の朝には全部直つてると思うよ。」

「ありがとうございます。」

「俺は寝るんでな……zzzzzzzz」

風也は壁にもたれかかりゆっくりと寝始めた……

翌日……すっかり建物は元通りになっていた。

そして三途の川……

「さて、風也さん行くよ。」

「何日ぶりだろうな……幻想郷は……」

風也は川を眺めながらゆっくりしていた。

あの後、腕の立つ死神が数人帰ってきたらしく、残った鬼を捕縛し牢屋に閉じ込め鎮圧したらしい。

「まあ、また機会があったら三途の川の岸に来ておくれよ。映姫様と一緒にもてなしたいからね。」

「ああ、約束するよ」

そういう話をしている内に、向こう岸に着いたのである。

「じゃあ、小町さんまた会いましょう。」

「あたかも仕事いっぱいあるから戻るよ」

そして風也は幻想郷方面に歩き、小町は映姫の元に戻る為船を進めた……………

数時間後……………

「といつても……………白玉楼には戻り辛いしな……………何処かに長居したい所だぜ……………」

風也は妖怪の山の薄暗い所を歩いて呟いた。その時、一瞬違和感を感じた。

「はぁ……………また面倒事に遭遇かよ……………出て来い……………」

そして無音で風也の斜め後ろから剣を突き立て様と落下してくる者が現れた……………

「チツ……………」

風也は刀を鞘から抜き、相手の刀を受け止めた……………

「良く分かりましたね……………」

「こついう事には敏感になつたんでね……………」

そして刀と刀が鏝迫り合い状態で両者は睨み合っていた……………

24章 天狗の襲来（前書き）

前回のあらすじ

風也は彼岸での問題を終結させ、幻想郷に戻る事が出来た。白玉楼に戻り辛い風也は妖怪の山を彷徨っていた。その時、あらぬ来襲が来たのである。

24章 天狗の襲来

「お前は何者だ？」

風也は罅迫り合い状態から相手を弾き飛ばした。

「私は哨戒天狗の犬走椀と申します……………貴方を捕縛すると大天狗様から命を受けたので……………」

「なるほどね……………しかも周りには16人が……………」

風也は周りの気配で正確に人数を当てた。

「なるほど、隠れても無駄という訳ですか……………」

「『黒符 縮』」

風也の身体から微量の力が漏れ出した。

『大人数相手は面倒だ……………「これ」を使わせて貰う……………』

風也は1枚のスペルカードを取り出した。

『展開……………』

するとスペルカードが輝き風也の右手に巨大な砲が装着され、左手には先矛に丸い凹みがある大剣が現れた。

「食らえ！」

1人の哨戒天狗が風也の後ろを狙い斬りかかった。

だが風也は体を270°回転させ、その哨戒天狗の刀を大剣で粉碎し、幹に吹き飛ばした。

「……………え？」

『まずは1人……………』

「きつ、貴様！」

別の哨戒天狗の2人が左右から同時に攻め、風也は砲と大剣で2人の剣を受け止めた。

『お前等じゃ俺の相手にならんわ！』

風也は力任せにその二人の剣を大きく弾いた。

「うそっ！？力尽くにも程がっ……………っ!？」

その直後、風也は二人に銃口を向けていた。

『これで3人……………』

砲と大剣の先から強力な爆発が起き吹き飛ばしその2人も遠くの幹に直撃し気絶した。

その瞬間……………

ビシッ……

剣と砲にヒビが入った……射出されたエネルギーが強力過ぎて武器自身が耐えられなかったのだ。

『チツ、こりや使えないな』

風也はヒビの入った2つの武器をスペルカードに戻した。

「好機っ！」

残りの13人が一斉にかかり、風也は場所を変える為に走りはじめた。

「逃げるなっ！」

『逃げるなって言われても不利だから逃げるに決まって……チツ……早いな』

風也は走る足を止めた。目の前に椛が立っていた為だ。

「出来れば大人しく縄について欲しかったのですが……仕方ありませんね……」

椛が刀を見えない速さで振っていた。

『っあつぶねえ……一瞬動くのが遅れていたら……首が飛んでたかもな……』

風也の首部分が椀の剣で少し切れていた。

『なら全力で行かせて貰う……………「黒符 放」』

スペルを唱えると風也の全身を黒いオーラを纏った。

「……………貴方……………もはや人間から遠いですよ……………」

椀は急所を外した所、肩を目掛けて刀を振り下ろした。すると風也は片手で真剣白刃取りをした。

『砕ける……………』

掴まれた椀の剣は黒いオーラに侵食され儂く砕け散った。

「なっ!?!」

『気絶で済むんだ。良かったと思え』

風也は瞬間的に椀の後ろに移動していて椀の首を軽く叩き神経を麻痺させた。

「くっ……………」

椀は首の後ろを叩かれ気絶してしまった。

『後は……………雑魚だけか……………』

哨戒天狗達を睨んだ時……………

「あややややっ!」

空から声が聞こえた。

『誰だ?』

「あやー、迷惑掛けてすみませんねえ。此方の手違いで貴方の身に危険が晒された様ですね。」

風也は黒符を解き、口を開いた。

「頼むぜ……本当に死にかけたからな……」

「おっと!申し遅れました!私は『文々。新聞』担当の射命丸文と
言います。あ、これは名刺です。」

文が一枚の紙を渡してきた。

「ふーん、名刺ね……」

「良ければ今度来てみてください。この名刺を天狗に見せれば案内
すると思うので」

「ん……わかった。」

「ではっ!そこの君達!いくよ!」

「は、はいっ!」

文は高速で飛び、哨戒天狗達は棍を担ぎ去って行った。

「ふう……………とりあえず『これ』を修理して貰わないとな……………」

風也は1枚のスペルを取り出して溜息を吐いた。

……………河城ファクトリー……………

「お値段以上？にとり〜？」

にとりは歌いながら機械をいじっていた。

「お〜い、にとり〜」

遠くから声が聞こえた。風也の声である。

「おー、盟友！どうしたんだい？」

「この2つにヒビが入ってさ」

風也はスペルカードを展開し、2つの武器を出現させた。

「んー、中身から壊れてるね。エネルギーに耐えられなかったのかな？」

「ああ、そういう訳で直して貰いたいんだ。」

にとりは武器を調べ終え岩に座った。

「盟友の頼みなら任しておいてくれ！だけどこれは修理に15日は掛かるけど良いかい？」

「ああ、頼む」

こうして武器をとりに渡し河城ファクトリーを離れた……

「さて……身を隠す為に紅魔館でも行ってみるか……」

そして紅魔館に行く為に足を進めた……

24章 天狗の襲来（後書き）

次回はある者の血塗られた過去の話……………

25章 能力の正体（前書き）

前回のあらすじ

風也は哨戒天狗、椋達と戦闘になり苦戦を強いられたが撃退は出来た。その後、射命丸文という天狗に謝罪され、名刺を渡された……そして壊れた武器をにとりに渡す為河城ファクトリーで武器を渡した後、紅魔館へと向かった。

25章 能力の正体

そして夜……………

「で？此処に居座りたいって訳かしら？」

風也は紅魔館の大きい部屋に案内されていた。

「ああ、白玉楼には帰り辛いしな…………… 実質死んだ事になりかけだし……………」

「まあ部屋は空いてるけど…………… 妖夢達は良いのかしら？」

「っ！！」

風也はその言葉で黙った……………

「話したく無いのね…………… 良いわ…………… 暫く此処に居ると良いわ」

「ありがとう……………」

「安心しなさい、貴方の事は匿っておくわ」

「では部屋は此方です」

風也は立ち上がり咲夜に部屋の案内をされ、ベッドの上に寝転んだ。

「はあ…………… 妖夢は…………… 今頃どうしてるんだろうっな……………」

そして眠りについた……………

その頃、レミリアの部屋では

「お嬢様？考え事ですか？」

「ええ…………彼の力について少しね…………最初は気付かなかったのだけど…………昔に彼と会ってる気がしたのよ」

レミリアは紅茶を飲みながら呟いた。

「はあ……………ですがあの時来た時は幻想郷に来てから1ヶ月も経って無い筈ですが……………」

「まあ、私の勘違いかもしれないわね……………この話は忘れて良いわ」

「分かりました。お嬢様」

深夜2時頃……………

「起きてくれないかしら？」

「ん？声？」

風也は頭に直接声が聞こえた気がして起きた。

「図書館に来てくれないかしら？」

風也は静かに部屋の扉を開け廊下に出た。

「図書館ってこつちだっけ？」

適当に廊下を進み、図書館にすぐに着いた。

「夜遅くに呼んでごめんなさいね。」

「いや、充分寝たから大丈夫さ」

パチュリーが椅子に座り本を読んでいた。

「貴方の能力の黒符だけど、似た物が魔道書にあつたわ……………だけど……………」

パチュリーは急に俯いた。

「だけど？」

「その魔法と同じなら……………禁忌の魔法なのよ……………自分の命を削る事が代償の黒魔法……………」

「黒魔法……………だと？」

「ええ、属性を持たない禁忌の魔法……………命を代償にし強大な力を得る代物よ、それを貴方は平然と使っているの」

風也は思い出した。黒符を使う度に体に異変が出始めていた事に…

……

「貴方………それを使い続けると………いずれ命を落とすわ………」

その言葉を受け風也は

「命を落とすと言っても、俺の命は拾われた物、俺の命なんて安い物さ」

パチュリーは啞然としていた。自分の命を安いと言った風也の言葉が信じられなかった。

「貴方………正気なの？」

「ああ………薄々感じてるんだよ………俺が人間じゃなくなってきてる事にな………力を使う度に人間からかけ離れていく………」

「そう………その黒魔法の大体の能力が『全身強化』『超速再生』『妖力転換』の3つが代表的な能力よ」

2人はその魔道書を見ながら向き合って話をしていた。

「全身強化のは俺の黒符にはあるが他2個は無いな………」

「そしてもう一つ、力をイメージで形状化出来る事よ………」

「っ！！」

「ちょっと試してくれないかしら？」

「あ、ああ……『黒符 放』」

黒符を発動させ全身が黒いオーラに纏われた。

「そのまま右手に盾をイメージしてみて」

『分かった……』

風也が右手に意識を集中させ盾をイメージした……すると黒符のオーラが形状を変化させ長方形の黒い盾が右手に出現した。

『うおっ！本当に盾が出たな』

「やっぱりね……ありがとう。もう元に戻って良いわ」

『ああ……』

そして黒符を解き普通の姿に戻った。

「やっぱり同じね、貴方が無いと言ってた『超速再生』『妖力転換』はまだそこまで覚醒してないからよ」

「なるほどな……」

「だから無理に使っては駄目よ……」

「ああ、ついでにさ、この本にある『賢者の石』って物を知りたいんだが……」

そしてパチユリーと風也の話は朝まで続いたという……

26章 賢者の石（前書き）

前回のあらすじ

風也は紅魔館を訪ねレミアアの承諾を得て紅魔館に住む事になった。深夜パチュリーの元で風也の『黒符』の正体が判明した……だがそれは命を代償に力を得る危険な物だった……

26章 賢者の石

数日、風也はパチュリーと図書館で籠りパチュリーから魔術を習って居た。

「なあパチュリー、この五行思想の基礎なんだけどさ、五行のバランスが取れてるか分からないんだが、見てくれるか？」

風也は五行思想の陣を出しパチュリーに見せた。

「うーん……若干火と水が弱くて均等じゃ無いわね……でも数日で此処まで行くのは凄い方よ？」

「やっぱり部分が弱いか……いや、パチュリーの教え方が分かり易いからだよ」

数日二人で長く居たせいか、パチュリーと仲良くなっていた。

「パチュリー様〜！お茶を入れてきました〜」

赤い髪の女の子が2人分の紅茶をお盆で持ってきた。彼女は「小悪魔」パチュリーが召喚した使い魔らしい。

「風也、少し休憩しましょ」

「ああ……流石に休憩無しはキツイからな」

風也は首をゴキゴキと鳴らし体を伸ばしていた。

「魔術つてのは原理が難しいんだな……覚える事が多い……」

「当たり前よ、取り扱いも注意しなきゃいけない代物だし」

風也とパチュリーは紅茶を

飲みながら魔術について話をしていた。

「だけど貴方の体質じゃ魔術は馴染まないと思ったのだけと思った
以上に馴染み始めてるわ」

風也は紅茶を飲み干し立ち上がった。

？

「さて、五行思想の陣は
粗方完成したし発動させてみるか」

風也が何かを唱え始めると陣が五色に輝き始めた。

「凄い輝き……五色の色も均等だわ……」

すると陣が巨大化し、風也を中心とするかの様に広がった。

その瞬間、陣の五角の個々から巨大な石が地面から突き出て風也の
周りを宙に浮きながら回っていた。

「嘘でしょ……成功したの？」

「これが賢者の石なのか？」

風也は自分の周りを浮く石を見てパチュリーに聞いた。

「そうよ。後は各属性の魔法に反応させたり、故意に割ってエネルギーでも攻撃出来るわ。」

「結構万能なんだな……賢者の石って」

「私がこれをスペルカードにするわ。これはスペルカードにするのも一苦労なのよ」

するとパチュリーが持っている本を開き何か呟き始めた……

「~~~~~」

すると風也の賢者の石が収束し始め一つのカードとなった。

「これで完璧よ。私でも賢者の石を作るのに何年もかかったのに数日で作るなんて流石ね」

「そっぴやさ、パチュリーは賢者の石をどうやって作ったんだ？」

「っ！?!?!???」

パチュリーは体をビクッと硬直させた。

「あ………すまん………聞いちゃ駄目だよな………」

「謝らなくて良いわ。教えておくべきね………私が賢者の石を作るのに払った代償は………肉親全員よ………」

「っ!?!?」

「私の母、父、祖母、祖父、兄をね……皆 強大な魔力を持った魔法使いで底無しのをだつたの……私は小さな頃から喘息で魔力も体力もおぼつなかない出来損ないだつた……一族の恥とも言われたわ……」

「……………」

「だから思つたの……何時か全員を見返してやるんだ！つてね……そしていろいろな文献を調べ見つけたの……賢者の石の理論を……そして長い間その文献にのめり込んだ……製造方法が『強力な魔力媒体』だつたの……」

「おい……まさか……」

「そう……私は肉親全員を製造陣に嵌めた……そして陣を発動させて私の賢者の石は完成したわ……だけどその夜に書置きがあつたのよ……私向けの……」

「パチユリー、この手紙をお前が読んでいるという事は私達はこの世に居ない頃だ。」

「まずお前に謝っておきたい。お前だけに苦行を与えてしまった……そこは後悔している。」

「だがその分お前の潜在魔力は増幅していった。何時しかは私達の魔力を超えた……」

「そしてお前が賢者の石を作ろうとしていたのは皆知っていた。」

「お前も調べた筈だ、賢者の石を作るのに必要な物は『強力な魔力媒体』という事しか判明されていない。」

「だから私達はお前の賢者の石の生贄になる事を決めた。」

「お前は私達をきつと恨んでいるだろう。この事に罪悪感を持っては」

いけない。ノーレッジ家の当主として生きなくて良い。お前の生き方で生きてくれ。

本当にすまなかった……………

親愛なるパチュリーへ……………父より……………

「私はあの時号泣したわ……………そして強い罪悪感を持った……………何故私より強い魔力を持った皆が陣に入ったのか。そして抵抗しなかったのはその為だったの……………」

パチュリーは目に涙を溜めていた。

「その分……………パチュリーは愛されてたんだな……………」

風也はパチュリーを抱きしめ慰めた。

「泣きたい時は泣けば良い……………なっ？」

「ぐすっ……………うううう……………」

そして図書館にはパチュリーの泣き声が響いた……………

「治まったか？」

「ええ、喋ったら少し気が楽になったわ……………」

パチュリーはハンカチで涙を拭いた。

「最後に聞いていいか？レミアアの過去って一体どんなだった？」

「レミアの過去……………喋るより行った方が早いわ……………行ってみる？
過去へ……………」

「過去へだと？……………上等だ……………」

すると風也はパチュリーの指示で広い場に立たされた。

「この陣に立つてて、そして注意する事は、過去を変えてはいけな
いわ、過去を変えると今が無くなる……………そして死んでも駄目よ……………
その2つに注意して……………いくわよ……………」

すると床にある陣が高速回転を始めた。閃光の様な輝きを放ち始め、その瞬間、何も見えない閃光が一瞬光った……………

その場から風也の姿は消えていた……………

27章 過去へ……（前書き）

前回のあらすじ

風也は紅魔館図書館でパチュリーの指導の元、自分専用の賢者の石の生成を完遂した。そしてパチュリーの辛い過去を聞き、レミリアの過去も聞いたが行った方が理解し易いという訳でパチュリーの魔法で過去へ飛んだ。

27章 過去へ……

……図書館……

「行ったわね……」

「おい、パチュリー！」

パチュリーは声がした方向を向くと魔理沙が居た。

「魔理沙じゃない、また本を盗みに来たのかしら？」

「盗むなんて人間が悪いぜ、借りるだけだよ。それにしてもパチュリー、何か隠し事とかしてないよな？」

「何でかしら？」

「いや、何時もと地味に感覚が違うからな。多分気のせいかな」

「気のせいよ」

「風也………無事に帰って来なさいよ………」

……過去の幻想郷……

森の広場の様な場所に魔方陣が浮かび出て一瞬光り風也の姿が現れた。

「おっと……………流石パチュリーだな……………着地もちゃんとしてあるな……………」

風也は周りを見渡した。今の幻想郷とは一味違う雰囲気、殺気が立ち込める空気……………異常な夜と直感で感じていた。

「さて、とりあえず紅魔館を目指すか」

紅魔館へと足を進め始めた。そして無音のまま風也の後ろを付けて来ている者が居るのに気づいていた。レミリアと似た殺気を持つ敵が……………」

「鬱陶しい！」

風也は刀を後ろに居る敵に目掛け横振りに斬りかかった。

その瞬間、その敵は人から多数のコウモリとなり刀は空を切った。

そう……………それはレミリアと同じ吸血鬼だ……………」

そしてその吸血鬼は瞬間的に人型に戻り風也の刀を粉々にへし折った。

「冗談キツイな……………だが此処で死ぬ訳にはいかねんだよ！金符『シルバーウエポン』！」

風也は折られた刀を捨てスペルを唱えた。金符……………パチュリーと同じ七曜の魔法の1つだ。だがパチュリー程の魔力は無い下級魔法だ。

そして手に金属の武器が生成された……………斧である。

「吸血鬼は再生能力が高いらしいが銀製の武器ならどうだっ！」

風也は吸血鬼を常人では見えぬ速さで振り落とし肩から一刀両断した。そして思惑通り吸血鬼の傷は再生せず出血していた。

「失せろ！」

そして体を回転させ遠心力の力を使い斧で首を跳ね飛ばした。首は宙に飛び地面に落ちた。

そして首と残された胴体が風化し始め、全てが塵と化した。吸血鬼が死んだ証拠だ。

「此处……………本当に幻想郷なのか……………空も紫色だ……………」

そう……………この時、巫女として霊夢も魔法使いとして魔理沙も居ない時間列なのだ……………

数十分後、紅魔館に到着したが見張りが嚴重で侵入する事が難しかった……………

「見張りが1……………2……………3……………6人か……………見つからない様にしないと……………」
『黒符 隠』

すると風也の気配が完全に消え門を飛び越え侵入する事が出来た。大広間でガヤガヤと騒がしい声が聞こえる……………何かのパーティーだろうか……………

『レミリア達は何処に居るんだ……』

風也は所在が分からないレミリア達を探す為に廊下を歩いていた。

すると2人の男女が牢屋のある部屋に向かっていた……

『レミリアに似た気配……まさか……』

風也はその2人に違和感を感じ無音で気づかれず尾行した。

そして見た光景は……

28章 姉妹の所在……襲撃（前書き）

前回のあらすじ

パチュリーの魔法によって難無く過去へ飛ぶ事が出来た。だが森を歩く内に吸血鬼と戦闘になり金符の斧だけで勝利を掴んだ。その後紅魔館に気づかれず侵入にレミア達の搜索をしていた。その後レミアの雰囲気似た者を尾行にその先には……

28章 姉妹の所在……襲撃

その2人の内の男が鉄の扉の鍵を開け怒鳴りだした。

「来いっ！フランドール！」

「ヤ……ヤダっ……！」

「や、やめて！フランには手を出さないで！」

フランの前にレミリアが立った、するとその男はレミリアを叩き倒した。

「邪魔をするな！レミリア！お前達に失望した………本当に出来損ないの吸血鬼だ、フランドールは何だ？羽根なしとも言われ哀れに思われてる……！」

すると男は怒り任せにレミリアを蹴り飛ばした。

「ぐっ………」

「お姉様……！」

「このっ………出来損ないがっ……！」

その後にはフランを蹴り飛ばした。

「い……痛いよお………」

姿を消している風也はその光景から目を逸らし音や声が聞こえない場所まで離れ座り込んでいた……………

風也は怒り始めていた……………だが怒りに任せあの男女を殺せば……………未来が変わる……………手を出したくても出せない……………

するとその2人が部屋から出て鍵を閉めた後、広間へと向かい歩いて行った。

風也は2人が広間へと入るのを確認すると共に監禁室へと向かった。

鍵がかかっている……………

「ぐすっ……………えぐっ……………」

「ね？フラン、泣かないで……………」

レミリアがフランをなぐさめる声が聞こえた……………

「だって……………絶対何時か私たち殺されちゃうよ……………お姉様なんて酷く蹴られたり……………ぐすっ……………」

「フラン、私は大丈夫だから、ねっ？」

2人の声は震えていた……………何時またあの男女がここに来るのかを恐れている様に……………

風也は自分の無力さに襲われた気がした……………止められる筈の事が止められない自分の無力さが……………

そして風也は金の魔法を使い鍵を複製し南京錠を開けた。

ガチャツ……ギイイイ……

ビクツ？

風也が扉を開けると……2人は……恐怖心で震え、目を瞑って涙を流していた……レミリアはフランを守ろうと抱きしめていた……

「目を開ける……俺は君達の味方だ……」

「……え？」

レミリアは目を開け唾然としていた……

「俺は吸血鬼じゃない、ただの人間だ……訳有りて潜入してるのさ」

「本当……なの？」

レミリアは風也の言う言葉に驚きを隠せなかった……

「そうだ。レミリア・スカーレットとフランドール・スカーレットだろ？」

「！？……何で私達の名前を？」

「それは言えない……だけど、君達は絶対助かる……これは保証出来る……だから時を待つんだ……」

そして風也の気配が姿と共に完全に消えた。

―希望を捨てるな……………」

レミリア達が最後に聞こえた言葉だ……………」

数分後、風也は紅魔館の近くの森に潜んでいた……………」

「そついや…………」パチュリーが言つてた紅魔館襲撃問題つてもう起くる筈じゃ……………」

その時、パチュリーの言葉が頭をよぎつた。

―全身「銀」の鎧に包まれた騎士の様な者が殴り込みに行つたらしいわ……………」

「銀…………」なるほどな…………」俺が紅魔館襲撃を起こさなきゃならないって訳か……………」

風也は木から飛び降りあるスペルを唱えた……………」

「金符『シルバーウエポン』」

すると銀の粒子が風也の全身を包み、鎧と化した。

「さて、殴り込みに行くとしますか……………」

風也は両刃剣を2本両手に持ち紅魔館の門へと向かつた……………」

「おい、その不審者、何用だ。」

門番らしき者が前を立ちはだかる。

「邪魔だ……………」

ドゴオオン！！！！

「が……………がはっ……………」

紅魔館の巨大な門に門番が強く叩きつけられ門が破壊された……………

「侵入者だ！殺しても構わん！」

「ハッ！ハッ！」

風也の前に数十人も部下らしき吸血鬼達が立ち塞がる。全員、剣や槍を持っていた。

「この人数相手……………懐かしいな……………遠慮無く通させてもらう……………」

「殺れ！！！」

紅魔館の広い庭で多数の武器を持った吸血鬼と鎧を纏った風也の戦闘が始まった……………

29章 赤い月……（前書き）

前回のあらすじ

遂にレミリアとフランの所在が分かった……だがそこで助けると未来を変えてしまう。助けたいのに助けられない重さに苦しんだ風也。レミリア達に会い「希望を捨てるな」と言い捨て風也がその後やっ
た行動は……紅魔館襲撃だった……

29章 赤い月……

「………周りからワラワラと出て来るもんだな………」

風也はかかって来る敵を斬り捨てながら進もうとしていたが庭で足止めを食らっていた。

自前の身体能力だけでは致命傷すら与える事が出来ないのだ。

「此処が紅魔館と知って居るのだろうかっ!!」

1人の吸血鬼が槍を突き刺して来た。

「知ってるから………やってんだろっが!!」

風也は槍を最小限の動きで避け、槍を腕で絡み抑え、もう片方の剣で槍の柄を切断し、身体を360°回転させ剣の柄で側頭部を殴り吹っ飛ばした。

「どうせこの程度なら致命傷でも無いだろ………起きろ………」

「ちっ、バレてたか」

吹っ飛ばされた吸血鬼はすぐに起きた。傷が徐々に回復し傷が消えた。

「はぁ………流石に肉体強化使わないと倒せそうにないな………」

その瞬間、高速で接近してくる敵が居た。今までの吸血鬼とは比にならない動きの早さだ。

「早いつ!」

風也は剣をそいつに振り下ろしたが避けられ剣を横から爪で削られ折られすぐに距離を取った。

「……………何回剣を折られるんだよ……………俺……………」

風也は折られた剣を眺めながら呟いた……………

「ふむ……………お前……………人間だな? 君達は下がってなさい。私が仕留める……………」

先ほどの高速攻撃をした者が姿を表した。そして部下達を下げさせた。今までの見張りは羽を仕舞っていた……………だがそいつは羽を出して居た……………階級が上の敵だ。

「ちっ……………司令官のお出ましくて訳か……………」

「人間のお前には……………私の動きは捉えられん!」

そしてその場から姿を消した。また高速攻撃を仕掛けるつもりだ……………

「何処から来る……………」

風也は周りの殺気を探ったがその時は遅かった……………

「遅い……………遅いねえ!」

風也の目の前に既にそいつは居た……気づいた時には風也の身体に十数発の攻撃が浴びせられ吹き飛ばされたのだ。

「なっ!？」

ドゴオオオン!!!ガラガラ……

「くっ………そがあ！」

ガッ、ゲキヤ!

ヘルメットが割れ風也の首の骨も折れていたが無理矢理首の骨を填めた。

「人間なら死んでる怪我なんだがなあ………」

その他にも風也の胴体には数個の穴が空いていた、普通なら死んでいる怪我だ。

「クソが………てめえらに力なんて使いたくなかったのによお………消え失せろ……『黒符』」

すると風也の体からドス黒いオーラが一気に吹き出した。庭にある芝生は枯れ、近くの花は腐り、木は生気を失った。

『力の1割も使っていない俺を痛ぶって喜んでる所悪いけど……此処からだ……』

「くっ………化物め………」

「化物？お互い様だろ……吸血鬼！」

………監禁室………

「ね……ねえ……お姉様……外で変な感じがするよ………」

フランは震えて居た。風也の殺気が此処まで感じられる強さなのだ。

「私も感じるよ………一体外で何が起こってるの………」

レミリアは窓から外を見た。すると空にある雲が晴れ………赤い月が現れた………

ドクンツ………

赤い月を見たレミリアの体に異変が起こり始めた………

その直後………レミリアが窓を破壊し外に出た………

「お姉様！？……っ！！」

レミリアが窓を破壊した事に驚きフランが窓だった所からレミリアを見ようとした時………フランも赤い月を見た………

.....紅魔館庭.....

『おい.....さっきの余裕は何処に行った？』

さっきまで優勢だった敵はボロボロまで風也に攻撃されていた.....
腕は肩から千切られ、脇腹は半分消し飛んでいた。

「何だ.....この力の差は.....」ほっ.....」

「うわああああ！.....」

別の場所から悲鳴が聞こえた.....

「しっ、司令！！」

1人の男の吸血鬼が必死に走って来ていた。

「がはっ.....何があつた.....」

「はっ、はい！裏口側の見張り全員が惨殺されて、私だけ生き残」

.....

何かを言いかけた瞬間首が飛び、血が吹き出した。

【余計な言葉は要らない.....そうでしょ？】

その瞬間、上空に多数の槍が浮いていた.....

『まて.....あの槍は.....』

風也が気づいた瞬間、全ての槍が庭に降り注いだ。

「「「ぎゃあああああああ！」「」」

それは正確無比に庭に居る全員を狙い落ちていた。次々と槍は逃げ惑う者に刺さり殺していった……風也にも1本飛んでき、咄嗟に手で巨大な槍を防いだ……

『こいつは……「グングニル」……』

【……………】

風也はグングニルを無効化し上空を見た……そこには返り血を大量に浴びたレミリアの姿があったのだ……

『レミリア……』

……パーティー会場……

【アハハハハハ！！皆壊れちゃえ！！】

1人の少女が大きな炎の剣を持ち次々とそこに居る者を殺していった……

紅魔館の広いロビーは血に染められていた。飛び散る肉片、血がそのロビーを染めていた。

そう……フランが殺して居るのだ……もはや壊す事が楽しい

子供の様に暴れていた。

「フランドール！！貴様何をやっているのか分かっているのか！！」
あの時の男女の片割れの男だ。怒鳴っていた。

【五月蠅い五月蠅い五月蠅い五月蠅い！！お前の声なんか聞きたくない！！】

その瞬間、フランはその男の頭を掴みレーヴァテインで首を切断した。首があつた場所からは血が噴水の様に吹き出した。

フランは大量に殺した……その時の返り血が大量に服に付いていた

……

【アハハハハハハハハハ！！もうこれでお姉様も私も助かるんだ！！！！】

フランは自分1人しか居なくなつた血だらけのロビーで笑っていた

……

もはや……今の幻想郷にはレミリアとフランを含めた数人の吸血鬼しか残って居ないのだ……

30章 過去の終戦……（前書き）

前回のあらすじ

紅魔館襲撃を起こした風也、黒符使い力尽くで戦闘を圧倒していた……だがその後大量のグングニルが降り注ぎ庭に居た大半は死んだ……上空にはレミアア……別の場所ではフランが暴れていたのだ。

30章 過去の終戦……

レミリアが上空からゆっくりと降下し着地した。

【貴方が言った通り……彼処から出れたわ……ありがとう……】

『礼は良い……まだ周りが騒がしくなる……』

風也は死体の山を睨んだ。すると……

「レミリア・スカーレット……貴様は重罪な事を犯した……
よって死んで貰う！」

死んだ筈の吸血鬼達が立ち上がり傷が瞬間的に塞がった。

『やっぱりか……っ！？レミリア……フランは館内か？』

【フランなら館内で暴れてるわ……】

『早くフランの元に行け！！取り返しのつかない事になる！！』

【！？】

『こいつら程じゃないが強い奴らがフランの元に向かっている筈だ！
助けてやってくれ！』

【……わかったわ】

するとレミリアはフランの居るロビーへと向かう為に館内へ飛んで

行った。

「逃がす訳ないだ」……………

レミリアを追いかけようとした1人の吸血鬼が一瞬で肉片と化した。

風也の黒符のオーラに触れ、バラバラに斬り刻まれたのだ。

『追いかけたければ俺を殺してからにしな……………』

風也の体からはオーラが無尽蔵に溢れ出していた。

「人間め……………邪魔をするなっ！」

総勢15人の吸血鬼が風也に一斉に飛び掛った……………

『あばよ……………水符「ウンディネスライザー」』

風也は両腕に水を纏い高速回転をし始めた。

吸血鬼達は構わず風也に噛み付いた。腕、肩、足、手、脇腹……………様々な場所を噛み風也の動きを止めた……………だがもう既に遅かった……………

……………
周りの木が輪切りに斬れ、門壁は斬り落とされ、建物には横斬りの傷が多数出来た……………

その後、風也に噛み付いていた吸血鬼全員の体から血が吹き出した。そして体が輪切りの様にバラバラになっていく……………

さっきの高速回転は腕に纏った水を過度の遠心力で刃と化したのだ。そして門壁、木、建物、吸血鬼達を斬り刻んだ。

『さて、レミリア達は大丈夫だろうかね……………』

風也は庭が全滅した事を確認し紅魔館へ入った。

……………ロビー……………

【邪魔するなあああー！】

フランは5人の吸血鬼と戦っていた。だがフランにとって分が悪い敵なのだ。再生能力が異常に発達した吸血鬼だ。

フランが肩を斬り落としても、すぐに再生する。そのループなのだ。フランの体力は減っていくばかりだ……………

「諦める……………私達はお前とは身体の作りが違う……………」

吸血鬼達はフランに一斉に剣を突きたて様とした瞬間……………ある声が聞こえた……………

【グングニル……………】

巨大な槍は壁を突き破り2人の吸血鬼に突き刺さった。

「なっ！？レミリアだと！？奴は表に居る筈ではっ！？」

グングニルが刺さった吸血鬼は絶命していた……その光景をみた3人は驚いていた……

【今度こそ……死んじゃえ!!】

フランが片手を握り始め、強く握った瞬間1人の吸血鬼の体が爆発し砕けた。

「貴様らああああ!!」

『余所見は禁物だぜ?』

吸血鬼2人が同時に振り返ると二人の肩に手を置いている風也の姿があった。

「貴様っ!!」

二人はすぐに手を払い剣で刺そうとしたがその時にはレミリアとフランの後ろに移動していた。

『捕獲用の技を編み出してみたんでね……「黒符 牢」』

すると2人の吸血鬼を風也の黒いオーラが丸い球体に形を作り閉じ込めた……

「何だこれは!？」

「っ、壊せんっ!!」

『本来生け捕りに使えそうだが……お前達は生かしておく価値は

無い……死ね』

風也が指をパチンと鳴らすと何かが何かに刺さる音と黒い球体の内部から大きい円錐状の棘が多数突き出た。

『これで全滅だな………』

もうこの紅魔館にはレミリア、フラン、風也の3人しか残らなくなった。3人以外の生きる気配が紅魔館から消えたのだ。

【私達は………やってはならない事をしたのかもしいわね………】

【お姉様………】

『いや………この事はやるべきだった………お前達が生き残る為にな………』

「これが………俺が過去でやるべき事だったんだな………後………やる事は1つ………」

『レミリア、フラン、2人には幾度も苦難が待ち受けている筈だ………それを乗り越えていけ』

【貴方は残らないの？私達は貴方に残っていて欲しいわ】

『それは無理だな………俺は此処には居れないんだ………2人とも………すまん………』

すると風也は瞬間的にレミリアとフランの額に手を合わせ電流を流

した。

バチバチッ！

【なっ！？……………なにを？】

『安心しろ……………危害は無い……………俺に関しての記憶を丸々消すだけだ……………』

【記憶……………を？】

レミリアとフランの意識はどんどん薄くなっていく……………

『俺の事は忘れるべきだからな……………もう眠れ……………』

そして2人の意識はそこで途絶えた……………

風也は2人の意識が飛んだ事を確認すると2人を壁に寄りかからせた。

「これで此処でやるべき事は終わりの筈だ……………」

すると風也の体が徐々に光と化していた。

「レミリアとフランの記憶を捏造したのが俺だったなんて……………意外だな……………」

そして風也の姿は紅魔館から消えた……………

..... 現時間 紅魔館図書館

「風也が過去へ飛んで1日が経つわね.....死んでないと良いのだけど.....」

キュイイイイン.....

ガンツ！ガタンツ！バサバサバサツ！

「え？」

図書館の何処かで何かがぶつかる音、本棚が倒れる音、本が落ちる音が聞こえた。

パチュリーがそこへ駆けつけると.....

本棚と本に潰された風也の姿があった.....

「何とか無事に帰って来た.....」こぶっ

パタッ.....

戻った時の本棚が効いた様だ。

―数時間後―

風也は気絶から意識が戻り、起こった事を全てパチュリーに話した。

「やはり貴方が過去に関わりがあったのね……………そしてレミィヤフ
ランの記憶も貴方が握ってるというのね」

「ああ……………レミリアの過去は酷い物だった……………あいつも……………
血塗られた運命には逆らえなかつたんだな……………」

風也は頭を抱えていた。2人の過去が酷い光景だった事になやんで
いた。

「でも、いずれその記憶は2人に返すべきよ。今の貴方は此処に居
る、いずれ知られてしまうのだから……………」

「ああ……………そうするよ……………時が来たらな……………」

「とりあえず休みなさい……………過去で連戦続きだったんじゃないかし
らっ…」

「ああ……………部屋でゆっくり寝かせて貰うわ……………ふあああ……………ね
む……………」

そして風也は図書館から離れ自室に向かった……………

「記憶……………か……………」

そして風也は目を閉じ眠った……………

31章 ヤケ酒美味しいね（前書き）

前回のあらすじ

遂に過去でレミリア、フラン以外の吸血鬼を惨殺した3人。その後風也は2人の記憶を奪い意識を失わせた。そしてやる事を全て終え、現時間に戻った。そして戻ってから数日が経っていた。

31章 ヤケ酒美味しいね

「おい、咲夜さん！」

風也は咲夜を探して廊下をあるいていた。

「あつれー？居ると思うんだけどな……………レミリアに聞いてみるか……………」

そしてレミリアの部屋に向かって行った……………

コンコン……………ガチャ……………

「なー、レミリアー、咲夜さんみなk……………っ！？失礼しましたッ……………」

風也は部屋を開け覗いたのだが見た光景に驚き速攻で閉めた。
何故なら見てはいけない物を見た気がしたのだ。

風也が見た光景は皆さんのご想像にお任せします。

「……………タイミング悪いつてこついう事だな……………お二人さん気づいて無かったようだけど……………」

見てしまった光景を思い出し落ち込んでいた。

「だが……………あれが百合かつ！」（キュピーン

何故か無駄な確信と悟りを開いた風也であった……

「咲夜さんはレミリアとご用事の様だし……パチュリーの所でも行きますか……」

そしてちよつと落ち込み気味に図書館へと向かった……

そして図書館へ着くとパチュリーを呼んだ。

「おーい、パチュリー……って居ないな……小悪魔も居ないし……自室か？」

すると直感的にヤバイ感じがしていた……

「なーんか嫌な予感がするんだよなあ……」

そして前に咲夜に教えられた個々の自室のパチュリーの部屋へ向かった……

「確かパチュリーの部屋って此処だっけかな？」

目の前に扉がある……

キィィィ……

「おーい……パチュ……!？」

パタン……

「ちょ……………まっ……………」(ポタポタポタポタ……………)

2回連続で見えてはいけない物を見てしまった風也だった。

風也が見た光景は皆さんのご想像にお任せします。(2回目)

「流石に……………2回はっ……………」(ポタポタポタポタ)

風也は鼻血が止まりませんでした。大量に出て其処には赤い血溜まりが綺麗に出来ていた……………

「くっ……………流石紅魔館……………建物が赤いだけあるっ!」

作者【違うだろ】

何処となく作者登場。何処から湧き出るんでしょうねえ。

「うっ、うるさい作者!どんだけ紅魔館は百合カップリング多いんだよ!」

作者【多分3組だな……………】

「は?という事は美鈴×フランもあるって事?」

作者【まあ書くつもりは無いがなっ!】

「じゃあ何故出てきた!?!」

風也は作者の言葉に驚いた。

作者【うるせー！俺にも出番よこせよ！まだこれで2回しか出てねえだろ！ってモザイクかけるなー！】

作者全体にモザイクが掛った。

「五月蠅いから帰れ！」

ゴンツ！

作者【ごふう……】

作者消滅

「ふう……馬鹿は黙らせたし……ちょっと外に出るか……」

そして風也は紅魔館を出た……もう夕方の時間であったが外に出たい気分だったのだ。

そうして森歩いていた時……何か食べ物匂いが漂っていた。

「ん？食べ物の匂いだな……寄ってみるか……」

匂いを辿ると、そこには屋台があった。まあ見てはいけない物見ちやった訳だ帰る気持ちにはなれなかった。

「あ、いらっしやいませー！八目鰻は如何ですかー？」

屋台の椅子に座ると羽根が生えている女性が着物で作業をしていた。

「じゃあその鰻と酒をお願いします」

「かしこまりましたー！」

風也は注文をした後溜息をついた……

「はあ……………」

「貴方も悩み事あるようですね。」

隣から声を掛けられた。銀髪だろうか……長髪の女性が酒を飲んでいた……

「ああ…………まあそんなもんです……………そういえば貴女は？」

「私は竹林にある永遠亭という所で医者をやっている八意永琳と言います……………」

「俺は紅魔館に居候している翔木風也と申します」

風也と永琳は握手をした。

「ウチの姫が本当に苦労するんですよ……………他の兎に任せると逃げるし引き籠もるし……………休みがほぼ無くて……………」

「あ……………た、大変なんですネ……………」

風也と永琳は愚痴合いを続けて居ると……

「八目鰻とお酒です！」

屋台の主が鰻と酒を前に置いてくれた。

「むぐむぐ……これ美味しいな……」

風也は八目鰻の蒲焼を食べた。濃厚な味と絶妙な焼き加減がこれを可としていると思った。

「あ、ありがとうございます。そういえば貴方のお名前は風也さんで良いんですね？」

「ああ、そうだけど。」

「私もそう呼んで良いですか？」

ちよつと赤面しながら聞いてきた。

「ああ、大丈夫だよ。」

「ありがとうございます。私はミステリア・ローレライと言います。こうやって鰻屋を経営してるんですよ」

そして話が長く続き、もう真つ暗な時間になっていた。

「そろそろ私は帰るわね。薬なら私の所に寄って頂戴ね。はい、お酒代ね。」

「ありがとございましたー！またご来店下さいー！」

そして永琳はお金を払い帰って行った。

風也は酒を飲みながらミスティアに何かを聞き出した。

「ミスティアって1人で大変じゃないのか？鰻屋を経営しててさ」

「大変ですけどやり甲斐がある楽しい仕事だと思ってますよ」

ミスティアは笑顔満点で答えた。本当に楽しそうだ。

「まあ楽しそうだな……ふあああ……そろそろ俺も行くよ……」

風也は酒と鰻の代金を出した。

「大丈夫ですか？結構飲んでましたけど……」

風也の顔は少し酒で赤みがあった……しかも少しフラフラと歩いていた。

「良ければ私の家が近くにあるのでお泊まりになって下さい。」

「ほえ？でもミスティアに迷惑かからないか？」

「風也さんなら良いですよ」

そして風也はミスティアのお言葉に甘え家について行った……

「ありがとくな…………泊めて貰って…………」

「ゆっくりお休みになって下さい。お布団も用意してありますので。」

「先に寝かせて貰うよ…………おやすみ…………」

「はい、おやすみなさい。」

そして風也は酒が回っていたせいかすぐに寝てしまった…………

…………深夜…………

「ふうっ、お風呂もスッキリしたー あ、風也さんも入れれば良かったのになー なんちゃってw」

ミステリアは自分で言った事に顔を真っ赤にしていた。ミステリアは所謂風也に一目惚れしていた。

寝間着を着ていたミステリアはこっそり風也の布団に潜り込み幸せそうに眠った…………

32章 夜雀の暴走（前書き）

前回のあらすじ

風也は見ではいけない物を……というか百合場面を2回連続で見
しまい。結構な出血をした。その後、森の中にあるミステリアの鰻
屋を見つけミステリアと永琳と親しんだ。飲みすぎた為、ミステ
リアの家に泊めて貰ったのだ……

32章 夜雀の暴走

清々しい朝である……………朝日が差し……………気持ちいい朝なのだが
……………うん……………

「ん……………頭いてえ……………昨日飲み過ぎたな……………えーっと、ミス
ティアに泊めて貰ってすぐ寝たんだっけ？」

そして横を見るとミスティアが布団に入っていた。風也は数秒間考
えた……………

「……………同じ布団で寝てたのか……………？って……………上着どこ？」

よく見ると風也は何故か上半身裸なのである……………

「ミスティアー、俺の上着は……………っ!？」（ポタポタポタポタ……………

風也は布団を少し捲るとミスティアの寝間着が結構はだけていて肌
が露出していた。そして案の定鼻血の大放出だ……………

風也はめっぽうに女性の肌に弱いのだ。考えてみてくれ、白玉楼の
頃のあの悲劇を……………

「とりあえず上着はっ……………あつたあつた……………」

風也は速攻で鼻血を止め上着を着た。

「んっ……………あ、おはようございますっ……………」

風也が騒いでたからかミスティアが起きた。

「あ……ああ、おはよう」

「あ、朝ご飯作りますね。」

「あ、俺少し外に出るよ、着替えるだろ？」

「あ、はい。ごめんなさい」

風也は家の外に出て扉を閉め壁に寄りかかっていた。

「風也さーん、着替えましたよー！」

「ああ、分かった」

そしてその後は朝ご飯を食べ話をしたりして時間は過ぎていった。

「あ、風也さん、私少し出掛けて来ますね。ちよつと永遠亭に用があるの」

「分かった。俺も一回紅魔館に帰って見るよ。じゃ」
?

ミスティアは飛んで永遠亭へ、風也は歩いて紅魔館へと向かった。

-----紅魔館-----

「あ、風也さんおかえりなさい。」

風也が紅魔館にもどると美鈴が門前でたっていた。

「美鈴も何時も門番で大変じゃないか？」

「大丈夫ですよ。何時も寝てますしっ！（キリッ）」

「そこは誇れる所じゃないよな……ちょっと咲夜さんに渡したい物があるんでね。」

普通に門を開け紅魔館に歩いて行った。そして廊下で咲夜とばったり会った。

「居た居た。咲夜さん、これお土産です。」

「これは……鰻？」

「昨日の夜に鰻屋を見つけたのでお土産に買ったんですよ。美味しいので食べてみると良いよ。」

「ありがとう、有難く食べさせて頂くわ。」

「じゃあ俺は仕事行って来るよ。泊まり込みだしな。」

「いつてらっしやい。」

風也は咲夜に鰻を渡し紅魔館を後にした……

……永遠亭……

ミステリアは永遠亭に着き扉を開けた。

ガラガラッ

「あら、いらっしやい。昨日の鰻屋さんじゃない。何か用かしら？」

「ちょっと欲しい薬があつて……………媚薬置いてますか？」

「媚薬ねえ……………確か前に優曇華に投薬した媚薬があつたわね……………
優曇華ー！ちよつと来なさいー！」

永琳は少し考えた後、優曇華と呼び始めた。そして数秒後うさ耳の女性が奥の扉を開けて出て来た。

「はい、師匠なんですか？」

「前に貴女に投薬した媚薬の
効果聞いて無かつたわね。どうだつたかしら？」

「え”っ……………あの薬ですか？あの時は酷かつたですよ……………飲まされた後身体が疼いて仕方なかつたんですから……………てみると何回かして収まりましたけど……………」

優曇華はグチグチと言ひ始めたのを永琳はスルーしミステリアに聞いた。

「だそうよ。この媚薬でも良いかしら？」

「うーん……………それでお願いします」

ミスティアは少し考えた後、薬を購入した。

「そういえば、夜雀の発情期ってこの時期じゃないかしら？」

「一応そうですよ。まあ人は無闇に襲いませんから では」

そしてミスティアは永遠亭を後にし家に向かい飛び始めた。

そして夜……

風也とミスティアで鰻屋をやっていた。風也は手伝いとして働いていた。

「本当にありがとうございます。人手が少し欲しかったので^^」

「まあこつこつ事にも慣れておくべきだと思ってね。って客が来たな」

「慧音ー！店を見つけたぞー！」

「おお、妹紅は店を見つけたのが早いな……」

すると椅子に座ったのは白髪の女性と青髪の女性だ。

「あつ、慧音さんと妹紅さんいらっしやい。いつものメニューですか？」

「ああ、いつもので頼むよ……おや？新人さんかい？」

慧音という人が風也に気づいた。

「はい、まあ新人です。名前は風也と言います。」

「ミステリアが他の人を雇うなんて珍しいからな……」

もう1人の妹紅という人は煙草を吸っていた。

「なるほど風也君か、私は慧音という。人里で寺子屋を開いているんだ。妹紅は私の知人で竹林で良く案内人をしている。」

「人里………そういや行つた事ないな………」

「なら今度来てみると良い。人と触れ合うのは大切な事だから」
酒の用意などをしながら慧音や妹紅と話を続けていた。

「あ、妹紅さん、もう少しで炭が切れそうなのでまたお願いできますか？」

「分かった。明日取りに来てくれるか？作っておくから」

「分かりました。その時に炭代出しますね。」

風也はこの時思った………

「炭を作る？え？どゆこと？」

まあ顔にも口にも出さなかったので3人に悟られる事はなかった。

「さて、飲み過ぎない程度に辞めておくか。これ御代だ。」

「そうだな……………ミステリア、じ明日取りこいよ」

慧音は代金を置き2人並んで帰って行った。

「そろそろ店閉めかな……………片付けようか」

「よし、さつさと終わして帰るか」

そして2人で店閉めの作業を開始し、2人でやった為作業効率が良い
くすぐ終わった……………

「ふーっ、疲れたな……………毎日これをやってるなんてミステリア
も凄いわ……………」

「今お茶出しますね。」

そして台所でミステリアがお茶の準備をしていた……………そして昼に
買った小瓶を取り出した……………

「これ……………効くかな……………やっぱりチャレンジだよね……………」

そう思った矢先、ミステリアは2つのお茶に薬を投入した。そして
バレない様にご丁寧にかき混ぜた。

「風也さん、お茶です」

ミスティアは2つのお茶をゆっくりと持ってきた。

「ああ、ありがとう」

そして風也は何も知らずお茶を口にした。そしてそれに続くかの様にミスティアもお茶を飲んだ。

すると風也の体に異変が……

「ん……なんだこりゃ……体が……熱……」

湯のみを置き……何か息苦しそうなかんじであった……

ミスティアも飲んだからか顔に少し赤みがでていた。

「ミスティア……お茶……に……何か入れたか？」

「えーっと……媚薬をちょっとね……」

「び……媚薬……だと？」

「あーもう我慢出来ないっ！／＼／＼／＼」

そしてミスティアは媚薬で力が出ない風也を押し倒した。

「ちよっ……マジ？」

「本気です（ニコッ）」

この光景はお見せする事が出来ません。

.....

作者【生きるよ.....） ^ （【ゞ

33章 異次元の来襲（前書き）

前回のあらすじ

風也はミスティアの店の手伝いをして妹紅や慧音と知り合った。店
閉め後、発情期のミスティアに媚薬を飲まされ結局襲われた。そし
て事後の朝……

作者からの一言：昨夜はお楽しみでしたね。

33章 異次元の来襲

「ハッ!！」

風也はミスティアより早く目が覚めた。昨夜はミスティアに襲われたが一方的では癪だと思い逆襲しミスティアが先に疲れ眠った。

「夢じゃなかったな……責任撮る時は取らなきゃな……」

風也は服を着て外に出て伸び伸びとした。

「はーっ、良い天気だなー……飯でも作るか……」

そして家の中に入り台所に向かった……

「ふむ……魚に米に茸か……まともなのは作れるな……」

そして朝ご飯作りを開始した。

「……………zzzzzzzz ハッ!?あれ?もう朝……あつ?私ったら
発情期だから周りが見えなくなっちゃってあんなコトを…………… / /
/ /」

ミスティアはすぐに着物を着始めた。

トントントン……………

台所から音が聞こえるのをミスティアは聞いた……………そして台所を覗いてみると風也の姿があった。

すると風也がミスティアの気配を感じたのかミスティアの方を向いた。

「おはようミスティア、よく眠れたか？」

「おはようございます……風也さん本当にすみませんでしたっ／＼／＼」

ミスティアは赤面しながら頭を下げた。

「少し精神的に来たけど大丈夫だよ……ミスティアも初めてだったんだろ……無理すんな。朝ご飯は俺が作るし」

「はい、分かりました。」

そして十数分が経ち風也が朝ご飯を完成させた。

「ほい。元気付けないとな。」

卓に出たのは白米、焼き魚、茸の味噌汁、漬物だった。

「いただきます」

2人は手を合わせ朝ご飯を食べ始めた。

「あ、美味しい……」

「この位しかまだ作れないけどな、味は保証出来る。」

そしてご飯を食べ終わり食器を片付けていた時……風也は並みならぬ殺気を感じた……

「……何だ今の殺気………ミステリア！食器の片付けは頼む！」

「え？はい！」

風也は食器洗いをミステリアに任せ外に出た………すると幻想郷上空に巨大な黒い次元穴が出現していた………

「おいおい………何だありゃあ………多分霊夢達も気づいてる………だが………」

「あれは幻想郷のモノじゃない！」

風也の直感がそう感じていた………幾度の死戦を幻想郷で戦って来た風也でもそれだけは分かる………

その瞬間、黒い次元穴から黒い物体が数個射出された………幻想郷の各部に分けられる様に………

その1個が風也の目の前に落ち砂煙を起こした………着弾地点には小さいクレーターが出来ていた。

そこから人間ではない化物が出て来た………

外見で言うと………黒い鱗を纏い、黒い鎧を付け、長い尾を持ち、剣と盾を持つ蜥蜴風の化物だ………リザードとでも言うか………

【ギャアアアアアアア！！】

そのリザードは威嚇の叫びをし始めた。その殺気の圧力で目を瞑ってしまった風也……

その瞬間リザードはその場から移動していて風也の真後ろに居た。

「チツ……うるさい……なっ！？居ない！？」

ザクッ！

リザードは風也の背中に剣を突き刺し剣を抜いた瞬間尾で吹き飛ばした。

「じはっ……この強さは……ぐっ……体が燃える様に熱い……」

吐血し立ち上がるうとした瞬間体の神経が鈍り始めた。

「あの剣には……まさか猛毒が……黒符が……使えん……」

【ギャアアアアアア！！】

その時、騒ぎでミスティアが家から出てきた。

「風也さん？何の騒ぎですか？つて……え！？」

「ミスティアアアアアアア！！！出るなあああああ！！！」

風也がミスティアを見て叫んだ。その時リザードが風也からミスティアに標的を変え剣を振り下ろす……

「保てよ……俺の体……」

風也は毒が回り動けない筈だがミスティアの前に瞬間移動しミスティアの盾になった……

「がっ……」

風也の背中には大きな切り傷が出来、大量の血が流れていた……

「怪我は無いようだな……良かった……」

風也は力尽き、地面に倒れた……

【……………】

リザードは風也にトドメを刺さず亜空間を開き中に潜りその場から消えた……

「風也さん！大丈夫ですか！？血が……血が止まらない……」

ミスティアは風也に触れたときに手に付いた血を見た。

「永琳さんの所に行かないと……風也さんしっかり捕まって下さい！」

ミスティアは今まで異常の速さで飛び永琳の元へ急いだ……

「永琳さんっ!!」

ミスティアは決死の表情で永遠亭に辿り着いた……

「どうしたの？ミスティア、そんなに急い……で……何この怪我……」

永琳はミスティアが連れて来ていた風也の重傷を見て驚いた……

「優曇華！てゐ！急いで来なさい！！緊急よ！」

「はいっ！」

「ガッテン師匠！」

2人の兔が速攻で駆けつけて来た。

「とりあえず止血をするわよ！てゐ！止血剤と止血帯を！」

「ガッテン！これとこれの筈っ！」

てゐは戸棚から大瓶と包帯を取り出した。

「これは毒………私も見た事のない猛毒だわ………」

すると永琳は風也の毒が回ってると思われる場所に注射を刺し毒を摂取した。

「優曇華！この毒の成分を調べなさい！」

「はいっ！分かりました！」

そして3人の決死の治療が始まった………ミスティアは永遠亭の
前で血の付いた手を見て震えていた……

34章 次の刺客（前書き）

前回のあらすじ

朝は良い天気であった……そしてその後その平和は壊され幻想郷上空に巨大な次元穴が出現した。そこから出てきたリザードに風也は一方的に殺されかけた……そしてミステリアに永遠亭に連れてかれた……

34章 次の刺客

数時間後……………

永琳が血だらけのエプロンと手袋を外しながら奥の部屋から出てきた……………

「永琳さん、風也さんは……………」

永琳は気まずい顔をしていた……………そして口を開いた……………

「何とか出血は止めたわ……………だけど失血量が多過ぎて生命力が落ちてる……………しかも毒は知らない猛毒でね……………2割程しか解毒出来なかつたわ……………」

「た……………助かる保証は……………」

ミスティアの声は震えていた……………

「……………ほぼ無いわ……………無理に動けば傷がすぐ開く、毒も全身に回れば……………死ぬわ……………」

「そんな……………私を庇ったばかりに……………」

「今は安静にして毒を判明させなきゃ……………あの人は生きてはいけない……………動かなくても毒は回る……………時間は限られてるわ……………」

「毒に詳しい方は居ないんですか？」

すると永琳は考え始めた……………

「居るわ…………一人だけ幻想郷に毒を知り尽くしている人が…………ただ
どその人が居る所は毒霧が濃過ぎて近づけないわ…………」

ミスティアは永琳と一緒に風也の寝ている奥の部屋へと入った…………

風也の腕の一部や首辺りは紫色に変色していた。

「そういえば…………風也さんは複数敵が落ちたとか言っていました…………」

「ヤバイわね…………いつ誰が運ばれても良いように準備するわ、ミ
スティアも手伝って。」

「はい…………」

そして永遠亭では決死の準備が始まった……………

……………博麗神社……………

「くそつ…………異変解決に行こうと思えば敵さんからお出迎えなん
てね…………」

霊夢の前には黒い鎧を着た人が居た……………外見から言えば…………ソル
ジャーとでも言うつか……………霊夢は苦戦を強いられ…………ポロポロに押し
れていた。

ソルジャーは両手に持つ異形の剣を回転させ始めた。

キイイイン……………

すると回転する剣から高速回転する音が聞こえ始めた。音速を超え始めた音だ。

「軌道が読めない攻撃ばかりでイライラするわね……………」

ソルジャーは正面から真つ向で霊夢に突っ込んだ……………

「力勝負って訳ね……………なら力技で行かせて貰うわ！宝具『陰陽鬼神玉』！！！」

霊夢は巨大な陰陽玉をソルジャーに向けて放った……………

ガキキキキキッ！！！！

陰陽鬼神玉はソルジャーに直撃した……………だが連続で当たる音に霊夢は違和感を持ち始めた……………

ガキキキキキ……………ピシピシッ……………

陰陽鬼神玉に亀裂が入り始めた。ソルジャーは高速回転させた剣で陰陽鬼神玉を削り砕こうとしていた……………

「くっ！」「嘘でしょ……………」

陰陽鬼神玉が完全に砕かれソルジャーは霊夢に斬りかかるうとした瞬間……………

ブンツ！ガキイン………

何処からか巨大な岩が投げられソルジャーに直撃し一瞬怯んだ所を
霊夢は弾幕を集中し胴に撃ち放ち数メートル飛ばした……

「れいむー！大丈夫？」

そこには岩を投げた張本人、小柄な瓢箪を持つ少女が立っていた……

………

35章 破滅の力（前書き）

前回のあらすじ

風也は永遠亭で何とか出血を止めて貰ったが体には毒が残っていて意識が戻らないままだ……そして博麗神社では他の刺客が霊夢を襲い、トドメを刺そうとした時、小柄な少女が霊夢を援護した……

35章 破滅の力

「霊夢の所でお酒飲もうと思ったんだけど、霊夢危なかったねー」

小柄な少女は瓢箪にある酒を飲みだした。

「萃香、助かったわ……後でお酒飲ましてあげるから手伝って頂戴。」

「

萃香と呼ばれる少女は酒という単語に反応しやる気を出した。

「えっ？ホント？じゃあー……さっさと終そうかー」

萃香は腕をグルグルと回してソルジャーに向けて歩き始めた。

ソルジャーは萃香に剣を2本同時に斬ろうとした瞬間……

萃香の瓢箪で剣は脆く砕かれた……

「始めから飛ばすよー」

萃香は酒を大量に飲み始めた……すると萃香の体は巨大化し人の6倍近くの高さになった。

そして萃香はソルジャーを蹴り上げ、洒落にならない踏み込みの仕方でするでソルジャーに巨大な拳を叩きつけた……

ドゴンッ！……

踏み込みで地面に亀裂が入り、ソルジャーごと拳を叩き込んだ時に地面の陥没が起きた……

「ふう……………終わりかな」

萃香は元の大きさに戻りまた酒を飲み始めた。

「萃香も容赦無いわね……………力技で一方的に倒すなんて……………」

「れいむー？お酒ちよーだいー！」

「分かったわよ……………神社に入りなさい……………」

そして萃香に連れられ霊夢は酒を出す羽目になった……………

ムクッ……………

ボロボロになったソルジャーは2人が神社に入った後、起きだした……………そして次元穴を開きその中に消えた……………

……………永遠亭……………

風也はまだ奥の部屋で意識を失っていた……………

傍には優曇華が看病をしていた。

「全然意識が戻らないな……………この人……………」

《優曇華——！ちよつと来て頂戴——！》

「あつ！はいつ！」

永琳に呼ばれ優曇華は表の部屋へ向かつて行った……

すると風也は目を開けた……

「医者場所に運ばれたっばいな……ぐっ……」

風也は医療用ベッドから起き上がり傷口を抑えた……

「これ以上迷惑はかけれん……表から出ればバレル……どうするか

……」

風也は部屋内を見渡し、1つある窓を見つけた……

表では数人の怪我人が永遠亭に来ていて、永琳も治療で忙しかった

……その時……

ガシャーン！！

「「！？」」

ガラスが割れる音が奥からしたのだ……確認するために優曇華は奥の部屋に入った……そこには誰も居ない窓が割れた部屋だった……

「師匠！風也さんが居ないです！」

優曇華は永琳の所へ向かい現状を報告した。

「優曇華、貴女は風也さんを追いなさい……私達はてると治療を続けるわ」

「分かりました。すぐに追います！」

そして優曇華は波長をレーダーの様に使い始め走り出した。

その頃、永遠亭から離れた場所では……

「ぐっ……傷が開いたか……」

風也は痛みで木に寄りかかった……巻かれた包帯には血が滲んでいた……動いた為に傷が開いたからだ。

「はあはあ……毒がキツいな……上手く手足が動かん……」

そして殺気を感じた……

「くそ……俺を殺しに来たって訳か……」

風也の目の前に次元穴が開き別のソルジャーが穴から出て来た……武器は柄の長い斧だ……

「ただで殺される気は毛頭無い……抗つてやるぞ……」

風也の両手から微弱な光が出始めた……

そしてソルジャーは斧を構え風也の首を斬り落とす為に斬りかかった。

「月符『サイレントセレナ』……………」

風也を囲む様に魔方陣が足元に出て周りから光の柱が多数回り始めた。

光の柱の回転によって斧の攻撃を遮っていた……………だが微々と斧は風也に向けて進み始めていた……………

「くそっ……………これまでか……………」

そして光の柱を突き破り斧が風也の首に当たる瞬間……………

ボンッ！ゴオオオオオ……………

巨大な火球が2人の間に降り注ぎ広範囲を燃やし始めた……………その火を回避する為にソルジャーは斧を引き間を取った……………

「火……………なのか……………」

風也の周りには竹林を燃やす火が取り囲んでいた……………

「ふう……………間に合っ たな……………」

「あんたは……………」

風也は声のする方向を見ると……………そこには火の翼を持つ妹紅の姿が

あつたのだ……

「言つたる？私は竹林に良く居るつてさ……此処は任しておきな。」

「すまん……だが俺に休む暇なんて無いらしい……」

風也が進もうとした方向に次元穴が出現し黒い半魚獣が現れた……形は人の様で人でない魚の化物……フィッシャービーストでも呼ぶべきか……

風也は手から電弾をフィッシャービーストに撃つたが、効果が無くすぐに距離を詰められ頭から突っ込まれ角が風也の腹を貫通した……

「うっ………がはっ………此処で死ぬのか………」

風也は穴が空いた箇所を抑え大量の血を吐いた……そして倒れた……

「力だ………力が欲しい………戻るべき場所を守る為………大切な人を守る為………俺の体はぶっ壊れても良い………それ相応以上の力が………欲しいんだ！………」

倒れこんでいる風也の体に異常な気配がした………花びらの気………西行妖の力が風也に集結していた………

その頃、冥界にある西行妖が異常な輝きを放っていた………風也の

意思に繋がっているかのように……

風也の体に外見的異変が出始めた……もはや……人間では無い外見に……

？風也の全身にはこの世の物と思えない外見の黒鋼の鎧が装着され、紫色の妖力とは思えない禍々しいオーラが出ていた……

そして手にしている大剣にも赤い目が存在しギョロギョロと目が動いていた……

妹紅が戦いながら風也の禍々しい殺気に寒気がしていた……

「あんなの……人が発する殺気じゃねえな……」

ソルジャーと同等に戦いながら妹紅はそう呟いた……

36章 各地の逆襲

【・・・・・・・・・・】

異形の鎧を纏った風也は大剣を地面から抜きその場から姿を消した。フィッシャービーストは周りを見回し姿を探したにも関わらず発見が出来ない。

その直後、フィッシャービーストの首は胴から斬り落ちた。

【その生命力・・・・・・・・貫い受ける・・・・・・・・】

ザクツ・・・・・・・・

そして風也は首を失ったフィッシャービーストの胴体到大剣を刺し、生命力を奪い始めた・・・・・・・・

生命力を完全に奪い、大剣を抜くと干からびた死体しか残っていなかった・・・・・・・・

【次だ・・・・・・・・『賢者の石』】

そして風也の周りには5色の賢者の石が出現し、一斉に割れた・・・・・・・・その破片がエネルギー弾となり妹紅と戦っているソルジャーに全弾直撃した。

「なっ！？弾幕なのか?!？」

するとソルジャーの体には複数の穴が空き動きが鈍っていた……

賢者の石は通常、エネルギー弾として使うと殺傷力の無い攻撃だが火力が桁違いだった……

「助かるよ……蓬萊『凱風快晴 フジヤマヴォルケイノ』！」

妹紅は巨大な火球を作り出しソルジャーに直撃させた……

「爆ぜろ……」

するとソルジャーに直撃した火球が収縮し大爆発を起こした。その爆発でソルジャーは消し炭も残さず燃え尽きた……

「これで此処らは落ち着いたな」

【ああ……俺は別の場所に飛ぶ……此処らは任せた……】

すると風也の足元に転移魔方陣が発動し別の場所へ飛んでいった……

「行つたな……ん？」

風也がこの場から消えた事を確認した時に後ろに気配を感じた。

「何だ……医者の手か……」

そこには走って息が上がってる優曇華の姿があった。

「あのっ……風也さんは見ませんでした？病室から逃げ出したので……」

「もう此処には居ないさ……あいつなら治療は無用だと思うがな……」

妹紅は空を見上げ黒い次元穴を見ていた……

――――紅魔館――――

「はぁ……門番は何をしてるのかしらね……こんな奴の侵入を許すなんて……」

レミリアは紅魔館ロビーで飽きれていた……壊れている玄関には骸骨の化物が多数立っていた……スケルトンとでも名付けるか……

その頃、美鈴は門の傍で爆睡していた……敵はそれを放置したらしい。

「咲夜も出かけているし……メイドじゃ手に負えないわね……」

スケルトン達はレミリアに向けて足を進めていた……手には剣や弓が持たされていた……

「だけど……」

レミリアはその場から消えた……その後スケルトン達の後ろに姿を表した……

その直後レミリアの神速の攻撃でスケルトン全員の骨が砕かれ粉塵

と化した……

「私に逆らうには1000年早いわね……」

そして粉塵は風に乗りに外に流れて行った……

「はぁ……早く咲夜帰ってこないかしら……紅茶が飲みたいわ……」

レミリアは退屈そうに自室へと戻って行った……

……魔法の森……

「まったく……見た事の無い魔法を撃たれると避け辛いな……」

魔法の森の森では魔理沙が気味の悪い魔術師と対決していた……黒いローブを着て黒い魔導書を手に持っていた……

【ヨルムンガンド……】

魔術師が何かを唱えると本から死霊が出始め魔理沙を襲い出した。

「くそっ……気味の悪い魔術だな……だけどその魔導書は私が貰ったぜ！」

魔理沙は森の中を箒で巧みに死霊を避け、八卦路を魔術師に向けた。

「魔導書は燃やさない様にしないと……恋符『マスタースパーク』……」

八卦路から出たビームに死霊は掻き消されマスタースパークは魔術師を飲み込み……消滅させた……その場には魔術師が持つ魔導書だけが残った……

「ふう……変な魔術だし見るだけにしとくか……」

魔理沙は魔導書を拾ってパラパラと開いていた……

「うげっ……この字全然読めないぜ……アリス辺りに聞くか……」

そして魔理沙は本を持ちながらアリスの家へ向かっていった……

そう……この敵達には共通点が出始めた……『力を持つ者』だけを襲撃しているのだ……戦い力を貯めているかの様に……

37章 元凶の地へ……（前書き）

前回のあらすじ

風也は妹紅と手を組み2体の刺客を圧倒的に倒した……他の場所でもレミア、魔理沙が刺客を簡単に排除していた。そして風也が転移で向かった場所は……

37章 元凶の地へ……

幻想郷とは思えない場所に魔方陣が出現し風也が現れた……そう
……此処は幻想郷ではない……あの次元穴の中だ……別の次元へ
と繋がっていたのだ……

そこには大きな広場が……中心部には巨大な紫色のオーブが浮い
ていた……

【幻想郷ではないな……だが……】

風也は紫色のオーブを睨んだ。

するとオーブから黒いレーザーが高速で射出され風也は大剣で受け
止めた……

ジジジジジジ……

【あれが黒幕か……】

その時オーブから数体の敵が召喚された……巨大な体……そして
広い羽、太い尾、強固な鱗……そう……ドラゴンだ……

赤色、青色、緑色、黄色、土色のドラゴンが召喚され5方向で風也
は囲まれた……

その時5体のドラゴンは風也に向け、各自のブレスを吐き出した。
赤は炎を、青は氷を、緑は風を、黄は雷を、土は岩を吐き出し5方

向から風也に直撃させた……

【鎧なら少しは耐えられるな……5属……使えそうだな……】

風也は5種のブレスを鎧で受けながら真っ白な剣を5本作り出した……

【ただ殺すのは惜しい……竜の力……貰うとしよう……】

すると各ドラゴンに先ほど作った白い剣を1体1本になる様に投げた。

その白い剣は竜のブレスを吸収しながら竜へ突き進み、胴に突き刺さった……

ドススススッ!!

【さあ！全てを奪わせて貰う！】

すると風也が右手を強く握り締めると5本の白い剣の装飾が輝き始めた……すると各剣の色が変わり始めたのだ……

ドラゴンの体は力を吸収されていく毎に小さくなっていく……そして剣の色は濃くなっていく……そして完全に吸収されると……5色の剣だけが残った……

【これで良い……無駄の無い死だ……】

風也は5本の剣をスペルカードにした瞬間、オーブの異常な攻撃が始まった……

空間がずれ、ずれの位置にあった岩が2つに綺麗に割れた……

次元の境界を歪ませ……切断する攻撃だ……

間髪入れずにオーブから大量の細い圧縮レーザーが出始め周りを切り刻み始めた……岩を……地面を……枯れた木も切断していくのだ……

風也は大剣でレーザーをいなして居たが……数が多過ぎる……反撃が出来ない程の数なのだ……

【今まで全力を出してない様な火力だな……】

するとオーブの真ん中部分から次元が歪み始めた……そして何かの光源が出現したのだ……そしてマスタースパークとまったく同じ物が射出された……

【あれは……マスタースパーク!?】

風也は身を避けマスタースパークをかわした……

その直後も次元が歪み巨大な陰陽玉が風也に襲った……そう……風也も1度だけ食らった事のあるスペルだ……

【こいつは……】

両手で陰陽玉を受け止め足がどんどん後ろに押されていた……

そして風也の視点では見えない場所から次元が歪み、巨大な火球が

陰陽玉にめり込んだ……

【陰陽玉にヒビ……!?!】

ガギイイン……ドゴンッ!

風也は陰陽玉を大剣で吹き飛ばすと陰陽玉は大爆発を起こした……

【魔理沙に霊夢に妹紅のスペルか……こいつ……戦った相手のスペルをコピーしてるのか……】

そう……このオーブは召喚した手下を使い、戦った相手のスペルをコピーして撃ち出しているのだ……

その時、風也の首部分と大剣の位置に次元のずれが出来た……

そして大剣が砕け……辛うじて避け兜が一部切断された……
そして大剣と兜の一部は塵と化したのだ……

「……やっと大剣が折れた……これで……」

風也は白い剣を作った要領で1本の刀を作り出した……

「剣を自由に使える……」

風也が刀を構えると……オーブから見覚えのある姿が召喚された……
全身黒いオーラで纏われ……赤い目……そう風也のコピーだ……

?

「チッ……面倒な奴を出しやがったか……」

そう……此処からがこの戦いの終わりへと向かう……自分自身の
力に苦しめられる戦いでもあるのだ……

38章 異変の最後（前書き）

前回のあらすじ

黒幕の居る次元穴の中へ侵入した風也だがそこには巨大なオーブが浮いていた……それは多数の攻撃を持ち、戦った相手のスペルをコピーし撃ちだし風也を苦しめた……終いには……風也のコピーを作り出したのだ……

38章 異変の最後

そしてオーブが縮小し始め風也のコピーの中に入り込んだ……

「本気か………」

風也も鎧を完全に消しいつもの服に戻っていた……

「自分の能力を使うのだとすれば……さっさと終わらせて貰う！」

風也は全力で地面を蹴り、コピーの間合いに入った……そして首部分を一闪した……だが手応えが無かった……

シュウウウウウ……

「やはり俺の能力か………」

斬りつけた刀の半分が消滅していたのだ……黒符の効力の「破壊」の能力だ……

「ならこれだ……『賢者の石』………」

風也は刃が消滅した刀を捨て賢者の石を出現させた……

「火符『アグニシャイン』……！」

コピー目掛け大量の火の粉が降り注ぎ始めた……そして赤い賢者の石も割れエネルギー弾と化しコピーに撃ち出された。

コピーは火の粉を体から漏れる靄で消滅させ、エネルギー弾は手で消された……その直後その場から消え風也を薙ぎ払いで吹き飛ばし木に直撃させた……

「ぐつ……『黒符 縮』！」

風也がかるうじてスペルを唱えた後、勢い良く木に直撃し木がへし折れた……

メキメキメキ……ドスン……

「くそつ……力は俺以上って訳か……」

風也は血を口から吐き、首の骨を無理矢理嵌め直した。

「賢者の石を調べた結果を見せてやる……『賢者の石 鎧』」

すると賢者の石5つが1つの白い結晶となり、風也に白い鎧として装着された……

真っ白な軽鎧の手の甲や足には小さな賢者の石の5色の装飾が付いていた……

そしてコピーは風也の真後ろに瞬間移動に首を狙った瞬間……攻撃を完全に受け流されコピーの体制は一気に崩れた……

「太極拳……受け流しただけじゃ無いがな……」

コピーが受け流された後に風也の方向を向くとコピーの胴に6発の打撃が入っていた……

ゴゴゴゴゴッ！

コピーが怯んだ瞬間を風也は見逃さなかった……そしてコピーの懐に潜り込み拳を構えて居た。

「太極拳と魔術の組み合わせってのを……教えてやるっ！『炎砲』！」

風也は美鈴の技『紅砲』の構えを取り拳に乗っていたのは赤い気ではなく炎でありコピーの胴に拳をうちはなった……

コピーは数十m吹き飛び岩に直撃し岩は粉々に砕けた……

「貫通はしないか……ならこれだ……っ！？」

コピーは砕けた岩の残骸から起き上がった……そして手の平からマスタースパークを両手から発射したのだ……

「またマスタースパークか……真似事が通じると思っなよ……」

そして風也は何か詠唱を唱え5つの賢者の石が盾となりマスタースパークを防いでいた……

そしてコピーのマスタースパークがパワー不足で途中で消え去った……そして風也はコピーの目の前に立っていた……

「貫け……『旋砲』……」

腕に高密度の風を纏わせコピーの胴に腕を突き刺した……

パキィイン……………

何かが割れる音……………そう本体のオーブが貫かれ砕けた音だ……………
その瞬間……………

バキバキバキバキ……………ドゴオオオン……………

割れたオーブが拡大化し始めコピーに腕が刺さったまま大爆発を起
こした……………その爆発には血が混じっていた……………

風也は爆発で吹き飛ばされ片腕が吹き飛んだ……………近くに風也の
腕が落ちた……………

「腕が……………散り際の悪あがきか……………」

その瞬間、空間が歪み始めた……………地面は割れ……………空間を裂き……………
揺れが起き始めた……………

「なんだっ!?これは!?地震な訳ない……………早く逃げなければ……………
……………転移出来ない!?!」

風也は転移魔法を使ったが何故か転移出来ないのだ……………

「まさか……………此処を作った中心が壊れて次元が断裂したのか……………
このままじゃ……………此処は消滅するっ!」

空間が消滅し始めた……………どんと地面は無くなり……………空間が
歪んで無に還っていった……………

「逃げ場がないか……まさか道連れか……」

風也が諦めた瞬間……後ろから声が聞こえた……

「風也ー!!」

「!?!」

後ろを向くとスキマから出てきた紫が居たのだ……

「早くスキマに入りなさい!もうすぐ消滅するわ!」

「あ、ああ!間に合えっ!」

風也は最後に残った地面を蹴りスキマに飛び込んだ……そして2つのスキマはすぐに閉まった……

幻想郷の上空にあった次元穴は縮小し始め、消えたのだ……

そして各地に居た化物も全て消滅した……

……魔法の森……

広い湖の岸辺りにスキマが開いた……そこからは自分の腕を持つ

た風也が落ちて来た……

「あ……危なかった……」

「もう少し遅れてたら死んでたわよ……無理のし過ぎよ……」

もう1つのスキマが開き紫が出て来た……

「すまん……だが異変は解決しなきゃ駄目だろ？」

「そうだけどね……貴方、自分の命を軽く思い過ぎている……だからこんな危険な事が出来るんじゃないかしら？」

風也は紫の言葉で黙り込んだ……

「貴方が死んだら悲しむ人が居る筈よ……そういう人が居ても居なくても人間の命は重いんだよ……」

「ああ……多分……妖夢も幽々子さんも早苗さんもミステイアも悲しむんだろ？……俺の命は……こんなにも重い物なのか……」

「だから……命を捨てる物なんて言っただけは駄目よ……分かったわね……その前に腕は大丈夫なのかしら？腕が無いけれども……」

紫は風也の片腕が無い事に気づいた……最後の爆発で吹き飛んだからだ。

「大丈夫だ……腕は拾ったよ……」

そして風也は自分の腕の傷同士をくっ付けると傷口部分から煙のよ
うな物が漏れ出した……

シューウウウウウ……

その煙が消えると傷は残ったが……腕が元の場所に付いたのだ……

「もう貴方……人間から離れてる体になったわね……」

紫は風也の再生能力に驚いていた……

「大丈夫さ……ここは幻想郷……妖怪も居る所だ……誰も気づかな
いさ」

「そうね……とりあえず医者に見てもらいなさい。それが先決よ
……私は家に帰るわね……たまには遊びに来るのよ？」

「分かった……じゃあな」

そして紫はスキマに入り込みその場から姿を消した……

「はぁ……医者の場所に戻るか……殺されそうだけど……」

風也は腕の動き加減を確認しながら竹林目掛けて歩いていった……

…

39章 新装備と謎の穴（前書き）

前回のあらすじ

遂に自分のコピー、そして異変の元凶のオーブを破壊した……オ
ーブを破壊した事により空間の消滅で終わりかと思いきや紫がスキ
マを開き風也を間一髪で助けた……そして永遠亭へ向かい……

39章 新装備と謎の穴

「ふう……………怪我がほぼ治ってたなんてな……………永琳もびっくりしてたな……………」

風也はあの後、永遠亭に戻り怪我を見てもらったが、毒は体から検出されず、大きな刀傷も塞がっていて体と腕に包帯を巻いただけで治療は終わった……………

「そういえば……………にとりの所に行ってみるか……………」

そして河城ファクトリーへと足を進めにとりに会いに行った。前に預けたあの破損した武器だ。1から作り直すと言っていたが……………どうなるのか……………

「よっ……………にとり」

「おお！盟友じゃないか！良い所に来たね。作り直した武器が完成したんだよ」

にとりは手に持っていた小さな物を3つ前に出した……………

「かなり小さくなったな……………ん？みた事のある形状だな……………」

「資料を漁っていたらこれらの設計図を見つけて作ってみただけど、予想以上に強力で頑丈な銃が出来たのさ。」

そう……………1つは手銃としては一回り大きい人間界では【デザートイーグル】と呼ばれる大型銃に似ていて、もう2つは小型のマシン

ガンの様だ……………【イングラムM11】に酷似している……………どちらにせよ、人間界の銃器である事は間違いない……………

「もはや軍事武器だな……………何処かで設計図を仕入れたのか？」

「うーん……………多分結構前に香霖堂で仕入れたんだと思うよ。」

「これがあの武器の生まれ代わりか……………そーいや弾は前と同じで弾幕パワーか？」

風也が銃から弾倉を取り出し覗くと、実弾が入っていた……………

「実弾と弾幕パワーを使い分けれる仕様にしたんだ。前みたいな化け物相手に実弾を使えればって思ってね。問題は弾を大量に作るのがね……………」

実弾の生産が追いつかない事に2人は考えた始めた……………そして風也は考えついた……………

「にとり、全弾を弾倉から取るぞ」

「あ、うん。良いけど、何をするんだい？」

風也は1発1発弾を取り出し弾倉を空っぽにした。

「すぐ分かる。『賢者の石』……………」

すると手のひらから銃弾並の小さな黄色の賢者の石が出た……………金の賢者の石である。

それを弾倉に1個だけ積めた……………すると弾倉部分が輝き弾倉をを

見ると実弾が生産されていた……賢者の石の効力である。

「これで弾の問題は無くなるだろ。まあ実弾を使う機会なんて訪れて欲しく無いがな。」

「そうだね……」

そして話で小一時間は経っただろうか……

「じゃあ俺は帰るよ……武器ありがとな」

「うん、また何時でもおいでよ。」

そして河城ファクトリーを後にした……そして山を歩いていたのだが……とある穴を見つけた……

「なんだこの穴……異常に深いな……空気は通っているらしいが……」

ドンッ！

「っ！？」

風也は後ろから誰かに押され穴に落下し始めた……かなりの降下をしていた……

そして落ちていく内に落下スピードは上がっていた……

「このスピードはやばい……体制も立て直さないと……」

風也は壁に手を引つ掛ける落下スピードを軽減し始めた……

ガリガリガリガリガリッ！！！！

数百mは落下した所でやっとスピードは抑えられ落下は止まった……

……

「ふう………やっと止まったな……」

「あれ？人間さんがどうして此処に？」

風也が安心した時に目の前から声が聞こえた………真っ暗で見えなかったが横穴の方から聞こえた………

「好きで此処に来た様には思えないね………まさか誰かに押された？」

「ああ………誰かに背中を押されてこうなった………」

「あー………あいつは何て事を………あつ、紹介が遅れたね、私は黒谷ヤマメって言うからよろしくね」

「俺は風也だ。それにしても、結構降りたんだがまだ降りるのか？」

「もうすぐ辿り着くよ、といっても、手で速度軽減してたらしいけど手は大丈夫かい？」

ヤマメは落下の仕方が気になったらしく風也を心配した………

「まあ後少しなら保つかもな………」

「じゃあ私が糸を垂らすから掴まっておくれよ。」

するとヤマメは糸を手から出し縦穴に垂らせ始めた……風也はその糸に掴まり糸はどんどん降りていった……

そして百数mは降りただろうか……下から灯りが見えたのだ……

「あれか……この位なら……落ちても大丈夫そうだな。」

風也は地面から60m程の高さから糸を掴んだ手を離し地面に勢い良く着地した……地面は少し陥没はしたが無事辿り着いた。

「此処が最下層らしいけど……ヤマメに此処が何処なのか聞いておけば良かったな……」

「おや？見かけない顔だね、誰かな？」

風也は後ろから声が聞こえた為後ろを向いた……

そこには……

40章 地底の異常熱気（前書き）

前回のあらすじ

河城ファクトリーで生まれ変わった武器を受け取りのんびり歩いていた時、穴を見つけた……穴を見ていたら誰かに背中を押され落下……そして穴の途中でヤマメと会い……そして最下層へと到着した。

40章 地底の異常熱気

「おや？見かけない顔だね。誰かな？」

風也は後ろに意識を集中していた……………気配……………雰囲気得手練れなのは明確に分かった……………

「ただの化物じみた人間さ……………敵意は無い……………」

「まあ殺気は放って無い様だから大丈夫だねえ……………後、そう堅苦しくならなくても良いんだ。のんびりして行きな」

風也は後ろを向くと、そこには赤い角を持ち、白い半袖を着ている女性だ……………片手には盃を持っていた。

「私の名前は星熊勇儀だ、よろしくな」

「名前は風也です。さっきも言ったけど一応人間さ。」

風也と勇儀は握手を組んだ。

「それにしてもアンタさ、身体に合わない力を持ち過ぎてないかい？感覚でわかるよ」

「っ！？」

勇儀は一目と手を握っただけで感覚で全てを知った様だ……………かなりの手練れである……………

「まあ、此処で会ったのも何かの縁だ、私の家で酒でも呑み交わさないか？」

勇儀は笑顔で風也を酒呑みに誘った……風也は断わる義理も無いわけです誘いに乗り酒を呑んでいた……

「そついや風也は何で此処に来たんだい？」

「誰かに背中を押されて落ちたのさ……」

勇儀はそれを聞いてポカーンとしていた……

「なるほどね……まあ不意な訳かい。だけど……ようこそ……地霊殿へ」

その後、勇儀と酒を飲み合い酔い潰れるまで飲んだ……

次の日……

風也は壁に寄りかかって、勇儀は布団で寝ていたが……勇儀は寝相が悪いのか風也を巻き込み風也の頭を自分の胸に埋もれさせるかのように風也に掴まっていた……

「……っ！？」

風也は目を冷めた途端、とりあえずもがき始めた……勇儀に捕まっつていて逃げようにも逃げられず声も出せない状態でもあった……

「……………っ!? (起きろー!起きろー!)」

風也は勇儀の肩を軽く叩いて居るが起きる気配が無い……………勇儀が起きるまでこのままなのかと思いきや……………

「勇儀!!アンタ何やってんのよおおおおお!!?」

扉を開けると同時に大声を出した者が居た……………おそらく地霊殿の住人である事は確かだ……………

「……………ZZZZZZ……………ん?何だ……………お前か……………おっと、風也にもすまないね。私の寝相に巻き込んでた様だね……………」

「ぶはっ……………あー、死ぬかと思った……………」

勇儀は起き、風也は開放された……………

「風也、こいつは水橋パルスイダ。仲良くしてやってくれ」

「勇儀!そんな事は良いから、どんどん地霊殿の温度が上がりはじめてるのよ!」

そういえば昨日より格段に暑い……………何もしなくても汗が出る……………

「ん……………確かに暑い……………何かあったのかもな……………風也、ちょっとついて来てくれ」

「ああ、何処だ?」

「古名地って言う此処の主人の所さ……………多分そこで原因が分かる」

「分かった。早めに行くべきだな……」

風也は勇儀とパルスィに着いて行き古名地邸へと向かい始めた……
すると気温はどんどん上がっていった……

「なんだこの暑さ……尋常じゃ無いぞ……」

風也達3人からは多量の汗が流れていた……いつ脱水症状の症状
が出てもおかしくない量が……

「もう少しだ……耐えてくれ……」

「もう暑くて無理……」

するとパルスィが暑さで倒れた……

「私が担ぐ、此処に居ると干からびてもおかしくない」

勇儀はパルスィを担いで目の前に見える古名地邸へと突入した……
風也はすぐに扉を閉めた。すると少し肌寒い気温の館であった……

「やっぱ勇儀達も来たのね……あら？貴方は誰かしら？」

すると目の前に小さな少女が居た……赤い大きな目が浮いていた
が……

「さとり、風也は地上から来た人間さ」

「ええ、大体事情は分かりました。ちょっと核融合炉内で異常が発

生していて……気温も高くとても……」

「気温が上昇し過ぎで危険と言う事か？」

風也がそう聞くとさとりは頷いた。

「多分………お空に問題が発生して核融合炉から熱が漏れ出しているのかも………」

「お空？」

「あの子は核を操る能力なの………力も強くて勇儀でも刃が立たない程の強さを持つてるの」

さとりは沈んだ声で淡々と話していった。

「要するにそのお空を止めれば良いって事か？」

「ええ、そうすれば熱も治まるはず………」

風也は止める方法も分かればすぐにでも止めに行こうとしたが……

「貴方………正気なの？結構離れた此処でもこんな気温なのに、近づけば数千度にも気温になるわ………」

「君は心が読めるんだろ？頭の中を探られる感じを常に感じてるさ………」

さとりは驚いていた………自分の能力を感知した風也に………

「てつとり早く終わらすさ……勇儀さん達は此処で休んでいてくれ……」

風也は玄関を開け外に出た……館の中とは大違いの高い温度……通常の人間なら脱水症状で死んでいる気温でもある……

さとりには教えられた方向に進み始め、核融合炉の近くへと進むに連れ気温は千度を超えていた……

「くそっ……熱い……」

風也から出る汗……地面に落ちるとすぐに蒸発した……

そして遂に核融合炉の入り口に着いた……そして中に入った……その直後……

巨大な火球が風也に飛んで来たのだ……風也は片腕で火球を受け止めていた……

「この力……今までと比にならない……『賢者の石 鎧』」

火球を受け止めながら風也は賢者の石の鎧を身に纏った……

「『水盾』」

腕から大量の水を出し盾の様に火球を腕の代わりに受け止めさせた……そして火球は消え……盾は蒸発した……

「歓迎的な挨拶だな……」

火球が来た方向を見ると羽を持ち、マントを着た少女がいた……

腕には棒の様な物が装着されていたのだ……さとりが言っていた「お空」という少女だ。

「歓迎されてないっばいな……」

風也は構えを取り臨戦体制になる……そしてお空は腕にある棒「制御棒」を風也に向ける……

「……………」

お空の目には生気が無い様に風也は感じた……何かがお空に取り憑いて居ると見て間違いないだろう……

そして制御棒からレーザーが射出された……

「早い……………」

風也はレーザーをかわしお空の懐へ潜り込もうとした……だがその予定は崩れた……制御棒を付けていない方の腕で打ち上げられ、制御棒からまたレーザーを撃ち放った……

「ぐっ……………」

風也はレーザーをモロに食らい吹き飛んだが何とか着地した……脱水症状で動きが鈍っていたのだ……融合炉内は数千度を超えている……

「怪我をさせない程度に気絶させないとな……………」

息は上がっていた……風也は脱水症状の他に酸欠状態にも陥ってい

ただ……

「い、息がし辛い……此処の環境は変だ……早めに決着をつけなければ……死ぬかも……」

体が思う様に動かない……一方的に攻撃をされていた……お空の制御棒のなぎ払いで風也の脇腹に入り壁に吹き飛んだ……

風也の骨は数本折れ、鎧にもヒビが入っていた……

「体に負荷はかかるが……仕方ないな……」

その時、風也の全身に微量の電流が流れ始めた……

「『瞬砲』……」

一瞬でお空の死角に入り後ろから電流を帯びた手で首筋を軽く叩いた……

「っ！？」

お空は神経を麻痺させられ地面に落ちた……風也の体からは血が吹き出していた……

血だらけの手でお空を背負い古名地邸へと歩き始めた……そして地霊殿の温度は常温まで下がり始め、心地よい温度まで下がった……

そして十数分歩き、古名地邸に到着し玄関を開けた……

42章 行方不明のお嬢様（前書き）

前回のあらすじ

お空をさとりの元へ連れて行き何とか温度上昇を止めた。そして夜、こいしとさとりに寝込みを襲われかけたが途中で起きた……。そして明朝、ヤマメとキスメに地上へと送って貰ったが途中で異変に気づいた……。そして遠くには巨大な城があった……

42章 行方不明のお嬢様

-----紅魔館-----

咲夜が買い出しから帰ってきていた……

「お嬢様ただいま戻りました。御所望の本、買ってきましたよ。」

だが返事が聞こえて来ない……人の気配すら無い……

「お嬢様？」（おかしい……お嬢様おるか、パチュリー様や美鈴の気配すら無い……

「皆、何処に行ったのかしら……」

すると声がした……

「何処へ行ったのかしらねえ？」

そしてスキマが開き紫が姿を表した……

「……！」

咲夜は急な来訪者に驚いた……

「ごきげんよう、咲夜」

「八雲……紫……」

「ちょっとした用事でね、此処の素敵な吸血鬼さんに挨拶にきたのだけど……」

「……………」

紫は淡々と話し続ける。咲夜は無言であった……

「どうやらご不在のようだったので、代わりに私が留守を預からせてもらったの」

「白々しい……お嬢様達がいらっしやらないのも、あなたが関係していると言っても言っているみたいね」

「あら？そう聞こえるかしら？」

「……………」

紫は見抜いたのか微笑みながら口を開いた。

「ふふふ、平静を装っているけど、内心は……といったところかしらっ」

「貴様……………」

咲夜は紫に怒りを放っていた……

「滾らない、滾らない。ふふ、綺麗な顔が台無しよ」

「口で言っても分からないようね」

咲夜はナイフを手に持ち紫に斬りかかった……だがその時スキマが空間に開き咲夜の体が動かなくなった……

「うっ……」

「頭の悪い人、気づかない様だから教えてあげるわ」

「な……なに？」

「春が来ない……とでも言えば良いかしら？」

紫は微笑みながら喋り、咲夜は動くに動けなかった。

「春が……？」

「面白いと思わない？ヒントはここまでにしておきましょう。」

「ま、まちなさい……」

「誰かに盗まれた春……何の目的で……なんて。それじゃあ、ごきげんよう。」

そして紫はスキマの中に消えスキマも閉じその場から消えた……

「春が来ない……確かに春の筈なのにこの気温……」

（お嬢様達が居ない事に関係している……）

「お嬢様……」

そして咲夜はすぐに紅魔館の玄関を開け紅魔館から飛び出した……
…レミリアを探すために……

その頃の風也……………

「くそっ！見覚えの無い化け物が多いなっ！」

風也は骸骨や鷹の化け物に囲まれていて襲われていた……

「久しぶりにこの技を使うか……黒符『シャドウアーミー』」

風也は黒い気を纏わせた剣を地面に突き刺し黒い気が地面に広がった……………

するとその場から黒い人型が数人出現した……………剣、槍、斧、弓を持つ4人の人型が……………そして各自回りの骸骨や鷹を排除し始めた……………

矢で撃ち抜き、斧や剣で両断、槍で突き刺しを敵が殲滅するまでシヤドウ達は続けていた……………

「とりあえず城に近づけば何かが分かると思ったが……………遠いな……………足止めも多い……………」

風也は次々と襲ってくる化け物達を切り捨てながら進軍をしていた……………だが城に辿り着くのはまだまだ先の様だ……………

その頃の咲夜……………

咲夜は怪しい気を感じる方向に走り続けていた……嫌な感じがする方向へ……化け物達を否しながら進む……そして城へと辿り着いた……

「これは……紅魔城？」

咲夜は上を見上げ城の姿を確認した……

（何故……紅魔城はあの時確かに……）

「だけど形状が少し異なるけど……この禍々しい感覚は紅魔城そのもの……」

（まさかお嬢様が？ いや……紫が関わっているのであれば、その線はない……それに、お嬢様が私に何も言わないというのも考えられない）

「じゃあ、この城は誰が……」

「んー！」

咲夜が考えていると前から声がした……だが普通の状態では無い様な声が……

「んー、んんー、んんー！」

「あなたは……」

咲夜が見つけたそこには……

43章 城前の戦い（前書き）

前回のあらすじ

紅魔館では、咲夜が戻った頃にはレミリア達全員が行方不明になっていた……そして紫と会い、少しの情報を手に入れ、レミリアを探す為に外へ駆け出した……その頃風也は立ちほだかる化物を切り捨てながら城へ向かっていた。

43章 城前の戦い

風也はある程度城に近づいていた……

「面倒だな……跳ぶか……」

シャドウ達を消滅させ脚部に力を収縮し始めた……そして大ジャンプを行い、城へ一直線に向かって行った……すると体に違和感が感じ始めた……

「ん……」

そして数分後、紅魔城の城壁に足を突き刺し辿り着いた……

「この体がざわつく感じ……嫌な予感がする……」

風也の体の内部に違和感が出始めていた……風也の中にある力が暴れているかのように……

「急ぐか……」

ガシャーン！

風也は近くの窓を見つけ、城内へと侵入した……

その頃の咲夜……

「貴女は……美鈴？」

「んんー！」

咲夜が見つけたのは猿ぐつわを付けられ、手足を縛られている美鈴の姿だ。

「どついう事なの？これは一体……………」

「ん、んむむう、むむむー！むんん、むんんー！」

「は、話は後で縄を解いて、と言ってるようね」

咲夜はごもっている美鈴の言葉を翻訳し理解した。

「うむむんむー」

「はいはい、分かったわ。早く解いて欲しいんですけど？」

咲夜が美鈴の縄を解こうとした時……………アリスが飛んで来た……………

「あっ、あなたはアリス」

「レミリアのメイドじゃない」

「どついう事か説明して貰えるかしら？」

「えっ、何が？」

「うちの門番がお世話になっているようですが？このように」

咲夜は美鈴の有様をアリスに見せた。

「んんー！んんー！」

「あれ？美鈴？何してるの……って、私？」

アリスは咲夜の質問にかなりの疑問を持ち始めた。

「あなた以外、誰が居るかしら？」

「しっ、知らない知らない！私知らない！」

「んんんーっ！」

「ええーっ！？私じゃないって！」

アリスと美鈴の言い合いの様な物を聞き終えたかのように咲夜はアリスを睨んでいた……

「……」

「し、しらない……」

「……」『ちからずくで来い』と言っているよね

咲夜は大量のナイフを両手に持ち構えた……

「ひい、そ、そんなあゝ！」

咲夜はナイフでアリスに切りかかった。

「ちよっ！本当に知らないのにつ！」

アリスは人形を糸で操り始め弾幕を張った……だが咲夜は最低限の弾幕をナイフで弾き、アリスに蹴りを入れる。

「痛っ！もう勘弁してよっ！」

剣や槍を持つ人形を出し咲夜に切りかからせたが咲夜はナイフで人形を操る糸を切り動かなくさせアリスの首筋にナイフを当てた……

「これで喋る気になったかしら？」

「だから本当に知らないんだってば！」

「この期に及んで……」

咲夜は首筋に当てているナイフに力を込め始めた。

「ひいっ！だ、だったらその門番に聞けば良いじゃない!!！」

「それもそうね。」

咲夜はナイフをアリスの首筋から離し美鈴を縛っている縄を解いた。

「ぶはっ！ありがとうございますっ！」

「美鈴、貴女をこんな姿にしたのは誰？」

「いや、その、ちよっと前まで紅魔館の庭で……ええ、ちよっと昼

寝を……」

「……」

「い、いや、ちょっとした仮眠を……」

「どっちも同じです……」

咲夜は呆れた顔で言い放った。

「すみません……」

「それで？」

「昼寝をしていたら、何者かに急に……」

「ということは、誰もが容疑者になり得るという事ね」

そして咲夜と美鈴はアリスの居る方向を向いた。

「ええっ?! どうして私の方睨むの? …… あっ! わたし、あれあるもん! アリ、ア、アリベ……」

「アリバイ」

「そう、アリバイ! だってさっきまで咲夜が香霖堂で買い物してたの見たもの!」

「それを知っているという事は、美鈴を襲うのは物理的に不可能、と?」

「うん！わたしはただ、この方角に不吉なものを感じたから」

「なるほど、わかったわ。」

咲夜はアリスの言葉を聞き疑いを無くし城の方を向いた。

「はぁ……ようやくわかってくれた。咲夜、レミリアの事になるとすぐこうなるんだもの」

「何か？」

咲夜がその言葉でアリスを見た。

「いつ！いえいえ！なんでもないです！」

「ほら、美鈴、城に入るわよ」

「はっ、はひっ！」

「こ、こえ〜……」

そして咲夜と美鈴は紅魔城へと入って行った……

その頃の風也……

風也は城のトラップに引っかけりそうになりながら城を探索していた……

「くそっ！どれ程トラップが多いんだよ！」

風也が近くの大きな鎧に寄り掛かって休憩していた……その時、その鎧は動き始め大剣で風也の肩に向け振り下ろした……

「!？」

ブシュッ！ガキイン……

風也の肩は切れなかった……寧ろ大剣の刃が大きく砕けたのだ……

風也の左腕からは人間の骨格ではあり得ない骨が突出していた。皮膚の中から突き出た骨からは生気が感じられない……風也はその腕を鎧に向けると突き出た骨は伸び、鎧に突き刺さった……

「これは……」

左腕を左に振ると鎧は完全に斬り落とされ動かなくなった……

「死気しか感じられない……この力は一体……」

「確実に俺の力ではない……こんな力……」

風也は骨の突出した異形の左腕を気にしながら城の廊下を進み始めていた……

44章 地下墓地と図書館（前書き）

前回のあらすじ

咲夜はアリスを尋問にかけたが何も知らなかった……そして縛られて居た美鈴を助け紅魔城へと入って行った。風也は城の中を探索していた。だが風也の体中存在する『あの力』が蠢いていた。人として何かを失う力を……

44章 地下墓地と図書館

「大分下の階に降りたのか……………」

風也は階段で1階まで降りていた……………」

「風……………」

風を感じた方向に歩いていた……………」すると地下への階段がそこにあつた……………」

「此処には……………」死者以外の気配もする……………」誰かが居る様だな……………」降りるか……………」

そして風也は地下墓地への階段を降りて行った……………」

その頃の咲夜……………」

「此処はまるで……………」

「パチユリー様の図書館の様ですね。」

咲夜と美鈴は周りの本だらけの部屋を見渡していた……………」

「此処の奥にきつとパチユリー様が居るんじゃないですか？」

「そうね、急いで行きましょう。」

咲夜と美鈴はダッシュでどんどん奥へ向かった……途中、妖精メイドや本が勝手に動き攻撃を仕掛けて来たが難なく障害を2人で排除しながら確実に進んでいた……

「此処の扉が最後の筈……美鈴！壊しなさい！」

「はいっ！咲夜さん！」

美鈴は全力で扉に天龍脚をし、破壊し部屋にたどり着いた……

その頃の風也も死霊、トラップ、化け物達を退け地下墓地を進んでいた……

「あんたは……小町さんじゃないか」

そこには渡し船に乗った小町が止まっていた……

「やあ、風也。良い所に連れて行ってあげようか？多分その先に誰か居ると思うからね」

「ああ、頼む」

そして風也は渡し船に乗り川を進み始めた……

ギイ……ギイ……ザパンツ！

進む途中に魚獣が襲いかかり、舟のバランスを崩そうと揺らして来た。

「落とす気満々だなっ！くそが！」

風也は舟のバランスを崩さない様に魚獣の頭を剣で切り落とした…

……

「着いたか……………」

向こう岸に着き先を歩いてしたが、足元の水は深さを増して行った。水が腰の辺りの深さの時に足を止めた……………そして着いた先には…

……

「やはりお前か……………」

そして別々行動の風也と咲夜達の前に居たのは……………

咲夜視点……………

「……………」

「パチユリー様!？」

咲夜と美鈴はパチユリーに駆け寄る。

「一体誰が？」

「レ……………レミイが……………」

「お嬢様が？」

その時、箒に乗り来たのは……………魔理沙だった……………

「お、奇遇だねえ……………ってそんな時じゃないか？」

「霧雨魔理沙……………その言いぶり、何か知ってる様ね。」

「どうだろうね……………」

魔理沙は答える気は無さそうである……………

「何か知っているのなら教えなさい……………」

「これ以上言わせる気かい？」

「はぁ……………他人の城で掃除をするなんてね……………」

「私の箒は伊達じゃないぜ？」

その瞬間、魔理沙は箒から星型の弾幕を撃ち放ち、咲夜は大量のナイフを投げつけた……………

「咲夜がそんなに怒るって事は何かあったのかねえ」

魔理沙は咲夜に聞こえない声でボソリと呟いた。

魔理沙がかわしたナイフは本棚や壁に突き刺さり、咲夜がかわした弾幕は床や壁に着弾していた……………

「久しぶりだぜ、こんなに避けがいのある弾幕戦は！私も全力を出

させてもらっぜ！」

そうすると魔理沙は八卦路を取り出した……………そして魔理沙は八卦路を構えると八卦路から尋常ではない弾幕パワーがチャージされた

……………

「魔砲『ファイナルスパーク』！」

マスタースパークより極太のレーザーが発射された……………だが咲夜はその場から動かなかつた……………そして直撃かと思いきや、咲夜はその場から消えていた……………

「秘技『パーフェクトメイド』……………」

咲夜は魔理沙の後ろで浮いていてナイフを構えていた……………

「動かない方が良いわ……………」

「わ、分かった……………降参降参、私の負けだ……………」

魔理沙は降参の意で手を上げた……………

「さあ、知ってる事を洗いざらい話しなさい……………」

「い、いや、実は私は何も知らないんだ……………」

「は？」

「本当だぜ……………嫌な予感がしたから来ただけで……………」

するとパチュリーが咲夜に耳打ちをした。

「多分だけど、 かもね……………」

「「ジーーーーッ」「」

咲夜とパチュリーは魔理沙をジーーーーと見た。

「なるほど、混乱に乗じて本を盗みに来た……………」

「かつ、借りるだけだぜ!?!」

「まあそれは良いわ、貴女も付いてくるかしら?」

「私はパスするぜ。じゃあな」

魔理沙は箒に乗りすぐに飛び去って行った……………

「はあ……………はあ……………あれ?魔理沙帰ったの?」

そして息を切らしたアリスが咲夜の居る所にたどり着いた。

「まあ仲間も増えたし問題無いわね。」

「へ?」

そして咲夜達は紅魔城の闘技場へと向かう為に歩き始めた。

風也視点……………

「やはりお前か……………妖夢」

「風也さん……………貴方生きてたんですね」

妖夢は驚きの表情で風也を見ていた……………

「俺がそう簡単に死ぬ訳無いだろ……………さて、この城の事は妖夢は知ってるんだろ？教えて貰おうか……………」

「たとえ風也さんであっても教える事は出来ません……………」

「たとえ俺であつてもか……………話し合いで済ませたかったんだがな……………」

風也の全身からは殺気が帯び始めた……………

「そついつ感じではありませんけどね」

妖夢は白楼剣を構えた……………風也も両刃剣を右手で持ち無構えで立つ……………

「本気で行かせて貰います……………『現世斬』……………」

妖夢は高速で前に出て一閃で風也を斬ろうとした……………だが妖夢の白楼剣は風也の剣によって受け止められていた……………

「死線を何度も通ったんだ……………この程度で殺せると思うな……………」

風也は妖夢の白楼剣を剣で弾き横薙ぎを行ったがすぐかわされた……だが妖夢の頬には切り傷が出来ていた……完全に避けきれいなかった……

「は……速い……」

ビキビキッ！

風也の右脚からは異音がした……風也が右脚を蹴り上げると大量の水が蹴り上げられ妖夢の視界を遮った……

「なっ!?!」

「油断はするなと言ったのは妖夢だったのにな……」

風也は異形と化した右脚で妖夢の腹部を蹴り壁に激突させた……

ドンッ！ゲシヤッ！

「がっ……」

蹴られた妖夢は壁に激突し壁が陥没し気絶した……

「チッ………右脚まで………妖夢には悪いが………幽々子さん」
の現状を説明して貰わないとな………」

そして風也はその場から歩き去った………上の階を目指す為に……

……

45章 闘技場での戦い……発作（前書き）

前回のあらすじ

風也はこの異変の事を知る為、地下で妖夢を倒した……だが何も分からずじまいであった……咲夜も魔理沙を降伏させ情報を得ようとしたが何も得られなかった。咲夜達は闘技場へ向かい、風也も上の階を目指して動いていた。

45章 闘技場での戦い……………発作

風也は何とか時間を掛けて城の中階程度に戻り歩いていた……………

「とりあえずこの手脚をどうにかしないと……………」

風也は全身に気を集中させた……………そして体の妖力と魔力を全身に練り込み手脚や変化した部分が正常に戻った……………

「はあ……………はあ……………も、もう力を制御が難しくなつたな……………こゝ、この結末も定められた事なのか……………」

そして風也は廊下を歩く事を再開した……………

そして咲夜達は……………正気の無いメイド達、死者達を退けて進んでいた。そして巨大なゴーレムが咲夜達の目の前を塞ぐ。

「またでかい石像が出たわね……………」

「咲夜さん、此処は私に任せてくださいよ。はっ！気符『星脈弾』……………」

美鈴はゴーレムの頭を蹴り上げ少し浮いた所に気の塊を撃ち粉々に砕いた……………

「流石は美鈴ね、良い力だわ」

すると目の前には鉄格子の扉が見えた……………

「あの先が確か闘技場よね……………」

そして咲夜は扉を開け闘技場の中へと入った……………そこには殺風景の闘技場しか無い……………美鈴もパチユリーも周りを見ていたが誰も居ないと思ったその時……………

「良く来たわね、咲夜」

玉座の場所から声が聞こえたのだ……………

「あなたは……………」

「ふふふ……………」

「博麗の……………」

玉座に座っていたのは霊夢だったのだ。

「咲夜だったらもう少し早く来ると思ったのだけど」

「まさかあなたが……………この紅魔城の城主だったなんて」

咲夜は驚きを隠せなかった。まさか霊夢だとは思わなく……………

「おどろいた？」

「驚くもなにも、かつてお嬢様の野望を阻んだあなたがなぜ……………」

咲夜の言葉は返さず冷酷な目をして霊夢は口を開いた。

「話す事はなにも無いわ、私が言えるのはひとつ、早々に此処から立ち去りなさい」

「なんですって?」

「聞こえなかった? 此処から立ち去れ、今すぐによ」

「……………!」

「立ち去る意思はなし……………と、仕方ないわ」

霊夢は椅子から瞬間的に移動し咲夜の目の前に立った……………その手にはお祓い棒と大量の札があるのだ……………

「侵入者は排除するのみ、後悔するといいわ」

霊夢は札を大量に咲夜に投げつける。その札は咲夜に直撃し爆発する……………

ド
ド
ド
ド
ド
ド
ド

「くっ! 美鈴!」

「はいつ! ハアアア!」

札の爆風で怯んだ咲夜はすかさず美鈴に掛け声をして、その掛け声で美鈴は霊夢に向かい蹴りを放った……………

ガキーン……………

美鈴の蹴りは霊夢のお祓い棒によって防御されていた……

「門番もまだまだ甘いわね……………」

「くっ！」

そしてお祓い棒で美鈴の足を上に上げ、隙が出来た所にお祓い棒での突きを美鈴にぶつけた……………

「ぐう……………」

美鈴は腹部に突きを食らい食らった部位を抑えていた……………

「食らいなさい…………『殺人ドール』……………」

咲夜は宙に浮いていて周りには多数のナイフが回転していた……………

霊夢はそれに感速く気づいた。

「面倒な技を…………『夢想封印』！！！」

そして6つのエネルギー弾が全てのナイフを消し炭にし、霊夢が咲夜を隙を突こうとした瞬間……………咲夜は既に構えていた……………殺人ドールが相殺される事を読んでいたかのように。

「待っていたわ……………この瞬間をね！傷魂『ソウルスカルプチュア』」

咲夜は両手にナイフを持ち無数の斬撃を霊夢に浴びせた……………

「ぐっ……」

ドサッ……

霊夢は多数の斬撃を受け地面に倒れた……

「まさか……そんな……」

「これで終いよ、全て話して楽になりなさい。」

「はぁ……もはやこれまでか……」

「これまでよ……」

「やーめた!」

霊夢は疲れた顔をしてやめたと言った……

「え?」

咲夜は啞然としていた……当たり前の結果である

「城主やめた! やっぱ私には神社あたりがちょうど良いわ……」

「やめたって……」

「まあ、要するに私は雇われ城主ってこと。藍に言われてね。」

霊夢は淡々と話し始めた。咲夜はそれを聞いていた。

「八雲藍……に？」

「八雲藍……やはり八雲紫が関わってるのは確かね……」

「そうそう、ちょっと面白そうだったし、なかなかそれっぽかったでしょ？」

「それで……こんなところに？」

「そういうこと、だから私は詳しい事分かってないの、ごめんね？」
霊夢は軽く咲夜に謝っていた。そして咲夜は当然の如く飽きれていた……

「……………」

「とりあえず藍が黒幕っぽいし、本人に直接訊いてみたら？」

「はあ……なんという……………」

「私もついていくし、お遊びにしては、ちょっとばかし度が過ぎてるわ」

「そうね」

そして霊夢は話した……………現状で確かな事を……………

「幻想郷の至る所で春が消え続けている……………これは……………異変よ！」

「その通りね。早く上に行かないと」

そして咲夜達は霊夢も共に上を目指した……

その頃の風也……

「がはっ……」

風也は膝をつき苦しそうに何かを吐いていた……風也の手は……吐いた血で真っ赤に染まっていた……

「ごぼっ……げぼげぼっ……」

ポタポタポタ……

口から大量に血が吐かれる……

「はぁ……はぁ……ま……まずい……」

風也の体は既にかなり壊れていた……治療能力でも治せない程に……

「も……保ってくれれば良いんだ……保てば……」

もう風也は満足に歩く事も難しい容体であり……今まで普通に居れたのさえ奇跡に等しかった……そして……無理に力を封印してる負荷も原因の一つだ……

「さ……先に……進まな……いと……」

風也は壁にもたれかかりながらゆっくりと歩を進めていた……

46章 禁断の腕と眼（前書き）

前回のあらすじ

咲夜達は闘技場で霊夢と会い戦闘に発展した。その霊夢を倒しこれが約1年前と同じ異変だと発覚する。その頃の風也は己の力に体はどんどん蝕まれていった……体内の妖力と魔力を常時大量に消費する為、体は衰弱し始めていた……

46章 禁断の腕と眼

「ゲホッ……くそっ……」

風也は血を吐く間隔が短くなり始めていた……

「こ、こんな力……使ったら人間じゃ無くなるのは確かだ……使
う訳には……」

ずるずると足を進めて上を目指していたが……

風也の目の前に巨大な鎧が3体待ち受けていた……そしてその鎧
は剣を振り上げる……

「万事休すか……」

風也は避ける気力すら無い……剣が当たる直前に……ある声が3つ
聞こえた……

「『夢想封印』!」

「火符『アグニシャイン』」

「気符『星脈弾』!」

風也はその場から時を止めた咲夜に移動させられ、時が動いた直後
に霊夢、パチュリー、美鈴のスペルが鎧3体に直撃する……

「風也、大丈夫かしら?」

「さ、咲夜さん……ゴホッ！ゲホゲホッ！」

風也は口を抑えまた血を吐き出した……

「だ、大丈夫なの！？この吐血は尋常じゃ……」

「だ、大丈夫だ……俺の事は心配するな……」

風也はバランスを崩し地面に倒れた……

「霊夢！風也に肩を貸してあげて！」

「分かったわ……って、アンタ三途の川に落ちても生きてたなんて
凄いわね」

霊夢は風也の肩を担ぎゆっくりと歩き始めた。

「そう簡単に死んでたまるか……」

「風也さん、貴方はゆっくり休んで下さい！ハッ！」

美鈴は妖精メイドの剣を受け流し腹部に拳を叩き込んだ。

「だが……此処に来たって事は皆連戦続きなんじゃ……」

「私達は幻想郷で長く戦ってきたのでこの程度は大丈夫ですよ。」

咲夜もスケルトンを真つ二つにナイフで両断していた……

「今日は喘息の調子も良いからね。私も戦えるわよ」

パチュリィは植物の化物を火で焼き払い塵と化した……

「だが……数が数だ……消耗も酷いはず……」

そして風也は咲夜の真後ろに違和感を感じた……

「咲夜！！後ろだ！！」

風也の声で咲夜は真後ろを向きナイフを投げる……するとナイフはすぐに何かに刺さった……

するとカメレオン以上の擬態で咲夜に近づいていた体の腐ったゾンビが姿を現した……

「全く分からなかった……」

咲夜が驚いた様に頭をナイフで貫かれたゾンビを見ていた……

「ぐっ……」

風也は右眼を手で抑えていた……眼からは流血していたのだ……
……その手を退けると、右眼だけ……右眼だけの眼球が黒く変色していた……その為か視力が急激に上昇していた……

「美鈴！後方75°に蹴りをぶち込め！！」

「え？はいっ！」

美鈴は風也の指示通りの方向に蹴りを放つと何かを蹴る感触を感じた……………

「あ、当たった？」

そして壁にめり込んで居たのは先程と同じ擬態ゾンビが壁に刺さっていた……………

「ゲホゲホツ……………此処から離れた方が良い……………」

「そのようね……………風也、ペースを一気に上げるけど大丈夫かしら？」

肩を担ぐ霊夢が風也に一言声をかける……………

「大丈夫だ。心配……………するな……………」

そして咲夜達はどんどんと上へ向かい城の上層部に繋がる時計塔の頂上に辿り着いた……………

「これは……………西行妖を囲む様に城が建てられてるわね……………」

「ふっ、それは正解というべきかな？」

すると9本の狐の尾を持つ式神と2本の尾を持つ式神が空間から現れた……………

「八雲……………藍……………」

「やっぱり藍が此処に居るといふ事は紫も関わってるって訳ね……………」

霊夢も風也を担いで少し遅く到着した……

「……っ！ら……藍……」

風也も藍と橙が此処に居る事に驚いていた……

「貴方も西行妖の力に体を蝕まれて壊れかけになってる様ね……」

藍は風也の体の現状を一目で見抜く……

「ぐ……」

「風也は休んでなさい……八雲の式神……邪魔するのなら容赦はしないわ……」

咲夜と美鈴と霊夢は橙と藍の前に立つ……

「その言いぶり、絶対負けなれないと言ってる様な物ね」

「違うのかしら？」

「百聞は一戦に如かずってねえ！橙！援護を！」

「はい！藍しゃま！」

藍と橙の体から今までの雰囲気とは違う力が放出された……

「この力……ま、まさか……」

「西行妖の力の残光が僅かにある……手に負えない力だというの」

に……………」

「この力……………力が湧き出てくるようだ！」

藍は巨大な弾幕を撃ちはじめ。それは途中で停止すると破裂し微細な弾が大量に飛び出した……………

「防御しないと不味いわね……………」

霊夢は咲夜と美鈴の目の前に札を投げ壁を作る……………だがその壁を貫き咲夜達に弾が直撃する……………

「威力が……………」

咲夜が弾を食らい地面に墜落する……………

「にやははー！どんどん速くなるよー！！！」

橙は壁や地面を高速で蹴りその度に弾を出し美鈴を苦しめていた……………

「はっ、速い！」

「遅いから悪いんだよっ！」

高速で移動する橙は不意を突き美鈴の腹部に高速タックルを直撃させ美鈴を吹き飛ばした……………

その劣勢を見て風也は無理矢理でも体を起こそうとしていた……………

「う、動け……こんな事で……」

すると左腕を包む魔力と妖力が一瞬弱まった……

すると左腕は異常発達し始め化物の腕と化した……肩部に角の様な骨格が出来上がった……

「がああああ!!」

「えっ!?!」

風也は左腕を橙に向けて突くと腕が伸び橙を捕まえた……そして勢い良く壁に突き刺さる……

ドゴンッ!……

腕は数m並みまで伸びもはや人間の腕とはかけ離れた外見だった……

「はあ……はあ……次だあ!!」

風也は血を吐きながら腕を引き戻す……

「橙!? 貴様っ!!」

藍は怒りに任せ今までと比にならない巨大さと密度の高い弾を撃ち放った……

弾は風也に直撃し、爆風と衝撃波が発生していた……

だが風也は異形変化した左腕で完全に威力を殺していた……

「なっ！？こんな筈じゃ！？」

「隙だらけね……藍！！『夢想封印』！！」

霊夢は藍の隙を狙い0距離で夢想封印を直撃させた……

「ぐっ………」

「さあ……全て知ってる事を話さない」

「ふっ……ふっ……ふっ……」

藍は追い詰められているのに笑っていた……

「またこの戦いで鬨気が西行妖に集まる……貴方のお嬢様もさぞかしお喜びでしょうね……」

「お嬢様が……」

「ちょっと待ってよー！」

するとフランが飛んで来た……

「私はまだ遊んで無いんだよ？ほら……きゅっとして……」

すると藍周辺にフランの力が集まる……

「妹様！お辞め下さい！」

「ふふふ……………もう少し……………もう少しで……………」

そして藍はその場からきえ去った……………橙も気絶している筈だが消えていた……………

「あ、霊夢ー！遊ぼうよー！」

「フラン、遊ぶ事は出来ないけど私達に付いて行けば楽しいかもよ？」

「分かったー！霊夢に着いてくよー！」

「ゴホツ……………楽しいで済めば良いがな……………」

ー体の調子が少し戻った……………？嫌な予感がする……………！

そしてフランを連れ西行妖が一番と近いと思われる場所へと向かう事になった……………

47章 殿と西行妖（前書き）

前回のあらすじ

風也と咲夜達は何とか合流した……だが風也の身体は悪化するばかりで肩を借りないと歩けない程だった……そして異常負荷の眼を使い咲夜達をサポートした……そして西行妖の力を利用していた橙と藍に苦戦を強いられたが腕の覚醒で状況を打開した……

47章 殿と西行妖

「この上」……」

「ああ………これは西行妖の幹だ……」

風也は巨大な木に触れる………そして中に流れる気で判断した。

「風也、その左腕は大丈夫なの？」

「何とか魔力で抑えて人の形を維持してるのが精一杯だ」

風也は賢者の石の魔力を全身に集中させ今の形を保っていた

「さつさと行きましょう。頂上まで後少しよ」

「先鋒は私に任せて下さい。守って見せますから」

そして美鈴を先鋒に固まって歩く………

そして確実に各個が周りをカバーし合い消耗も少なく済んだ………

そして上へ続く高い階段がある大広間へと到着した………そこには
1000体を超える量の敵が待ち受けていたのだ………

「流石にこの量は………」

「階段まで………約300mか………」

風也は階段までの距離を一目で計算していた……

「皆！此処は俺に任せてくれ、俺が殿を務める……… 転移魔法で階段まで飛ばす！俺に構わず進め！」

すると咲夜達の足元に巨大な魔方陣が現れる……

「分かったわ……… 死んじや駄目よ………」

「善処する」

そして風也は転移魔法を発動させ咲夜合わせ6人を階段まで移動させ自分も階段の目の前に移動し階段を塞ぐ……

そしてすぐ6人は階段を上がりはじめた……… それを確認した風也は

「さて……… 此処は通す訳には行かないんでな」

そして指をパチンと鳴らすと階段の前に石壁が立ち塞がる……

そして風也だけで1000を超える敵を相手する事になるのだ……

その頃6人はどんどん階段を上がって行く。すると美鈴が……

「あの数……… 今の風也さんには酷過ぎます！私戻ります！」

「止まりなさい！美鈴！」

戻ろうとした美鈴を咲夜は止めた。

「風也は『此処は任せる』と言ったのよ、信じて私達は進むのよ……」

「ですが咲夜さん！」

「あの人の事よ、何か策があるのよ……」

「……そうよ美鈴……私達は進まなくちゃ行けないわ……」

「分かりました……」

そして美鈴を説得し上へ走り続けた……

その頃……

「体はもつぶつ壊れてるんだ……遠慮無くこれを使わせて貰う……」
『黒符 真』……」

その瞬間……風也の身体からは今までより尋常ではない破壊の闘気が吹き出す……その闘気に触れたスケルトンやゾンビは消滅し消え去った……

『これが……黒符の最終形態……破壊の力の本質がどういう物なのかを教えてやる……！』

あの時の様な全身に黒いオーラを纏っていた……だが今まではオーラだけだった……この姿は黒い軽鎧にマント……そして悪魔の

様な羽根が生えていた……

ガーゴイルは気圧され口から火炎を風也に向け吐いた……だがその火炎はすぐに掻き消されガーゴイル自体まで下からわき出る闘気に消滅させられた……

『体の負荷は考えなくても良いのは最高だ……消し飛べ！！黒符「ブラックスパーク」！』

風也が腕を敵の中心部に向ける……すると魔理沙のマスタースパークよりも強力な黒い極太ビームが放たれ……その射線上に居た全ての敵は無惨にも消し飛んだ……

グラグラ……

その衝撃で城が揺れた……

『これで半分は消し飛んだか……』

さっきの1発で600以上の敵が消滅し大広間の広さに余裕が出来ていた……

『さて、さっさと消すか……』

そして体中の魔力を集中し此処に居る全ての敵を消そうとしていた

……

そして咲夜達は……頂上に到着していた……

「やはり風也の言つとおり西行妖が此処に生えてたのね……………とい
う事は……………」

すると西行寺幽々子とその場に現れた……………

「うふふ……………」

「やはり貴女の仕業ですか、西行寺幽々子……………」

幽々子は不敵に微笑んでいた……………

「満開まであと少し、貴女達も花が開くまでご覧になっていったら
？」

「生憎ですが、お嬢様が待つてらっしゃるので」

咲夜は由々しきの誘いをキツパリ断つた……………

「あらそう、ではせめて桜にお水をあげてくださいな。真っ赤な真
つ赤な、綺麗な水を……………」

幽々子から急に殺気が溢れ出す……………幽々子にも西行妖の力が宿つて
いたのだ……………

「来るわよ！」

幽々子の周りに巨大な魔方陣が出現し、一斉にビームが照射され咲
夜達を襲つた……………

「あはははは！弾幕ごっこは楽しいねえ〜！」

フランは楽しそうに幽々子の弾幕を自分の弾幕で相殺し続けていた

……

「フランは楽しそうで良いわね！」『夢想封印』！」

「金符『メタルファイグ』」

「星気『星脈地転弾』！」

各自スペルを幽々子に撃ち放ちすぐにも決着をつけようとした……だが幽々子は3人のスペルが飛んで来ているにも関わらず微笑んでいた……

「この程度では興醒めね……」『反魂蝶』……」

幽々子は全方位に弾幕を撃つ……すると全員のスペルが掻き消され全員に弾幕が直接するかと思ったその時……

『「黒霧」』

ジュウウウウ……

咲夜達の周りに何故か黒い霧が発生し始めた……だがその霧は弾幕を消滅させ全てを無にした……

『やっぱり幽々子さんが居たんだな……』

声が出た方向を向くと黒符状態の風也が立っていた……

「風也さん……………生きてたのね……………」

『前は加担したが今回は賛成出来なくてな……………危険な西行妖の力を使うのは俺だけで充分だ』

風也の喋り方は怒りがこもっていた……………

「なら……………貴方も敵ね……………」

『そんな余裕で良かったのか？もう遅いかな……………』

「えっ!?!?」

幽々子の体が硬直していた……………動きたくても動けないのだ……………

「これはっ……………一体……………」

『黒霧さ……………微細な粒子が動きを封じている……………終わりだ……………』

メキメキメキ……………ドオン!

幽々子の体からは軋む音が聞こえ急に地面に高速落下した……………

『さあ……………教えて貰おうか……………知ってる事をな』

「くっ……………ふふふ、そろそろかしら?」

「……………?」

咲夜達はこの幽々子の言葉に疑問を持った……

「この血と闘気、そして数多の死霊が西行妖を大きくする。そうすれば……あなたのお嬢様もまともで居られるかしら？」

「なんだと……！」

咲夜は驚くレミリアの身に何かがあったと分かったのだ。すると霊夢が

「咲夜、この先……何か禍々しいものを感じるわ」

「どっぴいっこと……」

「レミリアのに似ている……けどもつと禍々しく、それに……死の匂いにまみれた……まるで幽霊に似た」

「……まさか」

『ああ……霊夢の言う通りだ……俺に似た死の感覚……左腕も反応している……』

風也のこの一言で本当だと咲夜は確信した……

「………！」

「うふふ、もうすぐね、さあ、後は自分の目で確認すると良いわ」

そして幽々子はその場から姿を消した……

「お嬢様……！」

『あの階段から行ける筈だ……早くレミリアの元に急ぐぞ！』

「ええ！」

そして城の最上階へと繋がる階段へと全員走り出した……そう……
……レミリアの居ると思われる階へ………

48章 最上階の死闘（前書き）

前回のあらすじ

藍達を退けた後、7人は固まって上を目指していた……途中の大量の敵を見て風也は殿を決心する……6人を移動させ黒符の最終形態で敵を全て消滅。頂上には西行妖の力を使う幽々子が居た……咲夜達のスペルは簡単に消されたが風也によって早期決着する。そして最上階へと向かった……

48章 最上階の死闘

「此処から行けば……………」

『ああ、レミリアが居る筈だ……………』

咲夜達と風也は最後になる階段を見つめていた……………彼処に……………レミリアが居るのだ……………

『咲夜……………多分レミリアと戦う事になる……………それでも大丈夫なのか?』

「ええ、お嬢様を止めるのが私の役目ですから」

咲夜は戸惑いの無い眼で風也の問いに答える……………

『そうか……………それなら良いんだ。そして俺の身に何があっても振り向くな……………戦いに集中しろ』

風也は冷徹な口調で咲夜に言い放つ……………目を見ると完全に本気であった……………

「分かったわ」

『この戦いで……………西行妖の力同士がぶつかり合えば……………俺はきつと理性を失う……………完全に力に支配されるのがオチだ……………だがこの使命だけは忘れない様にするさ……………「咲夜を守る」事をな……………』

咲夜は守ると言われ少し顔が赤くなっていた……………

『ふっ……照れんなよ。後やるべき事は……』

「れ、霊夢とアリスは此処で待っていて欲しいわ……これは私達の問題よ、ケリは私達がつける」

「分かったわ、そこまで言うのなら無理に付いては行かないわよ」

霊夢とアリスは階段の前で立ち止まり美鈴、咲夜、パチュリー、フラン、風也の5人を見送った……

『良かったのか？』

「ええ、死人は増やしたく無いわ……そしてこの罪を背負うのは私だけで充分よ」

『そうか……俺もこれが終わればレミリアとフランに渡さなきゃならない物があるからな……さて、お喋りしてる暇は無いな……いくぞ！』

そして扉を開け最上階の部屋に辿り着く……

「お嬢様！」

この城の真の玉座にワイングラスを持ちレミリアが座っていた……

「……………」

「お嬢様……？」

(何かが違う……様子もおかしい)

(当たり前前だ……西行妖の力に吞まれてるんだ……)

「咲夜、面白いわね」

「どうしてしまわれたのですか？お嬢様……」

「さあ、闘いましょう、咲夜。面白い事が起こるわ」

「お嬢様！話を聞いて下さい！いたい……」

『咲夜、何を言っても無駄だ』

風也は咲夜を引かせる

「咲夜、言う通りになさい！」

「ですが……」

レミリアはその時……ウィンググラスを投げた……グラスは割れレミリアは咲夜達の目の前に立つ。

「さあ！もっともっと！もっと闘気を高めなさい！闘つてよー！」

レミリアの体からは紅霧異変の比にならない力を湧き出させる。完全に殺す気でいた……

「くっ……！」

『西行妖の力は慣らすのに時間が掛かる……正にあの時の俺だな……』

咲夜はやむ終えずナイフを構えた……風也も全身の力を放出させ臨戦体制を取る……

咲夜はレミリアにナイフを投げそれを牽制に近づこうとした……だがレミリアは既に小型のグングニルを構えて咲夜に向け投げた……

「くっ!?!」

『馬鹿野郎!』

風也は瞬間的に咲夜を護る為に羽根で囲み我が身を盾にし防いだ……

……

『生半可な戦い方をするな!死ぬぞ!』

風也の羽根には小さな穴が空いていた……小型グングニルが羽根を少し貫通していた……

「だけど……」

『ちいつ!「黒霧」!』

レミリアから多数の弾幕が風也達を襲っていた……だが何とか霧で全てを受け切った……

「あの時より力を上げたのね……」

レミリアを爪を風也は腕で力尽くで受け切る……

「お嬢様と互角……いやそれ以上の……」

メキメキメキ……

風也とレミリアの腕から骨の軋む音がした……

『人の性を捨てればこうなる事は分かっているんだよ!!』

風也は腕力だけでレミリアを腕をはじき肘をレミリアにぶつける……

「くっ!! なら……これを受けて見なさい!! グングニル!!」

レミリアは体制を立て直し先程のグングニルとは大きい槍を風也に投げる……

『これが全力か……こりゃ防げないな……』

グングニルは風也に直撃し右腕おろか肩からごっそり胸から消し飛んだ……

ポタポタポタポタ……

風也の肩があつた場所からは大量の血が噴き出す……

『咲夜……今だ!』

「ええ!」

咲夜はレミリアに蹴りを5発腹部に入れそしてナイフを投げ数本刺さる……………

「きゃっ！」

「お嬢様！」

すると八雲紫がスキマを開きこの場に現れた……………

「あらあら、吸血鬼風情には荷が重過ぎたかしら？」

「八雲紫……………貴様！」

咲夜は怒りが抑えられなくなっていた……………

「うふふ、滾ってるわね、でもまだまだよ」

「許さない……………お前は絶対に許さない！」

「いいわ！今度は私が相手になってあげる！」

『ぐううう……………』

風也が失った右部に力を込めていた……………

「さあ！これが避けれるかしら！」

すると紫の周りに数百のスキマが開き全てのスキマからビームが隙間無く撃たれる……………

『避けるまでもないわ!』

風也は羽根をさつきより大きくし完全に咲夜をカバーする。

『美鈴! パチュリー! フラン! サポートは頼むぞ!』

「はいっ!」

美鈴は紫を狙わず気砲をある方向へと撃つ……

「にゃっ!」

そこからは橙が現れた……

「見つかってないと思ったんだけどなあ……」

「私が相手ですよ。咲夜さん達には一步も近づけません!」

美鈴は橙にタイマンを仕掛けた……

「なら……私は……そこに居る式神の相手でもするわ……」

パチュリーが後ろを向くと藍が浮いていた……

「やはり暴露していたようね……」

「当たり前よ……風也と咲夜の邪魔はさせないわ……」

藍は弾幕を撃ち、パチュリーは火球を撃つと弾同士がぶつかり爆発する……

「じゃあ私も暴れて良いんだよね？」

フランは紫に向けレーヴァティンを振りまわす…紫は弾幕を撃ちレ
ーヴァティンを受け止める……

『フラン……下がれ！』

「え？分かった！」

風也の掛け声でフランは紫から離れる………持続的にビームを撃た
れて居る風也には何も出来ない筈だが紫の予想を風也は超えてきた
………

グシュ……ズリュウ……

風也がグングニルに失った腕が蜥蜴の尻尾の様に元通りに生えたの
だ………

その瞬間、風也の回りから破壊の鬨気が吹き出しスキマを全て飲み
込んだ………

『これで攻撃が止んだな………』

その頃の美鈴は………

「体が軽い………これがあの人の妖力なんですな………」

美鈴は完全に実力で橙を圧倒していたのだ………橙の動きを先読み

し全てをかわしていた……

「何でこんなに強くなってるの!?!」

「トドメだあ! 華符『彩光蓮華掌』!」

美鈴は橙に拳を一つ撃ち込む……すると橙に拳を撃ち込んだ場所から美鈴の気が溢れ大爆発を起こした……

「橙!! くそお!!」

「美鈴も生き生きと動くわね……私も調子が良いけれどね」

パチュリーは自分の魔力に似合わない量の魔法を多数連続で詠唱し藍を弾幕戦で圧倒する……パチュリーの魔力が激増していた……

「さつさと決着を付けるわ……日付『ロイヤルフレア』」

パチュリーが片腕を上げると光球が生まれ、その光球は異常な閃光を発し藍を襲った……

「ぐあ!」

そして……橙と藍は完全に戦闘不可の状態となった……

『美鈴もパチュリーの方が終わったか……妖力と魔力を分けておいて正解だったな……』

そしてこの場には、紫とレミリアしか残らなくなった……

そして優勢だと思われるこの状況、風也は全く油断はしていなかった……

そう……レミリアが……まだレミリアが残っているからだ……
そしてこの異変の最終決戦が始まる……本当の殺し合いが……

49章 妖幻の鎮魂歌（前書き）

前回のあらすじ

長い紅魔城内での異変がもうじき終わる……レミリア、そして紫
達を退けた……だが紫にはまだ最終手段が残っていた。そう……
…あの力だ……禁断の力を……

49章 妖幻の鎮魂歌

「っと、そろそろかしら……」

「まだまだ！降りてこい！」

「これからまた貴女のお嬢様が相手になってくださるそうよ。」

「お嬢様………？」

咲夜はレミリアの方を見る………何か苦しそうであった………

「ウウ……ぐっ……」

レミリアは空に浮き、苦しみ始めた………レミリアの体の中に膨大な花びらの妖力が入り込んで行く………

『あれはマズい！！あの量の妖力はレミリアが耐えれん！』

「お嬢様！」

風也は力尽くでレミリアを止めようと飛び出した………だが妖力の結界に阻まれ吹き飛ばされる………

『くそっ！』

「そろそろ………生と死の境界が交わる頃、西行妖に集まった闘気がレミリアに集まるわ」

するとレミリアの体から魔方陣が現れ異形の物体がレミリアの周りに現れる……………横には巨大な手まで存在していた……………

【ぐっ……………！こ、これが生きながら死を操る力か……………】

「お嬢様、おやめください！」

【くうっ……………ははっ、あはははははっ！】

「お嬢……………さま？」

ポンツ……………フルフル……………

風也は咲夜の肩を叩き首を横に振る……………風也は目で語っていた……………
「話しても無駄だと」……………

レミリアは高笑いをはじめ、咲夜は黙ってしまった……………

【なんて素敵な力なの！？】

「ついに完成したわ！あなたたちにこれが止められて？」

「お姉さま！素敵……………殺したいくらいっ！！」

「レミィもフランも楽しそうだし……………しばらく放っておいたら？」

「楽しそうなレミリアとフランを見てパチュリーはサラッと言う……………

「そっ、そんな事言わないでください！早くどうにかしないと……………」

「……………」

『……………』

【咲夜……………風也……………】

「やるしかない、ということですか……………」

『ああ……………』

【かかってきなさい！二人共！】

「わかりました、お嬢様……………踊りましょう！この命尽きるまで！」

『……………』

その瞬間レミリアを囲む化物からはレミリアの弾幕が射出され始めた……………」

風也は一発ワザと小さな弾幕に当たると腕が衝撃で痺れる……………」

『くっ！咲夜！この弾には当たるな！外見以上の威力を持ってやがる！』

「ええ！」

咲夜は巨大な腕に接近しナイフを突き刺すがビクともせず咲夜を吹き飛ばす。

「ぐっ……」

『咲夜！早く避ける！』

「え？」

ドドドドドド……ガキーン……

既にグングニルの変異形が周りに突き刺さる………咲夜に当たる直線上にあったグングニルは風也の腕払いにより軌道を僅かにずらしていた……

『くそっ！何て威力だ！』

するとレミリアの体からは異常な妖力が漏れ出した………

それに反射したかのように風也の眼球は黒く変色した………人外の視力で安全地帯を割り出した………だが人一人分しか空いていない………

【グングニル！！】

「危ない！」

咲夜は変異形のグングニルにナイフをぶつけて相殺しようとしたがナイフは塵と化す………

「なっ！？」

『馬鹿野郎おおお……！』

「がっ……………」

風也は咲夜を回し蹴りで壁に蹴り飛ばし羽を畳み防御姿勢を取った

……………」

ザシュツ……………ポタポタポタポタ……………」

「ふ、風也！何を……………っ!？」

『はあ……………はあ……………』

蹴り飛ばされた咲夜は風也の方を見ると身体中にグングニルが刺さっていた……………」

そして自分のまわりに気づく……………全くグングニルが刺さっていない……………風也は間一髪で咲夜を安全地帯へ蹴り飛ばしたのだ……………」

『うぼっ……………』

風也の心臓部分、肺部分にグングニルが刺さって内臓はぐしゃぐしゃになっているのは明白だったのだ……………」

そして巨大な手は風也を掴み握る……………」

【もう終わりね……………】

メキメキメキメキ……………ボキッ……………」

『がっ……………!』

手に籠る力が強くなり風也の体には軋み音と骨が折れる音が聞こえた……

『レ……レミリア……どうなっても知らんぞ……ぐっ！』

ベキベキベギ……グシャア！

そして巨大な手は風也を握り潰し大量の血液が溢れ落ちる……

「風也ー！」

そして巨大な手は潰した風也を
地面に勢い良く捨て投げる……

ドシャ……ツツツ……

風也の体には生気が完全になくなり体からは大量の血が出て血溜まりを作る……

「嫌あああああー！」

咲夜は風也の末路を見てしまいレミリアを見て涙を流す……

「お嬢様でも……これはお嬢様でも許さない！」

咲夜からは悲しみ……そして恨みの炎が感じられた……

そして風也の精神の中……

「最後の決断だな……」

『俺の力だけでは到底敵わない相手だ……力の格が違い過ぎる……』

歪んだ空間に見えるのは……風也の姿、黒符の姿、そして花びらの闘気を纏う着物を来た人型が居た……

【お主は後悔は無いのか？】

『こいつの力を使えば……あのレミリアより強大な力を得られる……だが使えばお前は人では無くなるぞ』

「もう人として充分生きたさ……といっても人として生きたのはたった20年だが……」

【お主にはまだ人として生きる定めがある筈じゃ……お主はその選択肢を無に帰すのか……】

『そうだ……前にも言ったよな？俺はお前、お前は俺だと……お前の事は良く知ってる……お前には大事な人がいる筈だ』

「その大事な人を守る為に人を捨てると言っても止める気か？」

『……………』

【分かった……妾は止めない……この力はいずれ制御出来なくなりこの幻想郷を破滅に導く……それでも良いというのかの？】

「……………」

『お前の能力は確実にこれを機に変わるぞ……………』

【西行寺幽々子の様に……………なあと、彼奴の事は良く知っておるわ、長い付き合いだからのう……………だが知っているからこそ同じ道を歩んで欲しくないのじゃ】

「……………分かった……………それでも良い……………力を……………力を寄越せ！」

【拒まないと言うのなら我が力、お主に預けよう！】

そして人型と黒符は無形状になり風也の体に吸い込まれる……………

そして歪んだ空間に亀裂が入る……………そして……………

現時間……………

「はあ……………はあ……………」

咲夜の頭からは流血していた……………しかもフラン、パチュリー、美鈴は完全に戦えなくなっていた……………レミリアに全員やられていた……………

「う……………さ、咲夜さん……………逃げて……………」

美鈴は血だらけの腕を震えさせながら上げる……………

「あなた達を置いて逃げれる訳ないでしょう！」

「やはり……………私達じゃお嬢様には敵わない……………これまでか……………」

…」

そして巨大な手は咲夜にトドメを刺すかの様に大きく浮かぶ……
そして勢い良く振り下ろされ咲夜を潰す……

だが……咲夜にその手は届かなかった……何かに遮られ咲夜まで
届かない……そこには……桜の花びらが舞い散る……

「さ……桜？」

【よお……黄泉の国から戻ってきたぜ……】

そこには無傷の姿の風也が立っていた……桜の鬨気を纏って……

「ふ……風也？死んだんじゃ……」

【ああ……俺は死んださ……だか今此処に居る……大丈夫さ】

風也は咲夜の肩を担ぎ立たせる。

【良く分かったぜ……西行妖に逆らうから理性を失う……完全に受け入れれば強大な力を得る事も出来る……】

【何度生き帰ろうが私の方が力は上よ！】

レミリアは腕を操作し風也を潰そうと掛かる……その腕は無惨にも消し飛んだ……

【なっ！？】

【俺は人を捨てた……もうお前じゃ無理だ……】

巨大な手を片手で受け止める……そして風也の体から手に力が流れ始め全体に浸透する……

その直後、レミリアのまわりにあった化物は全て動きが止まり砕け始める……そしてレミリアを囲む魔方陣も消滅した……

そしてレミリアは膝を撞く……

「まさか……まさかこの私が……」

「お嬢様、普段のお嬢様なら、私達が敵う訳がありません」

「……」

「余計な力など、お嬢様はお嬢様のままであるのが一番です」

咲夜の目には涙が溜まっていた……

「咲夜……」

「さあ、館に帰りましょう……紅魔館へ……」

「ええ……風也……咲夜……本当にごめんなさい……」

風也は咲夜をレミリアの元に連れて行き咲夜とレミリアは共に涙を流していた……

そしてこの異変は決着した……

「で、結局何が目的だったのかしら？」

そして皆で紅魔城の庭で宴会を開いていた……

「まあまあ、満開とはいかないけど、こんなに綺麗な桜が拝めて、しかもおいしいお酒まで飲めるんだからそれで良いじゃない」

「そうですよ、何が不満だって言うんですか？」

紫と藍は当然の如く言い放つ

「良くないわよ！どれだけ迷惑してると思ってるの？」

「とか言いながら結構楽しんでたじゃない？城主さま」

「まあ、そうなんだけど」

霊夢は料理を食べながら肯定していた。

「で、何故このような異変を起こしたのかしら？」

咲夜は紫達に厳しい声で聞く。

「咲夜、それ以上追求してはダメよ、せっかくの料理がまずくなるわ」

「ですが！」

「咲夜」

「はい……お嬢様がそう仰るのであれば」

レミリアに言われ咲夜は問うのをやめた……

「レミリア、ちょっと良いか？ フランにも用があるんだ。」

風也はレミリアとフランを連れ、皆と離れた場所に移動する。

「私達に何かしら？」

「何かなー？」

「レミリア達に渡したい物があるのさ……ちょっと額借りるぞ……」

「まあ良いわ。ほら」

レミリアとフランは前髪を手で上げ額を出す。そこに風也は手を当てる……

「ちょっと脳に負荷が掛かるぞ」

すると2人の額に当てた手が光り始める……

「「っ！？」」

二人の脳には過去の真実の記憶が流れ込む……風也があの時助けた記憶が……

そして記憶を渡し終えた……

「フラン……先に美鈴と遊んでなさい」

「はい」

そしてフランは先に宴の場所へ戻って行った。

「……まさか……昔に私達を助けたのが風也だったの……？」

レミリアは啞然としていた……渡された真実に戸惑うしかなかった……

「ああ……これで記憶をやっと渡せた……じゃあ俺は此処から去るよ……」

そして風也は紅魔城から離れる様に歩き始める……それをレミリアは呼び止める……

「風也ー！……また……紅魔館に来てくれる？」

「ああ……きつとな……」

それを聞き安心したレミリアは宴に戻り、風也は紅魔城を後にした

……

「さて、行くあても無いし何処を彷徨うかね……」

そして人間を……黒符の力を捨てた風也は何処かへ歩いて行った……

50章 命蓮寺、義姉弟の契り（前書き）

前回のあらすじ

風也と咲夜は西行妖の力を使うレミリアを遂に倒し咲夜達は花見、そして風也はレミリアとフランに記憶を返し紅魔城を後にした……
……だがもう人間ではなくなっていた……力と人間である事を代償に……

50章 命蓮寺、義姉弟の契り

そして風也は歩いて彷徨っていた……

「といつても、行く所無いしな……ん？何だこれ？」

風也は歩いていると四角い物を見かけ拾ってみる……球体に笠の様な飾り……初めて見る物だ……

「見かけ的に……寺か神社の物か？近くに建ってるのかもな……」

とりあえず風也は気配を察知しながら歩く……数分歩くと2人組が見え風也は咄嗟に木の上にジャンプし隠れる……

「はぁ……ご主人は何回宝塔を無くせば気が済むんだい？」

「うう……すみません……ナズーに迷惑をかけてしまって……」

そこにはダウジングで物を探す2人組が居た……風也はさっき拾った物を探してるのだと分かり木を降りた

「おい！」

風也の声に2人は振り返った。

「探してるのはコレか？」

風也の手には宝塔があった……それに1人は反応する。

「それは私の宝塔!！」

「草の中に落ちてたんでな、拾ったんだ」

そして風也は宝塔を1人に投げる。

「本当にすまないね、宝塔を見つけてくれて……………」

「本当にありがとうございます!お礼に命蓮寺にでも来てください」

2人は頭を下げてお礼を言ってきた。

「命蓮寺?やっぱこの近くに寺があつたんだな……………」

「此処は人があまり来ない地域なんですよ。良ければついて来て下さい」

そして2人に連れられ命蓮寺に辿り着いた……………」

「ぎゃーてー!ぎゃーてー!ぜ〜む〜とーどーしゅー!」

寺の庭では小さな女の子が箒で楽しくお経を詠みながら掃除をしていた。

「あの子も妖怪か……………楽しそうだ」

そして寺の中へ入る……………」

「へろへろば〜」

寺の中に入った瞬間、傘を持った女の子が脅かしてきたが風也は驚かず冷静に避けた。

「ううう……驚かれなかったorz」

「気配でバレバレだったしな……」

傘の娘は膝をつき凹んでいたが風也は星に連れられ奥の部屋に着く。

「聖、お客さん来ましたよ」

「あら、お客さんは珍しいですね。命蓮寺にいらっしやいませ」

そこには周りとは雰囲気が違う女性が居た……

「そういえば自己紹介してなかったな……風也だ」

「私は此処の責任者の聖白蓮と申します。」

風也と聖は握手を交わしすぐ打ち解けた。

「あつ、私も自己紹介忘れてましたね、虎丸星と言います。毘沙門天の代理をしています。」

「なるほど、さっきの宝塔ってやつは毘沙門天の物なのか……」

風也は握手しながら察した。星は凶星を当てられて焦っていた。そしてナズーリンとも握手を交わした。

「そういえば、貴方は妖怪を恐れてませんね。ただの人間ではなさそうですね……」

「人間……か……もう人間じゃないさ……」

聖達はその言葉に仰天していた……

「に、人間じゃない？」

「ああ、元人間と言うべきだな。今じゃ人間の皮を被った妖怪さ。証拠を見せてやるよ」

そして星は風也に頼まれ攻撃役を頼まれた……風也は『全力で攻撃しろ』と……

「後悔しても知りませんよ……火力制御出来ませんし……」

そして星は宝塔を構える、すると……エネルギーが凝縮され風也に高密度のレーザーが射出される……

パンツ！

そのレーザーは風也まで届かず無力化されていた……周りには桜の花びらが舞う……

「え………け、消された？」

【だから言ったる、人間じゃないと】

「風也さん、少しお話を宜しいでしょうか？」

「ああ……………何だ？」

風也は力を抑え通常に戻った……………そして厳肅な空気であった……………
… 聖が口を開く。

「まさかとは思いますが……………その力を得て人間ではなくなったのですか？」

「ああ、その通りさ。馬鹿らしい話だろ？ 守る為の力の代償だ。」

「いえ、笑えませんよ。暗い話は辞めにして、此処でゆっくりして行ってください。」

「ああ、ありがとう。後すまんが風呂良いか？ ちょっと汗かいてるからな」

「お風呂場は彼方の廊下の奥にありますよ。後で此処の皆を紹介しますね。」

そして星、聖、ナズーリンと知り合った……………

……………
（ ）（そっぴやあの傘の娘と掃除の娘の名前聞いとけば良かったな……………）

聖に教えてもらった廊下を歩きながら風也は頭の中で思っていた。

「……………あ……………村沙が後で入るとか言ってたの忘れてたかな……………」

聖は部屋の掃除をしながらやってしまった感に襲われていた……

その頃の風也……

「風呂場広いな……まるで大浴場だ……」

浴場に入ってリラックスしていた……

「はぁ………久しぶりに休息を取れた気がするな………良い湯だ……

風也はお湯に浸かり体を休めていた………すると扉が開く………そこには前を隠した村沙の姿が………

「………（ぽーかん）」

「………（ぽかーん）」

「っ！！（ポタポタポタポタ……）」

人間では無くなっても女性耐性が治らない風也であった………人体の構造は人間と同じ為、当然の結果である。

「わわわっ！だ、大丈夫かい！？」

なんとかお湯は血に染まらなかつたが案の定床に血だまりが出来た。鼻血の血だまりが………

「\$¥。 × ??#% ¥ !?」

風也は錯乱して言葉がおかしくなっていた。そして血液不足と風呂

でのぼせて意識が朦朧になっていた……

「とっ、とりあえず湯船から出さなきゃヤバいな」

村沙はとりあえず風也を湯からあげる……その時……

むにゅう……

風也の腕に村沙の胸が当たり……風也は気絶した……

作者【こいつの女性耐性は弱いままにしとくか（フヒヒ）】

そして数時間経って気絶から復活した。

「ハッ！気絶してたのか……」

「あ、目を覚ましたかい？さっきはごめんよー」

風也が目を覚ますと自分の服が和服になっていた……看病に船長服の村沙が近くに座っていた。

「ああ……大丈夫……単に俺が弱いだけだし……」

「さて、起きたばかりで悪いけど君の歓迎会をやるうと思ってね。ついて来てよ」

そして村沙に腕を引つ張られ広い客間に連れてかれた。

「」「」ようこそ命蓮寺へー！」「」

そこには聖、星、ナズーリン、傘の娘、掃除の娘、僧の様な女性、2色の羽が生えた女の子が集まっていた。

「さあさあ！此処に座った座った！」

そして村沙に座らされ歓迎会という飲み合いが始まった……………

その飲み会で「幽谷響子」「封獣ぬえ」「多々良小傘」「雲居一輪」「村沙水蜜」の紹介を受けとりあえず飲み合った……………そして酒で潰れたのは大半だった……………

「こんな事も久しぶりだな……………夜空が綺麗だな……………」

風也はそんなに酒を飲まず顔が紅潮している程度に酔っていた。

「あら？風也さんまだ寝ていなかったのですか？」

「ああ、酒が回り過ぎてね……………あはは……………」

風也の横に聖が座る……………

「風也さんを最初見た時本当にビックリしましたよ。」

「何でだ？」

「昔に生きてた弟に似てましたので……………」

「弟……………その弟さんは？」

聖は悲しそうな顔をして答えた……………

「弟は病気を患っていて……………その病気で若く死んでしまったのです……………」

「それは……………聞いてすまなかった……………」

「いえ、謝らなくても良いですよ。弟が帰ってきたみたいで私は嬉しかったですし。」

風也は考えた……………聖の笑顔に少し無理があると感じたからだ。

「ふむ……………だったら義姉弟の縁にでもなるのはどうだい？あ、嫌だったらスルーで」

「いえ、嬉しいですよ。こんな私で良ければ」

「ああ、聖さん、これから宜しくな」

「ええ」

そして風也と聖は義姉弟の縁を繋ぐ事にした……………

「さて、俺は壁に寄りかかって寝るよ」

「布団用意してあるのでそちらでどうぞ」

「ああ、ありがとな」

こうして聖も自室に戻り風也も布団に潜り寝始めた……………

「明日……嫌な予感がする……」

そして酒が回っていたからかすぐ眠った……

風也は寝る直前、明日不吉な予感をしたのは気のせいだと思っ
たが……それが本当に起こる事になる……

51章 壊れる日常、夜の向日葵（前書き）

前回のあらすじ

命蓮寺では聖達と知り合い、村沙とある意味なトラブルもあったが妖怪の皆には歓迎された。そして聖とは義姉弟の契りを交わし命蓮寺に住み、数日が経った………

51章 壊れる日常、夜の向日葵

「うづう…………orz」

「驚かせるコツか……………さっきのは怖いと言っより可愛いと思われんからなあ……………」

風也は小傘と驚かせる練習をしていた。というか小傘が全然驚かれない現状を打開したかったようだ。

「小傘には殺気は無いし……………俺が殺気を放つと大体は気絶するからなあ……………」

「私、驚かして生きる妖怪なのにこんなんじゃ……………」

小傘は落ち込んでいて中々立ち直れない様だった。

「ん……………錯覚させれば行けるかも……………」

風也は何かを思いついた。そしてそれを小傘に提案する。

「とりあえず脅かす人間の視覚と聴覚を俺が操作してみるから小傘が脅かしてみたらどうだ？」

「うん……………それでやってみるよ……………」

そういう訳で人間を脅かす事になった……………風也は人外になってから能力がどんどん増え始めていた……………

「さて……………丁度あの人間が良さそうだ……………」

すると風也は精神を研ぎ澄ませ近くの人間の視覚と聴覚を錯覚させ始めた……………」

「……………こんな感じか……………小傘……………GO！」

「……………（コクコク）」

そして小傘がその人間の真後ろから気づかれない様に近づき驚かす……………」

「べろべろば〜！」

一見全く怖くない小傘だが風也によって視覚と聴覚を狂わされた人間の目にはとんでもない化物にしか見えなかった……………」

「ひっ！ひいひいひい！！ば、化物やああああ！！！」

そして人間は小傘に驚き震え慌てて走って逃げ始めた。そして風也は指を鳴らし人間の感覚を元に戻しておいた……………」

「これで満足か？小傘」

「うん！驚きの感情が美味しかった！」

小傘は嬉しそうな顔をしてよろこんでいた。

「さて……………次は響子ちゃんと掃除か……………今日の予定多いな……………」

そして小傘と共に命蓮寺に戻り倉庫から箒を取り出し響子と命蓮寺の敷地の掃除を始めた。

「掃除楽しいな〜 ぎゃーてーぎゃーてー」

響子は毎日楽しそうにお経を唱えながら掃除をしている。風也にはお経は理解出来ない様だったが……

「本当に掃除が生き甲斐って感じだな。生き甲斐があるって羨ましいかもな……」

そうして数時間掃除を続け葉っぱやゴミを集め終わった……

「ふう、終わったか……ん？……体がざわつく……何だ……」

風也と響子は掃除を終わらせ箒を響子に預け、先に寺に戻させた……嫌な予感がしたからだ。

「くそっ……此処なら平和だと思ったのに追手か……」

風也が感じていた気配は……地霊殿の頃にも、紅魔城の頃にも感じた嫌な気配だった……

嫌な気配をする方向を向いていると正気の失った人間達が十数人此方に近づいていた……

「しかも人間を操ってるのか……神経麻痺させるのが最適か……」

風也の腕は電流を帯び始める。だが焦げる程の電流ではなく麻痺程

度の電流であった……

「何やってるの？」

すると横には何時の間にかぬえが立っていた。

「俺の追手さ……ぬえはどうしたんだ？」

「んー、私も変な感じがしたから来てみたの。」

ぬえも風也同様、何かを感知し来た様だ。

「ぬえ、あの人間達を傷つけず気を失わせる事出来るか？」

「任せて……」

「俺は原因を探す、此処は頼む！」

風也は人間達を限界まで引き付け飛び越えた。そして力の残痕を追う……そこには黒装束が一人居た……

「貴様、何者だ……」

『我は破滅を呼び掛ける者……伝える事が我が存在理由……』

「何時も俺を監視してたのはお前か……」

『左様、もうすぐこの世界に滅びが訪れる……貴様は止める事も防ぐ事も叶わぬ……』

黒装束は淡々と口を開き風也の問いにも返答をしていた……人としては不気味な気配な黒装束だ……

『時が経てば分かる事……その時が来れば……この世界（幻想郷）は破滅と恐怖に包まれるであろう……』

すると黒装束は靄の様に歪みその場から消え失せた……

「……………どういう事なんだ」

風也は黒装束の言った事に疑問しか浮かばなかった。止める事も防ぐ事も出来ない滅びとは……一体何だと言っのだろうか……

その頃のぬえ……

「風也遅いなー……………」

人間達を全員気を失わせUFOのような浮遊物体に乗り待っていた……

そして夜……………風也はこの時あった事を全て聖に伝えた……

「……という訳で俺が此処に居ると皆に危険が生じる事が分かった……………俺は此処を離れようと思う」

「そんな事が……………」

「ああ、奴が言うには止められない滅びが幻想郷で起こるらしい……………だから手立てを探す為にな……………」

「分かりました。ですがちゃんと戻って来て下さいね。貴方は大事な私の弟なんですから」

すると聖は風也の頬にキスをする……………

「っ！！！！／／／／」

「本当に照れ屋さんですね。何時までも待ってますよ。」

「あ、ああ。絶対戻るさ、またな」

そうして真夜中に命蓮寺を離れ手立てを探す為に何処かへと向かった……………

数時間後の花畑……………

「今日は良い星空ね……………花達も嬉しそうだね」

「幽香さんは花達を本当に大事に思ってますよね」

花畑には傘を持った女性、頭に触角のある子供が居た…………… 風見
幽香とリグル・ナイトバグである。

「当たり前よ……………喧嘩を売ってるのかしら？」

「ひいひい！！滅相もございません！！」

幽香に傘の先端を向けられリグルは怯える……………

「全く……そこに居るのは誰かしら？」

幽香が木の影に居る気配を察知し呼びかけた……

「待て、怪しい者じゃない。とりあえずその傘を下ろしてくれ」

木の影から出てきたのは風也だった。

「貴方、人間かしら？」

「元人間の妖怪だ。頼む、その物騒な傘を下げてください」

「まあ良いわ。」

すると幽香は傘を風也に向けるのを辞める。

「その妖怪さんが私に何の用なの？」

「聞きたい事がある……此処に来る前に妖怪を脅して聞いたんだが大妖怪なんだってな？ 幻想郷の事が聞きたい……」

「幻想郷の事を？」

幽香は風也の話を書く事にした……そして風也の話をもっと聞く

……

「幻想郷の危機は一度しか起きてないわね……結界が壊されそうになった頃かしら……その時以外は異変を除いて平和よ」

「となると、俺が聞いた事は可能性があると?」

「可能性は高いわ、だけど止められない滅びつてのは引かかるわね」

「?????」

風也と幽香は話を続ける。リグルは話が難し過ぎて理解出来ていなかった。

「話して貰ってありがとうな。じゃあ俺はこれで……………」

風也は立ち上がり花畑を離れようとする……………すると幽香を立つ。

「貴方の名前を聞いてなかったわね。名前は?」

「名前か……………風也」

「風也ね、私は幽香よ。後、暇な時に昼頃此処に来なさい……………夜より見栄えは良いわ」

「ああ、分かった」

そして幽香とリグルと別れ、森の木に寄りかかり野宿をして夜を越した……………

黒装束の言った予言……………この予言は必ず起こる事だと風也達は分かつてはいなかった。恐らく……………この予言の異変こそが最悪の異変となる……………

52章 最後の平和……告白（前書き）

前回のあらすじ

風也は命蓮寺で平和に日常を過ごしていたがその平和はすぐ無くなつた……そして黒装束の言葉に一番の疑問を持つ。その後幽香に話を聞き、ある建物に戻る事にした。そう……紅魔館だ。

52章 最後の平和……告白

「久しぶりに戻って来たな……レミリアにも言われたからな」

風也は紅魔館の門の前に立っていた。相変わらず美鈴は門の前で爆睡していた。

「はあ………またサボってるのか………美鈴起きろ〜！」

そして風也は美鈴の目の前でしゃがみ寝てる美鈴の頬を抓る……

ムニニニニツ

「痛っ！いたたたたた！頬が痛い!？」

美鈴は風也に頬をつねられ痛さで悶絶していた。

「やっと起きたか」

「痛った〜……あ、風也さん!」

美鈴は頬を抑えながら涙目になっていてすぐ門を開けた……

「お嬢様や咲夜さんが待ってますよ。どうぞ」

「ああ………サボって咲夜さんに殺されない様にな」

そして門は閉まり風也は紅魔館の中に入る………そこには咲夜とレミリアが待っていた……

「良く来たわね」

「お待ちしておりました」

「久しぶりだな……2人とも」

そうして風也は一端の紅魔館の住人と言っても良い程の馴染みであった……平和にレミリアや咲夜と話しをしたりと楽しく過ごしていた……そして数日が経った昼、風也は咲夜と共に人里に買い出しをしていた。

「結構買ったな……俺が全部持とうか？」

「大丈夫、そんなに重くは無いわ」

「無理すんなって。よいしょっと」

そして風也は咲夜から買った物を取り風也一人で大荷物を持って紅魔館に歩いていった。

「女性に荷物を持たせるのは性に合わないからな。この位なら俺一人で持つよ」

「ありがとう……」

風也は紅魔館に住んでから咲夜と良く一緒に居る事が多かった。徐々に風也は咲夜に好意を持ち、咲夜も風也に好意を持ち始めていた。

そしてある日、レミリアがこう告げた……

「あなた達、本当に仲良くなったわね。一晩一緒に同じ部屋で過ごしてみたらどうかしら？咲夜には明日1日休暇をあげるわ」

レミリアは微笑みながら2人に言い放った……………その瞬間に風也と咲夜は赤面した……………

「っ!?!?」

「っ／／／／／」

「私が気づかないとでも思ったのかしら？あなた達が好き合ってる事くらいバレバレよ」

流石レミリアと言った所か、完全に見破っていた。後に本人から聞いたのだが能力は使って無い……………

メイド達はこの時一層真面目に働いていた……………レミリアが咲夜に1日の休暇を与えたからだ。そうして風也と咲夜は外に二人で出かける事にした……………

「良い景色だな……………」

「ええ……………」

風也と咲夜は妖怪の山の山頂近くの眺めの良い場所で絶景な景色を見ていた……………

「結構恥ずかしいんだが……………俺、咲夜の事好きだしな……………／／／」

風也は顔を赤くしながらボソツと呟く……

「ふふつ、ありがとう。私もよ」

そして咲夜は風也にキスをした……

「んっ／＼／＼」

「もうお嬢様にもバレてるのだから恥ずかしがらなくても良いんじゃない？」

「まあ………咲夜さんがそう言うのなら………」

「後、『さん』は要らないわよ。普通に『咲夜』って呼んで

咲夜は風也の口に指を当て注意をした………

「わ、わかったよ………さ、咲夜………」

「今夜………貴方の所に良いかしら？」

「え………？」

風也は呆然としていた………というか数秒頭の思考が止まった………

「ああ、わ、分かった」

「それじゃ紅魔館に帰りましょ、お嬢様も待っているし」

「あ、ああ………」

そうして2人は紅魔館に戻り咲夜は休暇の筈だが業務に戻り仕事をしていた。風也はレミリアと話をしていた……

「なあ……レミリア、何時分かつんだ？」

「そうね……貴方が暮らし続けて数日立ってから分かり始めたわ。だって良く一緒に居るのだから」

「なるほどな……流石吸血鬼だな、長く生きてる事はあるな」

「貴方も実質不老不死に近い存在じゃないかしら？何故か貴方の運命が見えないのよ」

「そうか……じゃあ俺は休むから……おやすみレミリア」

風也は椅子から立ち上がりレミリアに挨拶を告げる……そしてレミリアも言い返す……

「おやすみなさい……」

そして風也はすぐ自室に戻らず廊下で心臓部分を抑えて苦しんでいた……

「ぐっ……っはあ！はあ……はあ……」

風也は苦しいのから解放されゆっくり深呼吸をしていた……

（（不死なのは良いが……何時暴走してもおかしくない……平和な一時を過ごせれば良いがな……））

そして風也は自室に戻りベッドに横になっていた……
するとドアがノックされる……

「風也？居るかしら？」

「ああ……居るよ」

そして咲夜がドアを開け、そしてベッドに座る……

「さっき苦しそうだったけど、大丈夫なの？」

「大丈夫だ、ただの発作だ」

風也は嘘をついた……発作では無く力の暴走の手前の症状だと言っ
のを明かさなかった……心配させたくないからだ。

「そう……だけど無理はしないで」

「ああ……」

そして風也は咲夜を押し倒し……

「女性免疫ない俺だけど良いのか？」

「貴方なら良いわよ」

| (i |
 | / ソ ノ 、
 (— > < —)
 (〇 人) (王 —)
 / () () ヲ見せられ —
 / — ないよ! —
 / — [—
 / / / / <
 、 / / / /)
 () () () ()

そして真夜中……風也がゆっくりと起床始めた……その目には
 正気が無かった……

そして紅魔館の玄関を開け、外に出る……すると3つの黒い光が
 手から出る……その黒い光は3方向に別れ消えていった……

風也は寝ていた場所に戻り咲夜を起こさない様にまた寝始めた……

……夜明け前……

風也が起き、コートを着始め、何か手紙を咲夜の横に置いた……
 そして誰も起きていない紅魔館から風也だけが出て……その後消
 息を絶った……手紙を一通だけ残して……

53章 3つの狂い（前書き）

前回のあらすじ

遂に風也は自分の気持ちに正直に言う事が出来た……………だけでも力を抑える事が出来なくなってきた。そして謎の黒い3つの光、風也の消息は途絶えた。その光を行き着く先は……………

53章 3つの狂い

.....白玉楼.....

「うわ……………倉庫が埃だらけ……………此処も掃除しないと……………」

妖夢は白玉楼にある物置を掃除していた……………丁寧に掃除し仕事を黙々と進めていた……………

「ん？これは……………」

物置の奥に刀が1本置かれていた……………妖夢はそれを手に取り鞘を抜く……………その刃は血より真っ赤な刃であった……………

「っ!？」

その瞬間刀からドス黒い妖力が溢れ妖夢を包み始めた！

「これは……………ぐっ……………あああああ!!!」

そして妖夢は黒い妖力に完全に取り込まれた……………

その頃のお茶の間……………

「妖夢ったら掃除から戻って来ないわね……………」

幽々子は饅頭とお茶でゆっくり過ごしていた……………その時に幽々子目掛け黒い斬撃が飛んで来たのだ。

「っ!!」

幽々子は扇子を取り出し斬撃を相殺する……

「戻って来ない理由がこれだったのね……物置で封印してあった刀……妖力『村正』……」

そこには服が黒く染まり妖刀を片手に持つ妖夢の姿があった……

『切ル……血ヲ……寄越セ……』

妖夢の口からは正氣の言葉は存在感せず妖刀の妖力に完全に精神を喰われていた……

(村正はあんなに強い筈が無い……妖夢でも扱えた筈……可能性的には誰かが妖刀の力を増幅したのか……)

「やるしかないようね……」

幽々子も真剣な顔つきになり扇子を2つ構える。

(最悪、妖忌の残した刀を使う事になるわね……)

そして妖刀に精神を喰われた妖夢と幽々子は戦い始めた……

……妖怪の山……

ある場所に天狗たちが総動員で集まっていた……そして大天狗と
思われる長が口を開いた……

「皆に告げる。先刻の朝方に妖刀『犬走』が何者かに持ち出された
……その者は……哨戒天狗の『犬走椀』だ。」

それを聞き哨戒天狗達はざわめき始める……

あの椀さんが……

嘘でしょ……？

「静まれ！！全哨戒天狗に告げる。即刻に犬走椀を発見し妖刀『犬
走』を奪い返すのだ。妖刀の力は危険だ……敵わないと分かったら
上位天狗も出動させる。散っ！！」

「ハッ！！」

その瞬間に哨戒天狗達は各地に散り張り妖怪の山の搜索を開始した

……

「私はどうしますか？大天狗様……」

哨戒天狗が散った後影から文が出て来た。

「射命丸はまだ待機だ……仲が良かった分辛かろう……」

「ええ、だけど椀があんな事を……妖刀の恐ろしさも知っていた筈
なのに……」

「だが現に妖刀強奪は起きた……その事実は変わらんよ……」

「そうですか……私は下がります……」

そうして文は飛んでその場を離れた……

……妖刀の山……

『フッフ、刀が血を欲している……この力があれば……』

「見つけたぞ！犬走椀！！」

岩の上に椀は立っていた……その椀は仮面を付けていた……そして
哨戒天狗が斬りつけようとしたが、既に遅かった……

「え？……がはっ……」

哨戒天狗は地に倒れ腹部から大量の血が流れていた……椀の剣で
既に切られていた……目にも見えぬ早さで……

『トドメね……』

辛うじて生きている哨戒天狗にトドメを刺そうと剣を逆さに構えた
……そして振り下ろそうとした時……

「やめなさい！椀！！」

その声で椀は手を止め声のした方角を向く……

『文様……』

「貴女、何をしているか分かっているの？」

『分かっているからやっているのですよ。』

椀の表情は仮面で変わらないが冷徹な声で話す……………とても冷たい声で……………

「だったら私が貴女を止める……………これ以上の犠牲は無意味よ……………」

『やれるものならやってみてくださいよ……………』

そうして文と椀の殺し合いが始まった……………

……………紅魔館……………

「咲夜……………風也が手紙を残して消息を絶つたのは本当なの？」

「はい……………手紙を見ましたが……………本当のようです……………」

咲夜がレミリアの部屋に駆けつけ重大な話しをしている……………

「そう……………風也の事よ、ちゃんと戻って……………」

その時、紅魔館が大きく揺れる……………

ゴゴゴゴゴゴ……………

「何事!？」

「お嬢様!!」

一人の妖精メイドがレミリアの場所へ駆けつけて来た。

「何があつたの!」

「妹様……………フランお嬢様が暴れ始めたんです!! 私達じゃ止められません!」

「フランが……………すぐに行くわ! 何処?」

レミリアはすぐ立ち上がり部屋を後にする……………咲夜もそれについて行くこととする。

「フランお嬢様が居るのは1階ロビーです」

「嫌な予感がする……………」

そう思いながらレミリアと咲夜は1階ロビーへと向かった……………そこには形状の変わったレーヴァティンを持つフランが暴れていた……………

『あゝ、お姉様〜! 咲夜ー! あゝそびましょ』

レミリア達に気づきフランは狂気に染まった目でレミリア達を見つめる……………

「冗談じゃないわ……………あの形状は……………幼少の頃に手こずった剣……………魔剣『レーヴァティン』……………」

レミリアからは一筋の汗が出る……本当に危険な物であった……
何故あの剣が覚醒したのかは分からない……だけれども止めなければならなかった……

「良いわ……本気でやらなければ死ぬわね……やりましょう……
フラン……殺し合いを……」

『お姉様なら本気出してもダイジョウブダヨネ？』

レミリアからは紅い妖気、フランからは狂気しか感じられない妖気が溢れた……

「私が入れる次元じゃない……見てるしか出来ないって事ね……」

咲夜は遠くで見る事しか出来なかった……フランの相手はレミリアしか務まらないからだ……

54章 終焉の異変（前書き）

前回のあらすじ

風也が出した黒い光は妖夢、椋、フランの3人を狂わせた………
そしてその3人に苦戦していた幽々子、文、レミリア………3人を正気
に戻す事は叶うのか………そして血を流す戦いは続いていた………
…

54章 終焉の異変

「はぁ……………はぁ……………」

『ソロソロ終ワリ……………』

幽々子の腕には切り傷がありそこから血が流れていた……

「あの刀まで届けば良いのだけど……………」

幽々子は茶の間を横目で見る……………その先には鞘に札が多数貼られた刀が飾られていた……

『余所見トハ余裕ナンデスカ？』

妖夢はスペルの「現世斬」並みの速さで幽々子に接近していた

「くっ！！」

ドゴオン！！

幽々子は辛うじて扇で刀を受け止め茶の間に吹き飛ばされた……

『死又訳ナイデシヨウ？コレ程デ』

「これからよ……………」

『ッ！！？』

幽々子は飾られていた刀を手にし部屋から出てきていた……

「その村正の唯一の弱点……それがこの妖刀よ……」

幽々子は鞘から刀を無理矢理引き抜いた……蓋の様に貼られた札が破ける……

「ソノ刀ハ!?」

妖夢もとい村正はその刀を見て驚いた。幽々子が抜いた刀……白く輝き、妖刀とは思えない銀色の刃。

「そうよ……破魔の力を持つ……妖刀『村雨』」

「ダガ、剣術デハ私ノ方ガ上ダ!」

妖夢は刀を構え突っ込んでくる……それに幽々子は合わせた。

「自惚れを持つな……村正!」

幽々子は妖夢の一閃よりも鋭い一閃を放った……そして村正の刃が折れ地面に刺さる……

「オ、折レタ!?クソオオオオ!!」

すると妖夢から黒い妖力が抜け落ち折れた村正に妖力が収束された

……

「村正はいずれ刃を自己再生させる……もう使う気は無いけどね」

幽々子は村正の鞘に折れた村正を入れる……そして大量の札を村正に貼り付けた……これで村正は封印されたのだ……

「妖夢！……やっぱ気絶してるわね……操られたからかしらね……」

幽々子は妖夢の元に近づき妖夢を持って布団へ寝かせた……

「博麗の巫女もそろそろ気づくわね……この異変に」

そして幽々子は背に村雨を担ぎ白玉楼を離れた……

……妖怪の山……

「諦めなさい……椀……」

『まだだ！まだ終わっていない！』

椀は文の猛攻に一方的に戦況は進んでいた……

「それ以上やっても無意味よ……妖刀を捨てなさい」

『ふざけるな！』

椀はクナイの様な刃物を文に投げつけた。

「椀……そこまで……」

文はクナイを扇子で弾いた……だがその一瞬の隙を椀に突かれた……

『貰った!!』

椀は文の懐に潜り込み刀を斬り上げた……

「ぐっ！ああああ!!」

その斬り上げで文の右目あたりに刀が当たり血が流れた……

ポタポタポタ……

「ぐっ……目が……」

文の右目は痛みと血で開く事が出来なかった……右手で目を抑え距離感が掴み辛くなっていた……

『これでトドメ!!』

椀が文が怯んだその時に斬りかかりに来た……文は死を覚悟した……その時……

「そこまでだ」

椀と文の間に烏天狗が割り込み刀を素手で止めた……

「だ……大天狗様？」

「射命丸、遅くなつてすまなかつたな。俺も長の命令を無視してきたんでな」

大天狗は刀を抑えながら射命丸の方を向く。

『う、動かない……』

椀は刀を引こうとしてもビクともしない……

「落ち着きが無いな、一瞬で片をつけるか」

ゴッ！ ガシッ ゴンッ！

すると大天狗は椀の胸に蹴りを当て怯んだ時に頭を掴み地面に叩きつけた……妖刀は近くの木に刺さっていた……

「妖刀『犬走』は近づいた者の理性を無くし使用者にする恐ろしい妖刀だ。力でねじ伏せるしかない……」

『がっ………』

「妖刀の毒が抜けるまで一日は掛かる。それまで縛っておくのが懸命だ。椀に罪は無いから……」

「ありがとうございます。」

「とりあえず血を止めないとな」

大天狗は自分の服を破り文の右目に布を当て縛り血を止血した。

「俺の所で治療してやるからついて来い」

そして大天狗は椀を縄で縛り担いで連れていった。文もそれについ

て行った。

.....異次元空間.....

『ぐっ！はぁ.....はぁ.....』

風也は何処か分からない空間に座っていた.....風也の両肩や体のあちこちには巨大な目が出現してギョロギョロと目が動いていた.....

『もう.....抑えられない.....終焉の.....始まりだ.....』

そして両肩の目が完全に開き目から何かが出始めた.....

.....幻想郷.....

ゴゴゴゴゴ.....

幻想郷に地震が襲い、しかも各地では大きな地割れ、山の噴火が多数起きていた。

そして上空には巨大な異次元穴.....あの異変の再来かと思いきやあの時よりもドス黒い感覚しか無いのだ.....

その頃の博麗神社。

「何なのこの異変.....今までとは比にならない強大さ.....異常過ぎる.....」

その時魔理沙が駆けつけてきた。

「霊夢！！ヤバいぜ！森でも火災が各地で起きてる！」

「こんな異変を起こすのはただの妖怪じゃ無理よ……………妖怪……………人……………間……………っ！！」

霊夢は分かってしまった……………この異変を起こす事が出来る唯一の力の持ち主……………

「霊夢！？分かったのか！！」

紅魔城の頃の異常な力……………あの力なら容易い異変……………

「まさかとは思っけど……………多分……………あいつしか居ないっ……………」

ついに幻想郷の破滅が始まった……………あの時、風也に言った黒装束の予言……………『止める事も防ぐ事も出来ない異変』が始まったのだ……………

55章 最後の化物（前書き）

前回のあらすじ

幽々子は妖夢を村雨で止める事が出来、文は大天狗に助けられ椀を止める事が出来た……異次元空間には力の限界を超えた風也が居た……幻想郷は破滅へと進んでいくのだ……

55章 最後の化物

その頃の紅魔館……………長い戦いでレミリアとフランは疲弊し疲れ果てていた……………

「はあ……………はあ……………ここまで力を上げてるなんて……………」

『はあ……………はあ……………まだ……………まだ終わってない……………』

両者の体はボロボロで服も戦闘で破れていた。

「もうどちらにも満身創痍……………この一撃で決める……………」

レミリアが手を構えると……………巨大な槍がレミリアの手に出現し大きさを増していく……………

「神槍『スピア・ザ・グングニル』……………」

レミリアは全力でフランに投げフランはレーヴァティンに力を限界まで込め、飛んでくるグングニルにレーヴァティンをぶつけた……………

そして大爆発を起こしレミリアとフランを巻き込んだ……………

……………博麗神社……………

「魔理沙、とりあえず連れてこれるのを全員連れてきなさい。私達だけじゃ太刀打ちは無理だわ」

「わ、分かったぜ！」

そして霊夢に言われ魔理沙は戦える人を呼ぶ為にその場を箒で離れた……

魔理沙は永遠亭で優曇華、人里で妹紅、地霊殿でお空、紅魔館前で戸惑っていた美鈴、そして萃香を連れ博麗神社に集まった……途中お空と逸れたりしたが全員集まった……

「結構集まったわね……これでも勝てるか怪しいわね……」

「仕方ありません、この面子で行きましょう」

優曇華の背中にはガトリングが背負われ複数の銃が携われていた。

「風也がこの異変をね……最初信じられなかったが納得したよ」

「私も信じられませんよ、あの方が異変を起こすなんて……」

美鈴と妹紅は話したりしていた……そして霊夢は口を開く……

「じゃあ……今から一番気配のする場所に向かうわよ……多分奴は辺鄙な場所に居る筈よ……」

霊夢は飛び全員もそれに着いていく……その場所には……森だった……木が無い広場の様な場所の中心に異次元空間の入り口が浮いていたのだ……

「あった……これね……はいるわよ」

霊夢達はそこに入り、異次元空間の中を進んでいく……

その奥には……1人の人影があった……強固な外殻を纏い、
両肩には巨大な眼がある独眼の化け物が居た……

【……………】

「先手必勝よ！お空！優曇華！魔理沙！」

霊夢は起爆札を大量に投げ付け3人に攻撃をさせる為に名前を叫んだ。

「うにゅ！」

「了解です」

「任せな！」

そして3人は一斉にスペルを化け物に叩き込む……

「燃えろ！」（爆符『ギガフレア』）

「赤眼『ルナティックフラスト望見円月』！」

「魔砲『ファイナルスパーク』！！」

巨大な3人のスペルは化け物に直撃する筈だったが……だがそれは簡単に覆された……

パン……

「なっ……………嘘……………」

優曇華の口からは血がこみ上げ吐血まで至った……………

「貴様!!」

美鈴とお空は優曇華を助けようと近接戦に持ち込もうとする。

ズボオ……………

化け物は優曇華から腕を引き抜き美鈴の蹴り、お空の制御棒を両手で巧みに防御していた。

【弱い……………弱過ぎる……………】

そして足と制御棒を弾き隙だらけな2人を腕払いで同時に吹き飛ばした……………

メキイ……………

「がっ!!」

「ぐ……………」

【これで3人……………】

2人は直撃を食らった部分を抑え立つ事が出来なかった……………一撃で骨が数本折れたのだ……………

「じゃあ！私が相手するよー！」

萃香は化け物に拳を叩き込み3m程後退させた。

【・・・・・・・・】

「おい！優曇華！生きてるか！？」

「けほっ……………何とか……………げほげほっ！」

「大丈夫な訳無いだろ！腹に穴が空いてるんだぞ！」

妹紅は優曇華の腹部を手で抑え血を止めようとしていた……………

「死ぬ訳にはいかないんですよ……………師匠の手伝いしなきゃ……………」

「馬鹿！喋るな！」

「ごめん……………後をお願いね……………」

そして出血多量で優曇華は気を失った……………

「許せねえ……………あいつは絶対に！」

妹紅の背中には怒りで火の翼が出来ていた……………妹紅は本気で怒っていた……………

その頃の萃香……………

殴り合いで化け物と同等な戦いに持ち込んでいた……………だが化け物は

本気で戦っていなかった……その時、萃香の攻撃が受け流された……

「え……………」

ゴゴゴゴゴッ！

「がはっ！！」

化け物は萃香の攻撃を受け流し萃香の体に数発の打撃を叩き込んでいた……

【トドメだ……………】

化け物は腕を振り上げ萃香にトドメを刺そうとした時に霊夢が奇襲をしていた……

「宝具『陰陽鬼神玉』！！」

メキメキメキ……………

巨大な陰陽玉は化け物に直撃し少し怯んでいた……だが外殻に傷一つ付いては居なかったのだ……

「あの殻……………硬過ぎよ……………」

あの多数の攻撃を受けても無傷な化け物に勝てる確率は0%だった……
……そしてもう残っているのは3人……………4人はもう戦えない……
……一体どうなるのか……………

56章 先代現る(前書き)

前回のあらすじ

霊夢達は化け物と戦い壊滅状態になった……残ったのは霊夢、魔理沙、妹紅……そして紅魔館の姉妹の行方は……そして幻想郷にある人影が……

56章 先代現る

-----紅魔館-----

爆発の煙と閃光が晴れその場には立っていたレミリアと倒れたフランの姿があった……変形したレーヴァティンもグングニルにへし折られ元のレーヴァティンに戻っていた……

「はあっ……はあ……はあ……」

レミリアの息は乱れていた……あの激戦でボロボロになっていた……

「お嬢様！」

咲夜はレミリアに駆け寄る……

「あのフランは正気じゃなかったわ、力に固執し過ぎるのはおかしい……」

レミリアはフランの事を見抜いていた……だが苦戦はした……

「お嬢様、お休み下さい、妹様も休ませなければなりませんし」

「そうね……お願いね」

そしてレミリアもその場に倒れ気を失った……

その頃の幻想郷某所……

丘の上に1人の女性が立っていた……

「久しぶりに此処に帰ってきたが……異変か……霊夢め……
ちゃんと仕事をしてるんだか……」

その謎の人物は殺気を頼りに異次元空間の入り口に近づいていた……

……

その頃の霊夢達は……妹紅も魔理沙も化け物に重傷を負わされ戦えなくなっていた……残るは霊夢しか残っていなかった……

「くそっ!!こうなったら……『夢想転生』……」

化け物は霊夢に爪で切り裂いたが……その攻撃は霊夢を通り抜けた……

「今の私に干渉することは出来ないわ……」

その通りに霊夢の体は半透明に透けていた……

【……………】

すると化け物の体も霊夢同様に半透明になった……

「なっ!?!夢想転生を!?!」

化け物の腕は夢想転生中の霊夢の首を捉え体を持ち上げる……

「がっ……………」

化け物の爪が霊夢を狙い刺そうとした瞬間、化け物は吹き飛んび岩に直撃した……………

その場には霊夢と化け物の2人しか居ない筈だった……………だが化け物は吹き飛んだ……………

しかもどちらも夢想転生中で干渉不可能の筈だった……………夢想転生に干渉出来るのは夢想転生だけ……………

「そんな物が夢想転生だと？真の夢想転生は完全な透明になる物だ……………そう教えただろ？霊夢……………」

そこには霊夢に似た巫女服を携え……………長髪の黒髪の女性が透明状態から姿を現した……………

「なっ！……………か、先代巫女（母さん）……………」

霊夢は先代巫女がその場に居る事に仰天した……………

「全く、我が子をボロボロにしたアレは何だ？」

「元人間……………外の世界に居た普通の人間だったよ」

先代巫女は殴った手が痺れて居たのを感じていた……………

「元人間にしては割に合わない力を持つてるようだ」

化け物もとい風也は直ぐに起き上がり体制を立て直す……………

【・・・・・・・・】

「肉体破壊……………」

化け物は先代巫女の目の前に瞬間移動し爪を突き立てようとした時、先代の拳が肩に直撃する……………

メキメキメキ……………ブチッ！

腕から軋む音が聞こえ、今度の威力で腕が一本胴から千切れた。

ブシャアアアア！

腕が千切れた場所からは大量の出血が出たがすぐに血が止まり、腕が元の場所から生えて元通りになったのだ……………

メキメキメキ……………ズリユウ……………

【この程度で……………】

「再生能力も発達してるといっわけか、弾幕を使わない戦術、私に似ているな」

「私も戦っわ……………」

「霊夢は大人しくしている、今回はお前でも太刀打ち出来ん敵だ」

先代巫女は霊夢を地面に座らせて置いて強烈な踏み込みからのアッパ―を化け物に直撃させる……………体が浮いた所にコークスクリユ―を胴体にめり込ませる……………

メキメキメキメキ……ベキッ！

何かが割れる音がした……化け物が立つと胴体の外殻にヒビが入っていた……だがヒビはすぐに修復され直った……

「堪えてないな……やり辛い相手だ……」

【これなら……本気のでやれそうだな……】

その言葉と共に先代巫女の背後に回り込んで居た……

「なっ！？スピードが上がった！？」

先代巫女は背後からの爪を何とか軽傷に抑え距離を取る。

すると周りから棘が地面から突き出し先代巫女を襲った……

そして棘も避け、逃げた先には化け物が待ち構えていた……

【終わりだ……】

「！？」

スパンッ！

【……っ！？】

化け物の両腕が急に切断されたのだ……

「ギリギリ間に合った様ね……」

そこには両腕を斬り落とした張本人、妖刀『村雨』を手に持った西行寺幽々子の姿があった……

「すまない、助かった……ん？幽々子か！？」

「久しぶりね、何年ぶりかしら？」

「懐かしいが昔話は後にしてこいつを止めよう」

「ええ、そうね」

そして幽々子と先代巫女がタッグを組んだ……そして次回……
決着が着く……

57章 決着（前書き）

前回のあらすじ

先代巫女が間一髪で霊夢を助けた……だが風也はまだ本気を出しておらず、先代巫女も危険だったが幽々子の助けで攻撃を免れた。そして最終決戦が終わる時が来た……

57章 決着

「幽々子！サポートは頼む！」

「貴女こそへまはしない様にね」

幽々子は村雨を持ち、先代巫女と共に風也に突っ込む。

【そんな鈍の刀で何ができる！！】

そして幽々子の刀を受け止めると、掴む筈の刀が腕にめり込んだ……

【！？】

「やはり、貴方にも通用する武器があった様ね！」

「幽々子！退きな！」

幽々子が腕から刀を引き抜き先代が拳を胴体に直撃させ、吹き飛ばして行った……

【き、貴様あ！！】

腕の傷を再生させ、両手に巨大な爪を生やした……

幽々子は居合いで爪を全て斬り落とし、顔面の独眼に斬りつける。そしてその部分が落ち人間の眼が見えた……血に染まった様な真っ赤な眼球が……

【ぐっ……】

その隙に幽々子は風也の胴に向け刀を向ける……その後ろには構えていた先代巫女の姿があった……

「これで………終わりだっ！！」

先代巫女は幽々子が持つ刀の柄を殴り、幽々子はその瞬間に手を離し村雨は風也の胴体に見事に突き刺さった………

【うっ……ごぼお……】

風也は大量の吐血をし、刀が突き刺さった場所から大量の妖力が漏れ出した………

「幽々子、まさか助ける為にこれをやったわけか」

「ええ、村雨は破魔の力がある。だからこの手段にしたの」

そして風也から漏れる妖力が少しに減少した………そして眼球の色も白に戻っていた………

【はぁ………はぁ………俺は………とんでもない事を………】

「正気に戻ったかしら？」

「いや………幽々子、まだまだ………まだドス黒い妖力が体内にある………」

風也の全身から再び妖力が溢れる……

【幽々子さんに……巫女さんかい？……すまん……俺を……殺せ！
！もう制御出来ない！】

「なっ………！？」

【良いから殺せ！！取り返しのつかない事になる！！ぐっ………があ
ああああああ！！】

再び眼球の色が赤に染まり最後の正気で腹部から村雨を引き抜き幽
々子に投げ返した………

そして幽々子はそれを受け取る………

「………分かった………だけど死なせはしないわ」

「ふっ、幽々子も甘くなっただが、お前らしいな」

幽々子は刀を構える………風也は腕を構え爪で狙う………そして同
時で一気に踏み込み一閃する………

風也と幽々子は動かない………

「ぐっ………しまった………」

幽々子の腹部に爪が掠った跡がありそこから血が滲み出た………

一方風也は………

【ありがとう……な】

腹部から大量の血と妖力が吹き出し始め外殻が完全に消滅し人間の姿に戻り倒れた……………

先代巫女は風也の容体を見始めた……………腹部からは血が止まらない

……………

「まずい……………止血しなければ失血死する……………幽々子！大丈夫か！？」

「掠っただけだから大丈夫よ。それより風也がヤバいわ……………」

そして幽々子は風也の肩を担ぎ異次元空間を出る……………

先代巫女も次々と倒れた者を運び出し異次元空間を抜けた……………すると空が元通りの空色になり幻想郷全体が元通りに戻り、異次元空間は消滅した……………

「とりあえず怪我人を全員医者に見せないとな……………」

永遠亭に連れて行った結果、患者用ベッドは満員となっていた……………一番の重傷は優曇華と風也だった……………優曇華は意識が戻ったが風也は眠ったままだった……………不死なのは妖力がある為……………妖力が尽きれば人間と同じ……………

そして2週間が経った今……………まだ風也は意識が戻らない……………

数日前に咲夜と美鈴が永遠亭に訪ねて来ていて意識の戻らない風也

を引き取っていた……

「あれから起きないわね……」

レミリアは風也の眠ったベッドの傍で座っていた……レミリアはこうなるとは思って居なかった……風也の運命だけは何も見えな
い……これから先どうなるかも……

……博麗神社……

「霊夢、ちゃんと夢想転生を使えるように特訓しないと。怪我が治ったらビシビシとしばいて行くからな」

「本当に勘弁して……死ぬるから……あの特訓地獄だから……」

霊夢は布団に寝ていて看病に先代巫女が居た。そして霊夢は苦い顔をして拒否していた。

「お前に拒否権あると思うかい？」

「……無いわね……」

「ほら、あーんしな」

そして先代巫女は剥いた林檎を霊夢の口に近づける。

「いや！自分で食べるから！恥ずかしいから！」

「照れるな照れるな」

こうして幻想郷に平和は訪れたが束の間の休息かもしれない……
此処は幻想郷だからだ……そして風也の容体は……

58章 紅魔館の結婚式

.....紅魔館.....

レミリアは咲夜に風也の看病を命じ看病に専念させていた………咲夜の代わりに妖精メイドは今まで以上の働きで咲夜の分を補っていた………

そして異変から38日後………

「此処は………紅魔館??」

風也は遂に意識を取り戻し目が覚めた………真つ赤な天井ですぐ何処かは分かった………

風也は体を起こしてまず目に入ったのは風也の手を握って咲夜が看病で疲れ寝ていた事だ………

「咲夜には心配かけたんだろうなあ………」

寝ている咲夜の髪に触れると咲夜が起きそうになった………

「んう………」

「起こすのも悪いし………そつとしなきゃな………」

すると咲夜が目を覚ました………

「………ん?あれ?風也………起きたの?」

「ああ……起きたよ」

「本当に良かった……本当に……」

「ごめん、心配かけて本当にごめんな」

涙を流す咲夜を抱きしめ宥める風也……風也の目にも涙があった

……

そして意識を取り戻した事をレミリアに伝えた……

「ようやく起きたわね、本当に良かったわ」

「ああ……本当にすまなかった」

風也はレミリアに頭を下げて謝る。

「謝らなくても良いわよ、力の限界という物はいずれ訪れるものだし、妖力は戻ったの？」

「本調子までとはいかないが……5%くらいしか溜まってないかな……」

手のひらに妖力が出始める……だが微弱な妖力だった……

「定期的に妖力を外に放出しなきゃいけないわね。白玉楼の方で妖刀を借りておきましょう」

「ああ……じゃあパチュリーの所行ってくるよ」

「ちょっと待ちなさい、咲夜も来た所だし2人に言いたい事があるのよ」

そう言つて風也はその場から離れようとした時、レミリアが止めた

……

「唐突の無い事なだけけれど、貴方達仲が良いというかもう一線超えてるわよね？」

「「っ！」」（ギクッ

「もういつその事貴方達、結婚したら？」（ニヤニヤ

「な”っ!?”」

「っ!!!／／／／／／／／／／」

風也と咲夜は顔を真っ赤にし、顔を向き合つ……

「どうせ貴方の事だから此処に住むんでしょ？咲夜の事も好きな様だしなさいよ」

「……………ぽかーん」

「……………（コクッ」

「わ、分かった。そうさせて貰つよ」

そう了承し返事をするレミリアは満点の笑顔になっていた。

「そう なら此方で最高の準備をするから楽しみにしてなさい。咲夜は休暇あげるからゆっくりしなさい」

「あ、はあ……分かりました」

そしてレミリアはその後ブン屋を呼び広める気満々だったようだ……レミリアは文と話しその後文は新聞を作る為に編集室へと戻って行った……

「ふっ、こんな感じで良さそうだ。なんたって号外だし！」

そしてタイプライターで印刷を完了させ大量の新聞を手に持ち幻想郷を飛び回った……

「号外！号外ー！紅魔館のメイド長が両思いの男性と結婚だよー！開催場所は新聞に載ってるよー！」

そう言いながら新聞をばら撒いて行った……

……博麗神社……

「霊夢、休むぞ！ん？新聞……紅魔館で結婚式ねえ……霊夢は行くかい？」

「ご飯食べたいし行くに決まってるわ」

……守矢神社……

「あ、諏訪子様ー！神奈子様ー！数日後に紅魔館で結婚式あるらしいですけど行きませんかー？」

「良いねえ、皆で行こうか！」

「おめでたい事だから出席しないとな」

-. -. -. -. -. 魔法の森 -. -. -. -. -.

「ほほう、あの咲夜が結婚かー。相手は風也だったりしてなwww」

「魔理沙？何笑ってるの？」

「な、何でもないぜ！」

そして当日……

夜の紅魔館の庭にはいっぱい妖怪やひとが出席していた。人里の人は1人も居なかったがそれでも出席者は多かった……

「流石ブン屋ね、良い仕事だわ」

レミリアはその集まり具合を見て関心していた。

その頃の風也……

「な、なあ小悪魔……これ俺に似合わない気がするんだが……」

鏡の前にタキシードを着た風也が立っていた……………

「お似合いですよ。新郎として凄く良いと思います」

「ははは……………新郎ねえ……………」

その頃の咲夜……………

「こんなの……………初めて着たわ……………」

妖精メイド達が咲夜の着付けをしていた。しかも全力のサポートで完璧な仕上がりだった……………

そして会場……………

そして司会の場所には作者が立っていた。

「皆さん、この場に集まりありがとうございます。司会を務めさせて頂くのは皆が思っている通りのゴミ野郎の作者でございます！」

作者は久しぶりの出番だからか自分を自分で罵倒してる事に気づいて無かった……………小さな声で「自分で言っなよ」と聞こえたが作者の耳には入らなかった。

「というわけでまずは新婦の入場！十六夜咲夜さん！」

そして歓声と拍手と共にウェディングドレス姿の咲夜が登場した……………

「その次は、新郎の翔木風也さんだー！このモテ男めー！」

そして同じ様な歓声と拍手と共にタキシード姿の風也がその場に現れた。

「では新郎新婦前へ！えーっと、誓いの言葉はパチュリー・ノーレツジさんでお贈りします！どうぞ！」

そして正装のパチュリーが2人の前に立つ……………

「けほつ…………貴方達は共に愛し合い共に生きていく事を誓いますか？」

「誓うよ」

「ええ」

「では誓いのキスをお願いします」

「あ、ああ」

「んっ…………／／／／／」

そして風也と咲夜は唇を合わせキスした後、風也は咲夜を軽々と持ち上げお姫様抱っこした。

ヒューヒュー！パチパチパチパチ！！

おめでとー！

お幸せにー！

そんな歓声に裏腹に

「全く妬ましいわね！」

「妬ましい言うなって。後で酒飲み合うのも良いと思っしな」

パルスィは妬ましいオーラを出していたが勇儀に抑えられた……

「料理美味いわね………メイドも腕を上げたわね………」

霊夢も黙々と食べ物を口に運んでいく………

そうして長い長い夜は終わって行った………

59章 平和な紅魔館（前書き）

前回のあらすじ

風也と咲夜は結ばれ、紅魔館の真の住人として住む事になった。そして紅魔館ロビーでのフランの遊びに付き合っていた時に予期せぬ事が起きた。

59章 平和な紅魔館

「弾幕ごっこやろつよー！それー！」

「なっ！？本気かよ！？」

風也は妖力をコントロールし、盾を作りフランの弾幕を全て受け始めた……………

「守ってばかりじゃつまらないよー？」

「そう言ってもな……………辛いんだよっ！」

フランの弾幕を受け続け盾にヒビが入り始めた……………

「やば……………」

ガシャーーン！

「えいつ！！」

妖力盾が割れ、フランが片手を握ると風也の頭が爆発し体が吹き飛んだ……………

「フラン！やり過ぎよー！やめなさいー！」

レミリアが叫んだ声でフランは気づいた……………風也の頭が吹き飛んで首が飛んでいた……………

すると……………

ピクッ……………

指が動き首が無いまま動き始め頭がある所まで歩き首を拾った……………

「嘘でしょ……………首飛んだら普通死ぬわよ……………」

グチュ……………シュウウウ……………

「死なないからいつてえ……………」

首が繋がり風也は首を抑えて首の骨を嵌め戻した。

「吸血鬼よ私達より再生能力あるなんて凄いわね……………しかも頭まで大丈夫なんて……………」

「激痛を伴うけど死にはしないよ」

タオルで首や口の周りを拭いて休憩していた……………タオルは血で真っ赤だった。

「まあ……………貴方は妖力の量に気をつけなさい。私達総勢でも留めるのは無理なんだし」

「分かったよ……………」

その様に紅魔館では今まで以上の平和が続いた……………

そして1年後……………

咲夜と風也の2人で部屋の掃除をしていた時……

「んっ……………」

「咲夜!どうした!?!」

咲夜が腹部を抑えてちよつと苦しそうに膝をついた。

「と、とりあえず医者行こう、健康であって欲しいしな」

咲夜を抱えて風也は転移魔法で永遠亭へと移動した……

そして永琳に診断して貰い、永琳が放った一言は……………

「貴方達、『おめでた』よ……………」

「マ、マジ?」

「ほ、本当なの?」

「こんな所で嘘を言ってどうするの。貴方達の間の子が出来たのよ?もつと嬉しそうになさい」

永琳は優しい笑顔で2人に診断結果を話し2人は呆然としていた……

「当分、仕事は控えなさい。このカルテを紅魔館の主に渡せば良いわ」

風也は永琳から咲夜のカルテを受け取り一目見て本当だと分かった

……

「こりゃレミリアに伝えないとな……」

「ええ、でも、仕事も心配ね」

咲夜は今まで仕事熱心だったからか仕事の心配をしていた。

「咲夜は仕事より自分の身を心配しろって。なっ？」

「ええ」

そして帰りも転移魔法で紅魔館へ戻りレミリアの部屋へ向かい訳を話した……

「で という訳で咲夜に長期の休暇をやってくれないか？」

レミリアは風也が永琳から渡されたカルテを見ながら承諾した。

「そういう事なら無理をさせちゃ駄目ね、メイド達が咲夜の分まで働くようになったから多分大丈夫よ」

老化や部屋ではメイド達が真面目に働いていてテキパキとうごいていた。

「すまないな。俺達の都合で、俺も働くからさ」

「貴方も休むと良いわ、連日のフランの相手で疲れてるでしょ？」

「じゃあお言葉に甘えさせて貰うよ」

そして風也と咲夜は長期休暇を貰った……………そして同室で静かに時間が過ぎて行った……………

「……………なあ咲夜……………」

「何？」

「名前……………どうするんだ？」

「ええ、決めておかないと駄目ね……………」

そして咲夜と風也の名前考えが長時間行った……………2人共、考え過ぎで途中寝てしまった……………一体名前はどくなるのだろうか……………

60章 非情な別れ（前書き）

前回のあらすじ

永遠亭で「おめでた」が発覚した……とりあえず喜ぶべき事であり長く名前を考えた……そして決まった名前は……そしてあれから数年の時が経つ……

60章 非情な別れ

「月夜ー」

「はーい！」

あれから数年が立ち元気な女の子が生まれ、名前は『月夜^{つぐよ}』になった。今はまだ6歳だ。

「本当に咲夜似の元気な子ね」

「ええ、あの子は素質もありますから」

レミリアは咲夜をメイド長から解任し、1人の女性として接していた。

レミリアから対等の立場で良いと言われた咲夜は喋り方から敬語が抜けなかった。

「咲夜、もうメイドでは無いのだからそんなに敬語を使わなくてもいいのよ？」

「いいえ、お嬢様はお嬢様ですからそう呼ばせて下さい」

「分かったわ。それにしても元気ねえ……」

レミリアと咲夜はお茶を飲みながら風也と月夜の遊びをゆっくり見ている。

「ん？ごはっ！」

月夜元気良く上げた腕が風也の顎を的確に直撃させていた。

「いたたたた………」

「おとーさん大丈夫？」

顎を抑えて悶絶している風也に月夜が心配してきた。

「だ、大丈夫だから気にしなくて良いよ」

風也は月夜の頭の上に手を置き月夜を安心させた。

そして月日はどんどん流れていく………あれから10年は経つか………あの間、風也は月夜に自分が不老不死の妖怪だと教えた。だけれども月夜はその真実を受け入れいつも通り接してくれていた………

咲夜からもメイドである為の教訓を教えられ齡17歳で咲夜後任のメイド長となった。

「月夜！」

「何でしょうか？お父様。」

「お前に渡したい物があつてな。これだ」

風也が机に置いたのは2丁の銃………昔にとりに作って貰い使わなかったM11イングラムだった………

「これは……銃ですか？」

「これをお前にやるよ。俺は使わないしな。お前にはナイフはあまり馴染まなかつたらしいからな」

「お父様、ありがとうございます。」

月夜は2丁の銃を手取る……………グリップも完全に月夜用に調整されていた。

「ほら、餞別の賢者の石だ。」

風也は箱を手で掴み机に置く……………その中には黄色の賢者の石が数百個は入っていた……………

「これをマガジンに1個入れれば弾は自動的に作られる」

そしてある程度の銃の最低知識を教えられ月夜は咲夜の部屋に居た。

「本当に貴女は私に似たわね。あの時の私が目の前にいるみたいだわ」

「お母様……………」

「貴女は自信を持ちなさい。でないとお嬢様に叱られるわよ？」

「お嬢様は気難しい方ですが、本当にお優しい人だと思います」

「そうよ、だから私や風也は此処に居るのよ。だけど……………もう……………」

咲夜が急に言うのを止めた……………

「もう……………？お母様？」

「月夜、貴女は此処の紅魔館のメイド長としてメイド達の全指揮をお願い出来るかしら？」

「今更何を言うんですか、当たり前ですよ。お母様以上の働きをしてみせます！」

「そう……………その言葉が聞きたかったわ……………つごぼっ……………」

咲夜は急に血を口から吐いた……………そして椅子から落ち床に倒れた……………

……………

「お母様！？」

月夜はすぐに咲夜の元へ駆けつけた……………

「お母様！しっかりして下さい！」

「お嬢様の事をお願いするわよ？……………後……………月夜、これを……………」

咲夜は震える腕で銀の時計を月夜に渡す……………

「これは……………お母様の大事な銀時計じゃ……………」

「大事な物だから貴女に渡すのよ……………」

そして廊下から声が聞こえた……………

【風也様！！此方です！】

【咲夜さんが！！】

「咲夜！！」

メイド達に知らされ風也はすぐに咲夜の部屋へ駆けつけてきた。

「何でこの事を隠してた！お前、病気持ってたのか！？」

「だって、貴方に言うとお刺に心配するでしょ？だから言わなかったのよ……………」

「馬鹿野郎……………言われなくても充分悲しいだ……………る……………」

風也の目には涙が流れていた……………風也は分かってしまった……………
咲夜はもう間に合わない……………

「風也……………月夜……………お嬢様を……………お願い……………ね……………」

そして咲夜の腕は力なく倒れた……………

「嘘……………だろ？咲夜！起きろよ！！咲夜ああああ！！」

「お母様ああああ！！」

風也と月夜はその場で泣き叫び、その声が紅魔館に響いた……………

そしてその次の日……………咲夜の葬式が紅魔館に居る全員で行われた……………

全員、涙を流していた……………レミリアも咲夜の墓の前に花束を起き涙を流す……………

「未知の病気……………永琳でも分からなかった病気で死ぬなんて……………咲夜らしくねえよ……………」

風也は呟いた……………月夜はその声を聞き取っていた……………

「お父様……………」

そして葬式が終わってからレミリアや美鈴、風也も元気が無かった……………

月夜が元気を出して貰おうとレミリアに話しかけると笑ってくれるが凄く悲しい笑顔だった……………紅魔館の中心となっていたのは咲夜だったからだ……………

風也の気配も何時もの風也ではなかった……………美鈴も居眠りを全然せずずっと門の前で立っているという事もあった……………

その後、風也は月夜を連れ、紫の場所へと向かった……………

終章 決断……その後（前書き）

前回のあらすじ

咲夜を失った紅魔館は一気に元気を失った……皆、悲しい思いを背負い嘆いていた……そして風也は月夜にある選択を迫る……それは……

終章 決断……その後

風也と月夜は紫達の前で座っていた。

「紫さん……月夜を……人間界に送ってやってくれ……」

「っ!?!?」

「し、正気なの?」

「ああ……レミリアからも承諾は受けてる……月夜には……あの
悲しみを二度と受けて欲しくないだけだ……」

「分かったわ、月夜、準備は良いかしら?」

「は、はい」

「ある場所まで俺が案内する……」

そして紫は人間界へ繋がるスキマを開け、2人はその中に入った……

……人間界……

そして古い神社の社の中でスキマが開く。

「此処が俺の故郷だ」

「此処が……」

風也と月夜は森を歩き続けると1つの村に辿り着く……………風也が人間界に居た頃の村だ。

そして一軒の家の前に立ち、中に入る……………そこには人は居なく、1通の遺書があった……………

――風也へ――

風也、お前が行方不明になってから私達はずっと待っていた……………だけでも私達はもう歳でお前が生きてあの森から帰ってきた頃には私達はもうこの世に居ない筈だろう……………もう妻も無くなり私1人でお前をまつていた。きつとお前は『幻想郷』に選ばれたのだと信じている。私も若い頃、あの森で幻想郷に迷い込んだ事がある。姉妹の神にお世話になって帰れたのだ。あの場所は妖怪が多い……………気をつけて生きておくれ……………

祖父より……………

――

「……………」

手紙を読み終わり風也は絶句していた……………

「お父様？」

「祖父も……………幻想郷に居た事があるらしい……………」

「……………」

「月夜、この先の生き方を選べ……………人間界で暮らすか……………幻想郷で暮らすか……………」

突然の選択に月夜は驚いた……………だけど月夜の選択肢は1つしかない……………」

「お父様、私はお嬢様のメイドです。ですから幻想郷にはなれず生きていきますよ」

「あの悲しみを何度も味わう事になるぞ？」

「ええ、分かっていますよ」

「じゃあ幻想郷に帰ろう……………その前に……………」

風也は家を出て、振り向くと掌から火を出し家に火をつけた……………」

メラメラメラ……………」

「お父様、良いのですか？」

「ああ、俺はもう人間じゃない……………俺の居場所は幻想郷だけだ……………」

……………」

そして村を離れ森を通り幻想郷に戻った……………」

そして紅魔館への帰り道での会話……………」

「お父様、1つだけ聞いても良いですか？」

「なんだ？」

「私が半人半妖なんじゃないかって事です……………」

「……………」

「お父様は昔人間で妖怪になったと言っていましたよね。その血を持っているという事は私が半人半妖だという可能性が出ます……………」

「月夜は頭が良いな……………だが……………それ以上は教えられん」

すると月夜は足を止める。

「絶対にですか？」

「絶対にだ」

「だったら……………力尽くでも教えて貰いますよ……………」

「俺に勝てるだけでも？」

風也は殺気を全身から出し始める……………

「やってみせますよ……………」

月夜は大型ナイフと銃を構えた……………

それに合わせ風也はあの異変の時の形態になったのだ。風也は長い間で力を完全にコントロール出来ていた。

【賢し過ぎるのも悪いと思うがな】

ザシュツ……

その瞬間、風也の腕が斬り飛ばされた……

「これでも理由になりませんか？」

【あのナイフの周りに何か纏っている……妖力か！】

風也の腕を斬り飛ばした月夜のナイフには斬れ味を増す為に妖力が纏われていた。

その直後、風也の全身にナイフが刺さり針千本状態となった……

【なっ……この能力は……】

「お母様の能力ですよ。時を操る能力……」

そして風也は悟ったかのように殺気を抑えた……

「分かった……負けたんだ、全てを教えるよ……」

そして風也は知っている事を全て話した……月夜は半人半妖であり歳を取る速度が後から遅くなる体質だった……

「それなら、お嬢様に長年仕えられるって事ですね。」

「そういう事になる、だが人間との別れは悲しいぞ……」

「承知しました。」

そして2人共紅魔館に戻りレミリアは報告をし、長年の年が過ぎて行った……………

150年後……………

紅魔館では風也も歳を取らず、月夜もあの時より+3歳程の外見で過ごしていた。レミリアやフランも平和に過ごしていた。

だが風也はこの150年の間で葬式に数回参加していた……………もうこの世には霊夢、魔理沙、アリス、早苗が居なかった……………

これが不老不死である悲しさ、別れである……………だが風也はそれを乗り越え月夜と共にレミリアに仕えた……………美鈴もパチュリーとも仲良く……………

咲夜を失ったのは紅魔館にとって一番悲しい事……………だが皆それ乗り越えこの幻想郷で生きて行った……………

風也は妖力が尽きない限り永遠に生きる事になる……………その分別れ……………だがそれを承知で生きているのだ……………それが生きるという性なのだ……………

F i n

41章 こいしの暴走(前書き)

操作ミスで消しちゃったW

41章 こいしの暴走

ガチャ……ギイイイイ……

風也は背負っている気絶したお空を落とさない様に片手でゆっくり玄関を開けた……背中当たる柔らかい感触がちょっと苦手だが

……

「無事帰って来ましたね……貴方……怪我を……」

風也の頭や手から滴る血にさとりは気づいた……

「お空はその部屋のベッドに寝かしておいて下さい。私は救急箱を持ってくるので……」

さとりはそう言うと奥の部屋に戻った……風也は指示された部屋を開けお空を静かにベッドに寝かして部屋から出た……

すると数分も経たぬ内にさとりが猫耳の少女と一緒に戻って来た……

……

「本当にお空がご迷惑を
かけてすいませんっ！」

猫耳の少女は風也に深々と頭を下げてきた……

「いや、そこまでの事じゃ無いさ」

「いえ、お空を止める何て命が何個あっても足りないくらいですよ

……本当にありがとうございます！あ、申し遅れました。私はさとり様と主従の関係にある火焰猫燐と言います。気軽にお燐と呼んでください。」

お燐という少女は無邪気な笑顔で会釈した。

「燐、まずは傷の手当てをしましょう」

さとりは救急箱から包帯を取り出し風也の頭に巻き始めた……
お燐もガーゼで風也の手の血を拭き包帯を巻いていた……

「これで良いかしら？」

「ああ……ありがとうございます」

「良ければ数日は泊まっていくと良いわ」

さとりは風也を空き部屋に案内し扉を開けた……

「さとりって結構可愛いな……」

風也が一瞬そう思った……

「風也さん？貴方今私を可愛いと思いませんか？丸分かりですよ」

「まあ本当の事だと思っけどな」

「~~~~~／／／か、からかわないで下さいっ／／／」

さとりは恥ずかしく顔を真っ赤にして照れていた。

「それに、私は忌み嫌われる妖怪なんですよ？そんな私なんか……」

「たとえ周りに忌み嫌われたとしても、好意を持つ人も居るだろ？」

風也は当然の如くサラッと言い放った。

「そ……それは……／＼／」

「まあ、そんなに自分の事をマイナス思考に思っ……俺は部屋で休ませて貰っよ……」

風也は去り際にさとりの頭に手をポンツと置き案内された部屋に入った……

さとりは風也の入った部屋の扉を赤い顔で見ている……その時……

「おねーちゃん、顔が真っ赤だよー？」

さとりの後ろに帽子を被った少女が立っていた。気配が全然無かったがさとりは驚かず振り向いた。

「こいし、後ろに立つのはやめてちょうだい。」

「はい、後、あのお兄ちゃんは誰なの？」

「お空を止めてくれたのよ……だから怪我もしてるの」

するとこいしは何かを考え始めた……そして何か思い付いた表情

でさとり提案をした。

「だったらお姉ちゃん、私達2人で
するのどうかな？
お礼にねっ」

「うっ……こいし!?本気なの!？」

さとりは聞いた瞬間に耳まで赤くなる程顔が真っ赤になった……

「ふふふ……あのお兄ちゃんにサプライズと行こうよ(ニッコッ)」

「まあ……主導権はこいしに任せるわ……」

「ありがとー、じゃあ1時間後あのお兄ちゃんがいる部屋の前にね」
するとこいしは楽しみが出来たような元気な表情でその場を去った。
さとりは流れて承諾してしまった事にちよつと後悔しかけていた。

その頃、風也はベッドで横になっていたが頭を抑えていた……

「ぐ……くそっ……頭痛が……」

風也の脳裏には過去の時代にレミアとフランから奪った記憶がフラッシュバックを起こしていた……

そして十数分は苦しんだろうか……頭痛は治まった……

「はぁ……はぁ……俺の体も……限界が近いのか……」

風也は頭痛が治まった事に安心し目を瞑り睡眠を取ろうとした……

…そして寝始めた……

モゾモゾ……

深夜……真つ暗な部屋に動く二つの影があった……ベッドには風也が寝ていた……そこには部屋に侵入したこいしとさとりが居たのだ。

「はむはむ……何か落ち着く」

「こっ、こいしっ！何て事を……」

こいしは寝ている風也の耳を甘噛みして和んで居た……さとりはその光景で顔を手で覆っていた。

「ふふふ、だって無防備なんだもん、イタズラくらいすこししたいし」

そしてこいしの悪戯はエスカレートしていった……そして悪戯をやり過ぎたせいか風也が起きた……

「……一つ聞いて良いか、起きてからこの光景はどういう事だ……」

ビクウツ！？

「あ……あはははー……」

「~~~~~っ／／／／／」

こいしは誤魔化そうと……さとりは顔を真っ赤にして俯いていた……風也は呆れた表情だ……

「はぁ……寝込みはやめてくれ……前にも襲われてるんでね……」

「ほ、本当らしいわね……」

「そうなんだ、じゃあ横で寝ても良い？」

「それくらいならな……だが襲うなよ……」

風也はベッドに寝転がり目を瞑った……こいしは横にくっつき寝始めた……騒ぎ疲れた様だ……

「はぁ……やっとこいしも寝たわね……」

「さとりはどうするんだ？まあ横に居るのは1人でも2人でも変わらんしな」

「……／／／／」

さとりはこいしと逆の方に付き横になった……

「朝には此処を出発するよ……ヤマメさんにも手配して貰ってるからな……じゃあおやすみ」

そして本当の就寝を開始した……

朝……

「ふああ……………2人はまだ寝てるか……………その方が好都合だな……………」

風也は無音で部屋を離れコートを着た……………そして邸から離れヤマメに指定された場所へと向かった……………

「おーい！風也君！こっちこっち！」

そこには縦穴の真下でヤマメが手を振っていた。

「おはようございます。ヤマメさん」

「地上に帰るならこの子にお願いすると良いよ。キスメ、お願いね」

「……………わかった……………」

ヤマメは大きな桶の中に居る少女と話していた……………名前はキスメというらしい……………

「じゃあ桶の中に入った入った。また地霊殿に来てくれると良いな」

「ああ、そのうちにな。」

風也は桶の中に入りヤマメの言葉に返答をした。すると桶が糸に引っ張られ上に上がって行った。

「じゃあね…」

そして地上へと桶は上昇していた……そして長い長い縦穴を進んでいた……十数分で地上への光が見える筈なのだが光が弱かった……

「キスメ、此処で充分だ。ありがとうな！」

風也は桶からジャンプし、壁を蹴りながら上がり地上に着いた……

「肌寒い気温……この空気の異常さ……これは……」

風也が妙な気配を感じた方向を見ると遠くに巨大な城が建っていたのだ。ある筈の無い城が……

東方幻想録 主人公設定

東方 オリジナル小説 主人公設定

名前：翔木風也シヨウキフウヤ

性別：男

年齢：17歳

種別：人間

使用スペル：黒符・白符・不明……

武器：刀、小刀、にとり製武器、素手、弾幕

容姿：黒髪ノーマルヘア、茶目、黒いコート着用

（黒符使用時は全身がオーラで纏われる為詳細不明。目は赤くなる）
幻想郷への経緯：人間界の古い廃墟神社の中でスキマを見つけた為。

性格：素は優しい性格である。女性に何か言われると大半断れない。守る物や守る者があれば命を懸ける。

身体能力：実戦を重ねたからか、常人を凌ぐ身体能力。黒符使用時は妖怪以上の能力に激増。白符と黒符の併用使用時はレミリアを凌ぐ力。

使用技：美鈴直伝格闘技、太極拳、パチュリー直伝七曜魔法、妖夢流剣術

人間界では：小さな村に住む青年。この時でも身体能力は高めであった。

ある意味の経験：数回襲われてます。幻想郷で……
死にかけた経験：10回以上

符使用時の変化：黒符を使うと全身に黒いオーラが纏われる。全身強化の部類。触れた物を自意識で破壊可能。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9802s/>

東方幻想録

2012年1月14日02時47分発行